

東京レイヴンズ～二天
龍を従えし者～【本編
完結】

眠らずの夜想曲

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

『ハイスクールD×D』の世界での物語を終えた神浄刃。またまた例の神様に呼ばれた。神「さて、そろそろ創造神として確立してからかなりの時がたったのじゃからのう、世界を創造してみい」刃「え？マジですか……」

『神浄シリーズ』の第4弾!!創造神として確立し世界を創造、破壊神の力も制御した主人公は陰陽師が公になっている世界で何を手に入れるのか……

目次

主人公設定	1
プロローグ	6
『神使』詳細	17
第1章 泰山府君祭	
第1話く久しぶり：いや、懐かしい	24
第2話くはあ・・・なんだかな	58
第3話くこれが俺の力だ	80
第2章 陰陽塾	
第1話くこれから	110
第2話くおおう、まさかの・・・	136
第3話くデート	165
第4話く鬼を喰った？	190
第5話く生成った？	229
第6話く修祓してやるぜ!!	254
第7話く神童(笑)	278
第8話く刃・・・	330
第9話く恋心、それは・・・	352
第10話く法師、それは・・・	384
第11話く術比べ？相手になるのか？	

587	第19話く護法・・・ぶふつく	572
	第18話く・・・闇夜く	549
	第17話く花火・・・久しぶりにみたな	523
	第16話く姫か・・・リアスを思い出す	507
	第15話く強襲？これが？く	482
	第14話く髭切の分際で!!く	468
	第13話くはあ・・・神扇つて・・・く	436
	第12話く邂逅つてなく	401

	第20話く陰陽の道く	601
	第21話く魂を呼ぶ分けないでしよく	617

主人公設定

主人公設定

名前

・ 神淨 刃 (かみじょう やいば)

種族

・ 神 (創造神・破壊神)

容姿

・ 黒髪で肩にかかるくらい。後ろ髪は腰のあたりまである。後ろ髪はレティシアからもらった紐で まとめている。

能力

・ 創造

万物を創造できる。無論能力も。

・ 破壊の刀剣 (デストラクション・ブレイド)

破壊神の力を解放した時限定。

一刺しで半径6mのもの全てを“壊す”。壊れる概念があるものすべてを。例：生

命力、心臓、心など。

10秒に一度『Destroy!』の音声と同時に効果範囲を6mずつ広げていく。対象を斬ると対象をマージングして10秒ごとに全体の10%ずつ崩壊していく。わかりや すくHPで例えてみる。最初のHPが100だったとする。すると10秒たつにつれてHPが10ずつ減少するのだ。10秒たつと10、さらに10秒で10という具合に。最終的には、対象を崩壊させ尽くす。この刀剣は太古の破壊神。この破壊神の力に刃自身の破壊神の力を合 わせて使う。

・ATフィールド

創造で刃が創った能力。基本原作通り。

・モード『エンジェル(天使)』

ATフィールドを攻撃重視にする。新劇場版エヴァンゲリオン破の最後でシ
ンジが使ったよ うに、変形、変質させて攻撃する。容姿は背中にATフィール
ドでできた3対6枚の翼がで てくる。頭の上にはEVA初号機のような輪が
出てくる。

・モード『ブレイカー(消滅)』

ATフィールドでできた槍が出てくる。この槍で刺した対象の異能を消す。
簡潔に言うとう 想殺し(イマジンブレイカー)の槍版。容姿はあまり通常と変

わからない。背中からATフィー

ルドのエネルギーが噴出されている。

・モード『ディザスター（天災）』

サード・インパクトを意図的に起こせる。ただし、展開される赤い渦に吸い込まれていくのは、刃が指定したものののみ。

・写輪眼

原作と同じ。

・永遠の万華鏡写輪眼

原作の能力を全部使える。

・時間を操る程度の能力

時間を自由に操れる。進めたり、止めたり、戻したりなど。

・境界を操る程度の能力

境界を自由に操れる。

・空間を操る程度の能力

空間を自由に操れる。空間を圧縮したり、消したり、創ったりできる。

・赤龍帝の龍刀（ブーステッド・ドラゴンブレイド）

原作と同じ。覇龍も完全に使える。

・白龍皇の龍刀（ディバイン・ドラゴンブレイド）

原作と同じ。覇龍も完全に使える。

・聖力

無限。

・魔力

無限。

・霊力

言わずもがな。無限。

・神力

神の力。無限。

※上記の能力はすべて刃自身の能力と刃が創造神の力を使って創った能力です。なおこれからも能力は増えていく。

“問題児”の方のはまだ記されていないが、一度刃は能力をすべて失う。ただし、創造神と破壊神の力は魂に定着していたので、無事だった。そして、創造神として確立したので、さまざまな能力が使えるようになった。

プロローグ

——神界。

毎度おなじみのこの世界。

何回も……と言っても、まだ数回だ。片手で数えられる。

ちなみに、ここに来ると俺は創造神の姿に戻る。

「久しぶりじゃのう」

「ああ、数万年ぶりか？」

「うむ、そのくらいだったじゃろう」

前回ここに来たのは『D×D』の世界に行く前だったからな。

そのくらいは余裕で経っただろう。

あそこは『箱庭』と同じで悪魔、天使、堕天使みたいな人外がたくさんいたからな。

俺も長くないな。

「それで？今回はどうするんだ？」

また前回のよう世界を決められていて転生か？

「今回はのう、お主に世界を創ってもらったのう、その世界に行ってもらおうとおもっているのじゃ」

「ふうん……え？マジで？」

「うむ、大マジじゃ」

創造神になってかなりの時が過ぎて行っただけ……やっとか。やっど世界の創造か。確かに、小さい世界なら今まで何度も創造してきたけどさ、ちゃんとした世界を創造するのは今回が初めてだ。

「どんな世界がいいかな〜♪ど〜しよつかなく〜♪」

「うかれとるところ悪いんじゃがのう……創る世界はお主にもわからんよ」

「ほおえ？」

え？なんで？だつて俺が創るんだよ？なんで俺が決められないんだよ。

「実はのう、世界の創ることはお主がするんじやがどのような世界になるかはわしにもわからないのじや。今までは世界を創造してからお主を飛ばしておったから、事前に説明できたんじやが……」

「そうか……」

なるほどね。

自分の好きな世界が創造できない。

でも……

「しようがないよな。じやあ、爺さん。早速始めようぜ」

「そうじやのう。ほれ、この球体に手をかざして創造神の力を開放せい」

「あいよく……ハアアアアアアア!!」

力を一気に開放する。

「馬鹿者!! そんなに一気に解放さ——」

最後に爺さんの声が聞こえた。
ここで俺の意識はなくなった。

—— 神界、数千年後。

「あ——……なんかすんげえ寝てたな」

「やっと目を覚ましたか馬鹿者」

目を覚ました？ やつと？

「なあ……俺どのくらい寝てた？」

「ざつと2000年ぐらいかのう」

「……そうか」

「そうじゃ。一気に力を開放しすぎじゃ、そのせいでこの世界も少し影響を受けたんじゃないぞ」

はあ……面倒だ。

2000年も寝てるとか……本当に一気に開放しすぎたんだな。

「さて、早速お主をお主が創った世界に送るぞい」

「ああ、わかった」

「そうじゃった、伝え忘れとったわい。お主の創った世界には『神使』は連れていけないんじゃない。じゃが、月に一度。一人だけ呼び出せる。全員呼び出せるのは一年に一度だけ

爺さんがリモコンのボタンを押す。
すると、いつも通り足元に穴が開く。そして、落ちる。
さて、どんな世界なんだろうか。

——
???

チリン……チリン……

風鈴の音が聞こえてくる。

まずは自分の姿を確認する。

この手の大きさから……小学生か？

そしてこの格好と風鈴の音、そしてこの暑さから今の季節は夏だな。

今の俺の服はタンクトップに半ズボンだ。

そして……目の前にはかわいい女の子。

これは!? どストライクだ!!

いやあ、レティシアやペストに初めて会ったときに似ているなあ。

とりあえず今の状況を整理しよう。

どうやらこの女の子と俺は二人で遊んでいたらしい。

そして、なぜか俺と女の子は向かい合っている。

ふむ、まったくもってわからん。

でも女の子が怯えているのはわかった。

だって、急に俺の後ろに隠れて振るえているんだもん。

女の子は泣きそうな声で俺に声をかけてきた。

「何か、私を見てるの」

何か？

何かってなんだ？

俺は女の子の視線の先を見る。

そこには何もなかった。

いや、何等かの力があるのは感じ取れた。

俺は『写輪眼』を開眼させた。

『写輪眼』力を見ることができからな。

あらためて見てみると……なんだ？

人のような形だ。

でも……ああなるほど。

『霊』か。

でもそれを伝えるともっと怯えてしまうだろう。

「そうか……でも大丈夫だ。何があっても俺が守ってやる。怖いものからな」

こう口に出してしまった。

すると女の子はモジモジして、顔を真っ赤にして俺にこう言った。

「私のシキガミになつてくれるの?」

「シキガミ?……ああ式神ね。いいよ、でもキミにも『神使』になつてもらいたい」
「シンシ?シキガミと同じ?」

「まあそうかな」

「ならいいよ。じゃあ、約束だよ?」

女の子は小指を俺に出してきた。

ああ指切りか。

すごい久しぶりだ。

指切りをするなんて。

そして、答えは決まりきっている。

俺も小指をだして、女の子の小指に絡める。

「ああ、約束だ」

俺はニカツつて笑いながら答えた。
すると女の子も笑顔になった。

そう、この約束がすべての始まりと気づかずに。

『神使』詳細

『吸血鬼』

レティシア・D・神浄

・基本原作通りの強さだが、『神使』になつて分基本スペックが大幅にアップしている。更に刃の本妻であることが影響し、神格化しているといつても過言ではない。ゆえに、他の『神使』とは強さの次元が違う。刃のことは『刃』と呼ぶ。

レミアア・S・神浄

・ツェペシュの末裔と名乗っている。妹のフランドールを刃に助けてもらう。そして、フランドールが『神使』になり、刃について行かないといけないと聞き、自身も『神使』に。刃のことは『兄さん』と呼ぶ。

フランドール・S・神浄

・刃が幻想郷に行き、紅魔館の地下で発見。狂気の制御のために『神使』に。『網使』には自分から志願した。刃のことは『おにーちゃん』と呼ぶ。

『龍（ドラゴン）』

紅（こう）

・『真なる赤龍神帝（アポカリユプス・ドラゴン）』『グレートレッド。だが、『箱庭』で出会い、意気投合。名前が長くて呼びにくいと言う理由で紅（こう）という名前を付けられる。強さは原作同様、無茶苦茶強い。刃のことを『お兄ちゃん』と呼ぶ。

オーフィス

・赤龍帝ドライグの気を感じたとかで『箱庭』に来た。いつものドライグと違うのが気になったらしく、ついてくることになった。強さは原作同様無茶苦茶強い。刃のことは『刃』と呼ぶ。

ティアマツト

・『業龍（カオス・カルマ・ドラゴン）』で五大龍王の一匹。刃と決闘をして負けたので刃の使い魔——『神使』になった。刃のことは『刃』と呼ぶ。

『魔法（魔砲）』

神浄なのは

・元、高町なのは。魔法……魔砲少女。本来は『神使』にはならないはずだったが、ヴィイオが刃のことをパパ、なのはのことをママと呼んだので『神使』になった。仕方なくなつたつもりだったが、刃との距離はだんだん近づいていき、今ではなつてよかつた

と思っっている。刃のことは『刃くん』と呼ぶ。

フエイト・T・神浄

・魔法少女。『リリカルなのは』の世界で一番初めに刃が出会う。そしてジュエルシードを集めているうちに親しくなる。刃のことは『お兄ちゃん』と呼ぶ。

アリシア・T・神浄

・プレシアと約束をして、刃が生き返らせる。ただし『神使』として。刃のことは『お兄ちゃん』と呼ぶ。

神浄ヴィヴィオ

・刃が弱っているところを拾う。そして目が覚めると刃のことをパパと呼んだので娘にした。変態科学者にさらわれた後、救出し、そのあと『神使』になりたいといいそれを刃が承諾。刃のことは『パパ』と呼ぶ。

神浄ほむら

・神様がハマしたのを修正するために『まどか☆マジカ』の世界に刃が行ったときに出会う。まどかを魔法少女にさせなかったので役目は終わったといい、刃についていくことに。刃のことは『刃』と呼ぶ

霧雨魔理沙

・刃が幻想郷に行ったときに『神使』にした。本人曰く、『普通の魔法使い』というこ

とだが、『神使』になった今では、必然的に『普通の魔法使い』ではすまない技量になる。苗字については、「神浄だと響きが悪いぜ!!」とのことで『霧雨』のまま。刃のことは『刃』と呼ぶ。

『精霊』

神浄ペスト

・元『黒死斑の魔王』。黒死病で命を落とした八千万人の死者の霊群の代表。ギフトネームは『黒死斑の御子(ブラック・パーチャー)』。

ハーメルンの魔道書から切り離されて神霊でなくなり、霊格が衰えたが、『神使』になったことよって今まで以上の力が発揮できるようになった。刃のことが大好き。刃のことは『お兄ちゃん』と呼ぶ。

『妖怪』

神浄ミツキ

・九尾の妖狐。魔王にやられたところを刃に助けられ、そのまま『神使』に。九尾の姿に戻ると大人の姿になり、口調も変わる。刃のことは普段は『お兄様』と呼び、九尾の姿になると『刃』と呼ぶ。

神浄黒歌

・悪魔に追われて瀕死のところを刃が救出。種族は猫又の猫？。刃のことは『刃』と呼ぶ。

神浄白音

・黒歌の妹。刃は魔王城に乗り込み、救出。刃のことは『刃兄様』と呼ぶ。

『特殊』

神浄ルカ

・元、ルイオスの下僕。封印したあと、こっそり一人で封印を解き『神使』にした。刃のことは『お兄ちゃん』と呼ぶ。

『能力者』

神浄メル

・『箱庭』から仲間を探しに他の世界を周っているときに、『とある魔術の禁書目録』の世界でアレイスターに指令が出て、雑貨稼業(デパート)に行つたときに出会つた。パロクソに扱われていて、雑貨稼業を殺してから救出。その後、刃と一緒に行くことを強く望んだので『神使』にした。

能力は元は『空気掌握』から『気体掌握』に変更。効果は半径100m以内の気体を自由に操れる。量を増やしたり減らしたり相手の周りだけ真空状態にすることもできる。刃のことはどの世でも一番好き。刃のことは『兄様』と呼ぶ。

神浄・M・御神

・元は打ち止め（ラストオーダー）。バグを修正した後、刃のことをお兄様としたいといってきた。能力は美琴と同等かそれ以上。刃のことは『お兄様』と呼ぶ。

『聖剣使い』

神浄イリナ

・『D×D』の世界でココビエルにより『聖書に記されし神』の死を聞かされ絶望。その時、刃が手を差し伸べついでいくことに。剣は『エクスカリバー』七種類の能力を自由に使える。刃のことは『刃くん』と呼ぶ。

神浄ゼノヴィア

・イリナと同様の理由で『神使』になる。剣は『デュランダル』。今では自由に振り回せるようになった。刃のことは『刃』と呼ぶ。

『巫女』

神淨朱乃

・元、リアスの眷属。刃が世界を転移するとき連れて行ってほしいと頼み、それを刃が承諾。刃のことは『刃』と呼ぶ。

博麗霊夢

・幻想郷に行ったときに『神使』にした。博麗神社の巫女であるため、基本は『神界』ではなく『幻想郷』にいる。刃のことは『刃』と呼ぶ。

『戦乙女』

神淨ロスヴァイセ

・オデインのジジイに置いて行かれたところをGet☆待遇の良さから刃の元へ。だがその後、刃に助けてもらい刃に惚れる。そしてイイ感じに……刃のことは『刃』と呼ぶ。

以下、増加しだい加筆。

第1章 泰山府君祭

第1話～久しぶり・・・いや、懐かしい?～

——教室。

爆睡。

それが今の俺を見た人の感想だろう。

夏期講習。

それが今の俺がやらなければいけないものだ。

だがな……

暑い!!

なんだこの教室は!!

窓開けろよ!!

それかせてみてカーテン閉めろよ!!

がー、イラつく!!

暑くて爆睡してもすぐに目が覚める。

教卓では、女の教師が『陰陽術』のことを説明してる。
はつきり言おう。

今更そんなもの必要ない。

だってそうだろう？

俺には様々な能力が使える。いや創れる。

だから必要ない。

確かにこの世界では『忍術』や『念』は目立つけど。

ああ、あとさ、なんか俺『土御門』の分家の人間だった。名前は刃だけど。

容姿は金髪にもみあげのあたりがこげ茶色。

この容姿は!!

土御門 春虎

ノオオオオオオオオ!!!

なんでだよ……なんでなんだよ!!

そしてそれと同時に分かった。

この世界が——

東京レイヴンズ

の世界だってことが。

ああ……でもよかった。

戦いがある世界で。

戦いになかったらこの力を隠すのに一苦労だぜ。

ヴーヴー

そんなことを考えていると、スマホのバイブが着信を伝えてきた。

画面に映るのは『北斗』の文字。

またあの『式神』か……

あいつは女の子の姿をしているが、『式神』だった。

きつと夏目のだろう。

だって俺、キャラクターと世界観ぐらいいしか覚えてないし。

何万年も前の記憶だぞ？

そんなにしっかりと覚えてられるか!!

あ、そうそう、スマホはもちろんシカトだ。

だって今補修中だもーん（笑）

視線を感じて、ふと右隣をみる。

そこには太いヘアバンドを頭に巻いている『阿刀 冬児』がニヤツつと笑いながら指をさしていた。

どうやら俺は涎を垂らしていたらしい。
おっといけね。

それにしても……いい天気だな。

——
帰り。

補修が終わった俺は、このクソ暑い中を冬児二人で歩いて帰宅していた。
途中で買った『ガリガ〇君・ソーダ』をかじりながらな。

「補修ダリい」

「寝てただろ」

的確なツツコミをありがとう。

でもな、寝ているのだからかなり疲れる。

なんせ暑いからな。

「おまえはダルくないのか?」

「東京よりこっちのが涼しいからな」

確かにあのアスファルトだらけのところよりは涼しいだろうな。

木がなくて空気も悪いし。

喋りながらもバクバクつと一気にアイスをかじる。

「お、当たりだ」

野郎!!

なかなか当たらないアイスの当たりをいとも簡単に……
俺も一気にアイスをかじる。

「おおう？大当たり？」

「ハア!?マジかよ……それって確か数億本に一本だったような気がするぞ」

マジで!?超ラッキー!!

「おまえって本当に運がいいな」

「まあ、な」

そう、この体になってから以上に運がいい。

「お、来たぞ……」

タタタタタタタタタタ

この足音は……

バツ!!

跳んだな。

俺はそれを横にずれてかわす。

「刃〜!!」

ダキツ!!

とはいきませんでした〜。

残念。

「もおく、なんで避けれるの?」

「それは俺が神様だからだ」

「またまた〜、そんな嘘言っちゃって〜」

嘘ではないんだけどな……

そんなことを考えていると、北斗の腕が俺の首に絡まってきた。入ってはいない。てか入れさせない。

ムニユン

背中からすばらしい感触が伝わってくる。

これは役得ですな。

「なくんで電話に出なかつたんだよ、バカ刃」

「そんなこと言われてもなく、俺さ、夏期講習中だったし」

「おおう、さすがは赤点キング」

失礼な。

まだ本気出してないだけだ。

「OK、話は分かった。でも僕を無視した罪は重いよ」

北斗は僕っ娘だ。

でもかなりかわいい。

——公園。

「なんで俺がおまえにカキ氷をおごらないといけないんだ?」

あのあと、カキ氷を買わされて公園に来た。

ちなみに俺がメロンで北斗がイチゴだ。

サクサクサクサクサクサクサク

「はあ……そんなコソコソ食わないでもいいぞ。ほれ、やるよ」

「わあ、ありがとう!!」

俺からカキ氷を取り上げさらに食べる。

「うぐう……キーンってキター!!」

どうやら頭がキーンとしたようだ。

頭をポンポン叩いている。

そしてうずくまる。

「急いで食べるからだぞー」

「でー北斗く、また例のお説教か？」

冬児が口を挟んできた。

「あっ……」

どうやら北斗は完全に忘れていたようだ。

カキ氷をベンチに置いて、俺の方を向いて正座をした。
そして目を見て話す。

「刃……決心ついた?」

俺は目を背けた。

すると北斗が俺の頭を両手でつかんで自分の方に向けていく。

『陰陽師』を指す……決心ついた?」

……顔が近いよ。

「んー……俺は『陰陽師』にはならないよ。だって俺は……」

「刃……『安倍清明』の子孫、土御門家の人間なのに国家陰陽師になりたいと思わないの? 思わないわけないよね? 普通思うよね?」

北斗がメツチャ熱く語りかけてくる。

「あのな、俺は破門されてるの。まあ、親父とおふくろは普通に……まあ冬児のことだけでど接してくれるけどな。だから俺は『陰陽師』にはなれない。それに『見鬼』もねえしな……才能（笑）がな。それに才能のある奴なら本家にいるしな」
「それって本家の女の子のこと？」

なぜか沈みながら言う。

まあ俺が推測するにそれは北斗を操っている夏目だろう。

「まあ、な。さて、この話はもう終わりだ」

そう言って俺はベンチから立つ。

北斗もすぐに立って公園の入り口まで走っていく。

「まったねー」

手を振りながら言ってくる。

「おう」「おう」

『陰陽師』になれー、バカ刃ー!!』

帰り際に北斗が叫ぶ。

「気が向いたらな」ボソ

俺は笑顔を返すだけだ。

—— 駅。

「刃」

「ん？」

駅に着くと、冬児が話しかけてきた。

「おまえホントーにその気はねえのか？」

「……俺はな、『陰陽師』にもなれるさ。けどな、それじゃつまらないだろう？今の俺は『結界師』だ。それにさ、土御門家からも破門されてるしな」

「確かにな。おまえがいいならいいか。じゃあな」

「ああ、また」

そうやって俺と冬児は別れた。

—— 歩道橋。

「しっかしい景色だ」

この歩道橋からだといひ夕焼けが見れる。

ふと、誰かの気配を感じる。

視線を向けるとそこにはいかにもお嬢様って感じの女の子がいた。

ああ、なるほど。

風が吹く。

そして女の子の帽子が飛ばされる。

「久しぶりだな、夏目」

彼女は少し頬を赤く染めてうつつむく。

「お、お久しぶりです。刃くん」

きれいにおじぎをする。

礼儀正しすぎるだろ。

「小父様は……小父様と小母様は元気ですか？」

……そんな無邪気な目で見ないでくれ。

それに聞いていないのか？

「俺は破門されたからな……しばらく会ってない」

「そ、そうですか……」

そう言いながら顔をうつむかせる。

「そう言えばさ、いつ帰るの?」

「一週間後です」

「そうか……」

短いな……

「大変そうだな」

「いえ、授業は問題ありませんが……むしろ『しきたり』の方が……」

ああ……なるほどね。

女の子だもんね。

「そうか……それよりも……かわいくなつたな」

「ふえ!? あ、ありがとう、ございます／＼／」

それだよ……その仕草がかわいすぎる。

「さて、そろそろ帰るわ」

「は、はい／＼／＼また今度」

「ああ、じゃあな」

そう言っただけで俺は家に帰った。

——桔梗診療所。

俺の家は『桔梗診療所』ではない。

親父にアパートをあてがわれたが俺はそれを拒否した。

だって自分で創った方がいいし。

とりあえず、土地だけでもらった。

そこに俺が家を創造した。

なんで俺がここに居るかと言うと……

「どうだった?」

「良好だよ、おやじさんのおかげでなあ」

冬児の診察のためだ。

鬼を宿す『生成り』だからな。俺の親父に世話になっている。

「見ろよ」

クイツ

と顎でテレビをさす。

また『霊災』のことか。

最近多いな。

「まあ、まだ俺には関係ないことだ」

「まだ？」

「おっといけね」

「……おまえ、何企んでるんだ？」

「いいから行くぞ」

俺は無言を言わずに歩き出す。

今日は神社で行われる祭で行く。

——夜、神社。

「あゝ、まだかね」

「そう焦るな。女は身支度に時間がかかるもんだ」

冬児に諭される俺。

確かに仕方ないか。

「おつまたせー!!」

「おう、北斗……ふうん、似合ってるじゃん。その浴衣」

「ふえ!! あ、ありがと／＼／＼」

ちなみに俺は浴衣ではない。

この後に起きることを考えるとな。

「さて、いっつか。こっちこっちー」

浴衣で全力疾走する北斗。

しっかしよく浴衣で走れるな。

「刃く、これ、おもしろそう」

北斗は射的の出店を指さしている。

「射的かく、懐かしいな」

冬児が言った。

「どれがほしいんだ？」

俺は北斗に訊いた。

「えつとね、あのピンクのリボンが付いてるやつ」

「あれか……うし」

「ねえ、刃……あれ採ってくれたらさ、キスしてあげる」

うし、やる気出ました。

「うりゃ」

ボン

無論、景品は落としましたとも。

ちつとばつかし能力使ったけど。

「やったー!!」

大喜びの北斗。

そんなに喜ばれるとこつちも嬉しくなるよ。
ちなみに景品はシャボン玉セットだった。

でも北斗の欲しいものは違った。

ピンク色のリボンが欲しかったらしい。

北斗はリボンで髪を結ぶ。

「かわいいでしょ?」

くるり

一周回って訊いてくる。

「ああ、また印象が変わっていいな」

「ふえええ／＼／＼」

素直に感想を言っているだけなんだけどな……

そのあと、北斗はシャボン玉で遊んでいた。

近くにいた子供たちが寄ってきて、はしゃいでいた。
ピリ

ん?この気配は……結構な力量の『陰陽師』だな。

あいつか。

さて、楽しみだぜ。

どれくらい死合えるのかな。

???

訳もわからず、北斗を探している。

とりあえず、高いところに来た。

あ、いた。

絵馬を括り付けていた。

「よっ!!」

「ひゃ!!……刃」

「おっす。まあ、何を書いたかは聞かないでおくよ」

「ありがと／＼／＼ちよとお手洗い行ってくる」

それだけ言って、走り去っていった。

「青春だなあ、ええ？」

ニヤニヤしながら冬児が言ってくる。

「まあ、な」

俺もニヤニヤしながら返す。

そんな時だった。

「ねえ、その天才児」

声の主の方を向く。

そこには金髪でぐるぐるでツインテで黒を基調としてピンクをとところどころにあしらったゴスロリ風の服を着た女の子がいた。

なかなかかわいいな。

「アタシの実験に付き合ってくれない? 土御門夏目」

……こいつはバカだ。

これは確実だ。

だって冬見の方指さしてるし。

「あいにくだな、俺はただの一般人。土御門くんはこつちだ」

そう言いながら俺を指さしてくる。

面倒なことを。

「ええ!? アンタア!?!」

「そうですけど、何か?」

「雑誌で見たことあるなあ」

冬児が口を挟んでくる。

「最年少で十二神将になった神童。大連寺鈴鹿だな」

「一般人にしちや、くわしいじゃん。しっかし、アタシクラスの天才児って聞いたけど……なんかアホそうだわね」

「あ、あ?」

「このクソガキ……ぶち殺してやろうか。」

「それで、俺に何のようだ」

「言ったでしよ、実験に付き合ってた。土御門夜光が行った大呪術、大いなる魂のメソッド。『泰山府君祭』をね!!」

「……そうですか。」

「一步、また一步と俺たちに近づいてくる。」

「その時だった。」

「ジープが三台乱入してきたのだ。」

「ド派手な登場だな。」

「しかも俺たちを囲むようにだ。」

「ご丁寧な結界まで……」

「まあ、俺の結界のが何億倍も丈夫だけど。」

「呪捜官?」

「国家一級陰陽師、大連寺鈴鹿!! 陰陽法に基づき、禁呪行使容疑で拘束する。登校しろ!! 抵抗するなら命はない!!」

「十二神将が、なんで呪搜官に!？」

冬児が驚いている。

てか、今言つてただろ。禁呪行使容疑つて。

鈴鹿はあたりを見回す。

鈴鹿の背後から何かが姿を現した。

「あれは人造式『モデル・M3・阿修羅』だ!!」

かっこいいな。

でも、もろそうだ。

『阿修羅』はバナナチョコを鈴鹿に渡す。

そして、それをエロいなめかたをする。

「田舎はキライよ。虫が多いからア!!」

おおう？

ものすつごく顔がゆがんだな。

『阿修羅』が呪符をまき散らす。

開戦の合図だ。

まずは、結界を壊した。

俺?

俺は……

「結!!」

「悪いな!!」

「なあーに、気にスンナ」

結界を張って身を守る。

主に冬児のな。

周りの激流が止まる。

ころあいをみて、俺は結界を解いた。

「解!!…つてえええええ……」

解いた瞬間に俺は『阿修羅』に捕まった。

「食べる？」

俺にチョコバナナを差し出してくる鈴鹿。

「いや、いや。腹いっぱいだし」

「そう……一緒に来てもらうわ」

その時だった。

「やめろお!!」

この声は北斗か!?

クソ!!なんで来たんだ!?

とは言わない。

やっぱりか。

だって『式神』だもんな。

夏目が異変に気が付いてこつちによこしたんだろう。

鈴鹿が北斗を睨みつけている。

「刃を放せ!!」

そう叫びながら駆け寄ってくる。

「刃?」

そうつぶやきながら俺を見てくる。

仕方ないか……

「残念でした。俺は土御門家を破門された人間、神淨刃です」

「ふうん? ナメてんの? 分家すら破門された刃くん」

「うっす。当たり前じゃん」

「土御門夏目に伝えなさい必ず捕まえに行くつて。伝えなかつたら……ちんこもいじやうから」

いや、夏目は女の子ですけど。

「ところで……あれつて彼女？」

「いや、違うけど」

「じゃあ、遠慮なく」

チュ

俺にキスをしてきた。

第2話～はあ・・・なんだかな～

???

結構深いキスだ。

キスが終わると俺は解放された。

「じゃ、ちゃんとして伝えてね、ダーリン♡」

そして最後に投げキッス。

それだけして、帰っていった。

さて、北斗どうしよう。

「ひ、ひどいよ……ひどいよやいばあ」

泣きながら俺に言ってくる。

ふむ……どうしてこうなった。

「な、なんであんなこと……キ、キス……」

「見てなかったのか？あれは完全に嫌がらせだ。だから泣くな」

「バカ刃!!好きな子が他の子とキスしたのに……泣くなって言う方が無理だよ!!」

それだけ言って、走り去っていった。

——翌日、教室。

画面に記されている名前は夏目。
やっとか。

俺はニヤツと笑った。

——
喫茶店。

「あの、急に呼び出してすみませんでした」
「いいよ、暇だったし」

俺はオレンジジュースを飲みながら言う。

「ごめんなさい」

いきなり謝ってきた。

何事だ？

「送ってもらったメールのことです。間違われたせいで刃くんを危険な目に合わせてしまつて。あんな人と……」

「ああ、大連寺鈴鹿のことか。別に気にするなよ。あの程度さ、よくあることだ」

「十二神将が襲ってくることはよくあることって……そんなことよくあるわけないじゃないですか!!」

ああ……まづつた。

『D×D』の世界ではあの程度日常茶飯事だったからな。

そうだったそうだった。

「それに、人格に問題がある方だと……ですが、最年少で『陰陽一種』をクリアした神童です。見つければ私もなすすべがありません」

「そうか……お前は東京に戻った方がいいんじゃないか？」

「そうはいきません。こちらに『泰山府君祭』の祭壇がありますから。祭壇は本家の裏山、御山と呼ばれている場所にあります。彼女はそこで祭儀を行うつもりでしょう。ならば私は土御門家の人間として、祭壇を守らなければならない」

「でもなすすべがないんだろ」

「出来るできないの問題ではなく、責任の問題です。父が不在の今、祭壇を守るのは私しかいません」

なかなか頑固な御嬢さんですな。

ここまで頑固な御嬢さんも始めてですな。

「まあ、いいや。とりあえずさ。俺も協力するよ。あの子にはまだ生きててもらいたいしね。結構かわいかったし」

ドン!!

急に夏目がテーブルをたたいた。

「そうですか……かわいかったんですか。よかったですね、初めてのキスがかわいい人で」

「何言ってるんだ？俺のファーストキスはお前だぞ」

「ふえ?! い、い、い、いつしたんですか? いつ!!」

「ガキの時に、お前が寝ているときに」

「か、帰ります／＼し、失礼します／＼」

ははは、かわいいなあもう。

「まあ、まてよ。夏目!？」

なんだこれ!?

口から……オロロロロロロロロロ

口から出てきたのは、黄色の式神。

式神は蜂に形を変えた。

そして、夏目を狙う。

蜂は夏目の首に針を刺す。

「霊力を……奪われました」

——タクシー。

「これで彼女は私の霊力を得ました。おそらく彼女は祭壇へ向かいました。本家に帰れば、霊力を回復させる呪具があります。何としても、止めなければ」

辛そうにしながらも、彼女は俺に訴えてくる。

ピリリリリリリリリリリ

スマホの着信音が鳴る。

冬児か。

『刃、そっちはどうなっている？』

俺はすべて話した。

『なるほど……こちらも一時間前から警察が慌ただしくなっている。昨日の呪捜官たちが乗った車両も出て行ったぞ』

なるほど、やはり動いていたか。

「OK、じゃな」

『お、おい——』

俺は冬児を無視して切る。

「おっちゃん、この子を頼む」

「わかった……気を付けろよ」

「ああ」

俺はタクシーを出た。

???

「見せてやろうじやない……土御門夜光の代表的な軍用式を……術式解放、こい!!土蜘蛛オ!!」

それは、トラックのコンテナから出てきた。

確かに蜘蛛だった。

しかもかなりでかい。

「そ、装甲鬼兵だ?!?おのれ!!」

なんとか迎え撃とうとしている。

だが無理だ。

地力^{ぢりき}がが違う。

いくら数をそろえても、質には勝てない。

呪搜官が次々に土蜘蛛の糸に捕われていく。

そして、霊力を吸われているようだった。

「もうすぐ……もうすぐだから……」

目に涙を浮かべながら式神に頬ずりをしている。

ピリリリリリリリリリリリ

「誰？ああ、昨日の……出なくていいの？」

画面を確かめる。

そこには北斗の二文字。

「ああ、まったく。式神なんてしこみやがって」

「あら？でもいいでしょ？こんなにかわいい子のファーストキスがもらえて」

「んー……正直、後が怖い」

「はあ？後って何が？」

「俺の嫁に殺される」

「はあ!?アンタ結婚してたの？」

「まあ、な」

めっちゃ驚いてる。

そりやそうか。

この見た目で結婚してるんだもんな。

「そんなことよりさあ、おまえってさ、兄貴でも生き返らせたいのか？」
「!？」

驚いていた。

でもさつき自分で言ってたのにな。

「でもまあ、それは人間が手を出していい領域ではないな」

「うるさい……うるさいうるさいうるさい!!」

その時だった。

パン!!

銃声だ。

呪捜官か!?

弾は鈴鹿の頬をかすめたらしい。

倒れていた鈴鹿が起き上がる。

そして、土蜘蛛で呪捜官を殺しに行く。

俺は呪捜官の元に駆け寄る。

そして放り投げる。

次は!?

予想以上に土蜘蛛の動きが速かった。

クソつたれ!!

確かにここで能力を使えば防げる。が、その後が面倒なことになる

仕方がない、一撃もらうか。

そう決心し、構えた時だった。

「北斗……」

北斗が変わりに一撃を受けていた。

キャハハと笑って俺を見てくる。

「あーあ……黙れよ」

「ひい!!」

俺は殺気を少しだけぶつける。

「帰れ……今すぐ。さもないと、今すぐ殺す」

「くっ……覚えてなさい!!」

それだっけ言い捨てて、鈴鹿はトレーラーごと消え去った。

こうして思い出してみると……北斗のいた毎日はなかなか楽しかった。

今までは戦いの日々だった。

でも、久しぶりに楽しく普通に過ごせた。

そこにいたのは北斗だった。

今までありがとう、北斗。

そして、ゴメン。

さあ、行こうか。

数年前の約束を果たしに。

夏目の元へ。

——土御門本家。

「霊力は戻ったのか？夏目」

「万全ではありませんが、今晚は持つと思います」

そうか……なら大丈夫だな。

「さあ、約束を果たすときが来たぞ、夏目」

「お、覚えていたんですか!？」

「当たり前だ」

「なら、なんで……なんで!!」

「後で、全て話そう。俺のことも含めて」

俺は夏目を抱きしめながら言う。

でも今はそれどころではない。

「さあ、俺を式神に、お前は『神使』に」

「いいんですね？あなたはこれから私の式神として生きていく。その覚悟は——」

「そんなのおまえを守るって決めた時にできてる」

「刃くん、あなたを私の式神に任じます」

夏目は懐から小刀を出す。
それで自分の下唇を斬る。

「目を閉じて」

俺は目を閉じる。

「それ、安倍清明の名において、汝、土御門刃、我、土御門夏目の式神とす」

夏目の舌が左目の目じりに五芒星を描くように動く。
な、なかなか恥ずかしいぞ。

「これであなたは、私のものです」

あーあ……なのはに殺されるなー。

「それで……刃くん……見えますか？」

おー、霊力が丸見え。

『写輪眼』使えば普通に見れるんだけどな。

「あれ？刃くん目が真つ赤ですよ？それに模様も……」
「ほえ？」

俺はスマホを鏡替わりにしてみる。

あー……『写輪眼』だわ。

うし、これで元に戻った。

「元に戻りましたね。それで、霊力は……」

見えない。

まさかの『写輪眼』を開眼してるときだけですか！？
まあ、いいけど。

「どうやらさっきの眼にならないといけないみたいだ」

「そうですか……」

「さて、次は俺の番だな」

「え？」

俺は夏目にキスをする。

そして、左手の薬指に指輪をそして十字架のネックレスを首にかけてやる。

「きゅ、急になにするんですか／＼／＼」

「おまえを『神使』にした。どうだ？霊力がものすごく増えただろう？」

「た、確かにすごい……」

だって『神使』ですから。

「これでおまえは俺のものだ。末永く、よろしくな」

「ふえ!?ふ、不束者ですが……よろしくお願ひします」

見せてやるよ夏目。
俺の力を。

第3話～これが俺の力だ～

——上空。

式神の雪風に乗って俺たちは祭壇に向かっていた。

俺は荷物をかなり持たされた。

重くないけどさ……箱の角が体にあたってちよつと痛い。

祭壇が見えてきた。

「装甲鬼兵!!」

夏目が言う。

土蜘蛛ね……

雪風が降りようとする。

だが……

バチイ!!

「きやつ!!祭壇に近づけない!!」

「結界か……ひとまず下に降りてくれ」

「はい!!」

下に降りる。

しばらく土蜘蛛と睨みあう。

それも長くは続かない。

「来るぞ!!」

夏目は雪風を走らせる。

土蜘蛛はそれを追いかけてくる。

ドオオン!!

ドオオオン!!

ズドオオオン!!

危ない……もう少して当たるところだったぞ!!

「夏目、上に」

「はい!!」

さて、どうしましょうか
とりあえず、説得か。

「もうやめろよ!!」

「アタシの命の使い方はアタシの勝手だろ!!アタシは……お兄ちゃんを生き返らせてみ
せる!!」

会話のキャッチボールがツ!!

成り立たない!!

クソツ!!これだから最近のガキは!!

「そんなことは不可能です!!」

夏目が叫ぶ。

そうだと、人間には不可能だ。

それともかなり時間がたつてゐるしな。

俺にも出来るか分からねえ。

魂がどこかに飛んじまつてるからな。

探するのが大変だ。

「いえ、試すべきではないんです!!魂の呪術が禁じられているのは……そもそも人が手を出すべきではないからです!!それはかつて、人々に理屈抜きの信仰心があった時代に成立した呪法、今を生きているものが、形だけマネをしていいものではないのです!!」

『泰山府君祭』を祭ってきたのも……復活させたのも土御門だけ。自分たいはよくつてアタシはダメつてわけ?ふざけんなア!!」

あいつ、『阿修羅』まで出しやがった。

「雪風、下へ!!」

おいおい、下には土蜘蛛がいるんだぞ!!

「よせ!! したには土蜘蛛がいる!! 挟み撃ちだ!!」

土蜘蛛が俺に向かって攻撃してくる。

「結!!」

それを俺は結界で防ぐ。

あーあ、見られちゃった。

「今のは結界!? 一体どうやって……それにどこでそれを!!」

「今はいいから!! 集中しろ!! ほら!! 結!!」

『阿修羅』が攻撃してきた。

あー、面倒だなチクシヨウ。

「夏目!! お前も応戦しろ!!」

「い、今話しかけないでください!!」

い、意外に修羅場に弱い……

「さ、祭祀を初め、」夏目!!」……

夏目が雪風を巧みに操る。

爪を避けて、炎を避ける。

雪風は垂直に空に向かって飛ぶ。

そう垂直に。

手綱を握っている夏目はともかく俺は落ちるに決まっている。

「あーあ……」

「お願い!! 北斗!!」

出てきたのは金色の龍だ。

蛇みたいなものか。

東洋のだな。

「ふうん……なかなかの龍だ。でもティアには劣る」

「その龍は私の切り札です!! 代々の当主に仕えてきた使役式、土御門家の守護獣、数少ない本物の龍です!!」

「なんで最初から使わなかったの？」

「まだ御しきれないんです!!」

「そうか……なら!! 朱蓮!!」

『ひっさいぶり〜』

「出してやる、暴れてもいいぞ!!」

『ひゃっほ〜い!!』

俺は『赤龍帝の龍刀』と出現させる。

それを空高く投げる。

「解!!」

「『阿修羅』は北斗に任せるぞ。俺たちは土蜘蛛だ!!」

俺と夏目は下に降りる。

さて、どう料理してやるか。

「とりあえず朱蓮は戻れ」

『はあ〜い』

朱蓮が刀に戻る。

この世界では『結界師』として生きると決めたしな……人間の時は。

よし、今回は結界の実戦だ。

簡単に壊れるなよ。

「結!!」

一気に6本の槍状の結界は土蜘蛛を貫く。

だが土蜘蛛は止まらない。

やはり、核を壊さないといけないのか
なら、一気に壊す!!

「方位!!上訴!!」

今回はめっさ強力なので行くぜ!!

「結……………滅!!」

バリイイイン!!

結界が壊れた時には、そこには何もなかった。
うーん、いいねえ。

結界で装甲鬼兵は倒せるんだ。

ま、俺だからだろうけど。

「刃くん!!結界が解けました!!」

「うし!!行くぞ!!」

「はい!!」

雪風を走らせる。

速度はかなりのものだ。

それでも俺が走った方が速い。

突如、式神がものすごい勢いで俺たちに向かって飛んできた。

「チィ!!結!!」

気づかれないように、俺と夏目の体を覆うように薄く結界を張る。

「呪符か……」

「抜け出せない!!」

しかしこの呪符……すべて血で書かれている。

この量を全て血で。

ものすごい決意だと思う。
けれど、無駄なことをしたな。

「陰陽師、大連寺鈴鹿。謹んで――」

鈴鹿が何かを読み上げている。

すると、夏目の霊力を吸い取った蜂が鈴鹿の兄貴の肉体らしきものに吸い込まれていく。

鈴鹿が紙を上投げて、手を叩く。

すると、紙が燃え上がる。

その瞬間、ものすごい光が空に向かってほとばしる。

すると、それをたどってドス黒い何かが降りてくる。

あれは!?!おいおい……嘘だろ……

この感じ……

「い、い、い、こんな神様なんかじゃあ……」

夏目が怯えながら言う。

ああ、そうかもな。

でもな、感じが似ているんだよ。

誰だかは忘れたが……

「はあ……」

鈴鹿が膝をつく。

「お兄ちゃん、お兄ちゃん……」

ピクピクと指が動く。

「ふあ!!」

ムクリと不自然な起き上がり方をする。

まずい!!あれは肉体と魂があっていない!!

それにあの魂は——
邪悪すぎる!!

「お兄ちゃん!!」

クソ!!

もう、なりふり構ってられない!!

「散!!」

俺たちを包んでいた結界を外側に向かって散開させる。
すると、呪符も一緒に吹き飛んで行つた。

「鈴……鹿」

兄貴がしゃべつた。

その声を聴いて鈴鹿は目に涙を浮かべる。

「お兄ちゃん!!」

そして、そのまま抱きしめる。

おいおい……死にてえのか？

「お兄ちゃん!!お兄ちゃん!!あ………があ………」

鈴鹿が首を絞められている。

「足りない………」

「離れろ!!鈴鹿!!そいつはおまえの兄貴じゃねえ!!」

「う………るさ………い………今、上げるからね………私の………命」

もう………ダメだ。

抑えらんねエ。

「黙れよ……おまえの兄貴の肉体にはな……おまえの兄貴の魂はいねエ。いるのはな、もつと邪悪なものだ。そう、俺は知っているはずだ……でも思い出せねえ。幸い意識はねえ。なら!!」

俺は『写輪眼』を開眼する。

あれか!!

兄貴の背中から流れ出てる力を確認する。

『写輪眼』を『万華鏡写輪眼』に変える。

まだ須佐能乎は見せられねえ。

だから、十拳剣だけだ!!

「十拳剣!!オラアアアア!!」

それを勢いよく叩きつける。

ビシイイイイイイ!!

これでも一気に決まらない!?

どんだけだよ!!

夏目が何かを唱えている。

「五行連環!!?急如律令（オーダー）!!」

唱え終わった時だった。夏目が俺の元に駆け寄ってきたのだ。そして押し倒される。

「上を向いてはダメえ!!見たら、魂を持って行かれます!!」

とりあえず、目でも瞑るか。

しばらくたつと、風が止んだ。

終わったのだ。

「どうして……どうして……お兄ちゃん……」

鈴鹿は泣きながらつぶやいていた。

俺は立ち上がる。

そして、鈴鹿に近づく。

一言。

「兄貴に会いたいのか？」

「……会いたいわよ!!でも、でも!!」

「十分だ、それ以上は無理だからな」

「な、何を言ってるの？」

俺は神滅具を取り出す。

今回の神滅具は『幽世の聖杯（セフィロト・グラール）』だ。

これを邪龍を復活させたときみたいに使おう。

だから十分までだ。

それ以上は面倒だ。

俺は『幽世の聖杯』を発動させる。

そして魂を肉体に引き寄せる。

実際、あまり使い方が分からない。

不便だ。

「()は……ど()?」

「お、お兄ちゃん!」

「鈴鹿? どうしたの?」

「お兄ちゃん、お兄ちゃん!!」

さて、ここからは十分間だけ二人の時間だ。

夏目の所に戻ると、夏目はジト目でいらんできた。

「なんだ?」

「なんだ? じゃないよ!! なんて成功してるのさ!! 人間には無理だつてさつき言ってたじゃないか!!」

「ああ、そう言うこと。よし、あらためて自己紹介しようか」

「自己紹介? そんなのは関係n「いいから」…わかったよ」

俺は夏目を落ち着かせる。

はあ……これからどうなるんだろうな。

でも、楽しみだ。

「俺は神をも浄化する刃、神浄刃。万能なだけの人外さ」

「人外？何言ってるの？ああ、刃は私の式神だもんね」

そ、そういう意味で言ったわけじゃないんだけどな……

まあ、いいか。

「ちなみにお前も人間やないからな」

「ええ?!だって私は式神じゃ……あー!!も、もしかして……」

「そうだ。『神使』は人間ではなく、『神使』という一つの種族だ。

ガクツとうなだれる夏目。

すこし涙目だ。

そんなにいやだったのか？

おっと、そろそろ時間か……

俺は鈴鹿たちの元に行く。

「もう時間だ」

「そう……ゴメンね、お兄ちゃん。もうお別れなの」

「ううん、気にしないで。元気でね、鈴鹿。そしてありがとうございました」

俺におじぎをしてくる兄貴。

なかなか礼儀正しいねえ。

さて、本格的にまずいからやるか。

俺は『幽世の聖杯』で魂を元に戻す。

「じゃあな、お兄ちゃん……」

泣きながら、でも嬉しそうに兄貴を送り出す鈴鹿。

よし、これで完了だ。

「兄貴さ、ちゃんと埋葬してやれよ」

「うん……ありがとね」ボン

「なんか言ったか？」

「何も言っていないわよ!!」

勿論聞こえたけどな。

そんじやまあ……

「帰りますか」

「そうですね!!」

あとは呪捜官に任せることにした。

——翌日、学校、屋上。

あの後は大変だった。

あの結界はなんだ？

あの龍はなんだ？

あの杯はなんだ？

質問の嵐だった。

まあ、全部ぼやかしたけど。

「とんでもねえ嵐だったな」

「ああ、とんでもなかったな」

なんか久しぶりに冬児の顔を見た気がしてしようがない。

「しっかし、北斗の奴が式神だったとはなあ」

「まあ、俺は知ってたけど」

「そうか」

「驚かないんだな」

「だって刃だからな」

「ここに来てもなのか……だって刃だからですまされてしまうのか!!」

「まあ、いいんだけどね。」

「あのさ、俺……東京に行くわ」

——東京、ハチ公前。

ここで夏目と待ち合わせをしている。

なぜ東京に来たか？

その理由は

「式神は常に主のそばにいるものです。一日も早く、陰陽塾に入塾してください」

って言われちゃまったからだ。

でも楽しんだ。

これからどんな貴重な体験ができるか……はあ、さんざん今まで体験してきたか。

「バカ刃」

この声は……夏目か。

声の方に振り返る。

そこには、男物の制服を着た夏目がいた。

「久しぶり……ぼ、僕もちよつと踏ん切りがつかなくて……待たせちゃった？」

「……大変だな、しきたりも」

「……わかってくれて、なによりだよ」

そうだ、この際俺も本当の刃の姿に戻るか？

「なあ、ちよつと後ろ向いててくれ」

「え？わ、分かったよ……」

渋々後ろを向く夏目。

そのうちに俺はバスタオルを頭に被り、頭を元の姿に創造しなおす。だが左の目じりにある五芒星は消さない。

「よし、もういいぞ」

「もう!!なんだよ急……に……誰?」

「アハハ、俺だよ刃だよ」

「ええええええええええ!!?なんで髪色が黒に?それに後ろ髪長いね!!って違う!!顔もすっかり変わって……そ、そのかつこよくなつたな／＼／」

おうう、予想の右斜め上の反応ありがとう。

「そうだ、夏目……いや、北斗」

「わ、わかつてたの!」

「おまえ……驚きっぱなしだな」

「そんなことより、いつ分かったの!!」

「最初からだけど。だいたい人間と式神じゃあ気配が違う。それになんとなく夏目の気配がしたんだよ」

夏目はさつきから顔を真っ赤にしている。

余程恥ずかしかったんだろう。

「お、冬児。もう用事はいいのか？」

「ああ、あいさつだけだしな」

「こいつが例の幼馴染に夏目。そんでもって俺の嫁」

「ふえ!? よ、嫁!？」

「へえ、こいつが刃の嫁ねえ……刃のこと、よろしく頼む」

「ええええええ!!」

「ははは、冗談だ冗談」

は？

何言つてんだ冬児。

「何言つてんだ？大マジだぞ？」

「「え？」」

「だって夏目は『神使』になった。それは俺と一生を過ごすということだ。つまり——」

「そういうことか」

「ふえ、ふええええええええ／＼／＼」

なんだかんだ言つてうれしそうだな、おい。

冬児をニヤニヤしてるし。

「そ、そ、そ、それはもいいけど……なんで冬児がここにいるんだ!!」

「それは陰陽塾に一緒に入るからだ。安心しろ、冬児は『見鬼』だからな。ちなみにバレてるから」

「うっ……」

視線を俺から冬児に移す夏目。

そこにはニヤニヤしている冬児がいる。

突然バツ!!と顔を上げる夏目。

「二人とも!!陰陽塾じゃ後輩だからな!!覚悟しとけよ!!」

それだけ言ってスタスタと先に歩いて行ってしまった。

「かわいいやつめ」

「本当だな」

「さっさとこい!!バカ刃」

まったく……こいつめ。

「へいへい、マイハニー」

「ぶっ!!」

「ククク、刃最高だな!!」

さあ、始まるぞ。

陰陽塾での生活が。

この先は何が起きるんだろう？

楽しみだ……楽しみで仕方がない!!

第2章 陰陽塾

第1話～これから～

——陰陽塾。

「これが陰陽塾か……」

俺の目の前には大きいビルが建っている。

これで塾……ああ、なんか魔術と科学が交差する世界の塾もビルだったような気がするな。

それにしても……デカいなあ。

「中身は最新設備らしい。陰陽師を目指す、エリートが集まるんだもんなあ」

「……エリート、ねえ」

それにしてもこの制服はうっとおかしい。

袖が長い。

あ、そうだ。

創ればいいじゃないか。

早速俺は袖の無い制服を創った。

「なかなかいい塩梅だ」

「おいおいいいのかよ、改造して」

「ま、いいでしょ」

そんな会話をしつつ、俺たちは玄関に入る。

おおう、自動ドア。

そこには二体の式神がいた。

狛犬か？

「土御門刃に阿刀冬児だな」

式神が声をかけてくる。

「我らは高等人造式、アルファとオメガ」

「汝らの靈氣を確認、登録した。良き陰陽師となるべく、精進するがよい」

なんだ式神のくせに偉そうな。

それに俺は『結界師』だったの。

まあ陰陽術も使えるけどね。

式神・破軍とかね。

俺たちが、過ぎ去ろうとした時だった。

「土御門刃、汝の式神もともに登録した」

ああ、多分親父からもらったやつだろうな。

朱蓮と白は探知されるわけがないし。

先に進むと、一番初めに目に入るのは独特な形の時計だ。

そして、猫だ。

猫？

「ようこそ陰陽塾へ、まずは塾長室へどうぞ」

猫が次の行動の指示を出してきた。

とりあえず、俺たちはそれに従った。

——塾長室。

やはり、と言うべきなのか。

塾長は婆さんだった。

でもこの婆さんは只者ではない。

かなりの実力者だ。

でもまあ、ヴィヴィオにすら勝てないな。

「私が塾長の倉橋美代です。貴方たちが、夏目くん『飛車丸』と『角行鬼』というわけね」

なに言ってるんだこの婆さん。

まあ、俺自身は夏目の式神だけどな。

「あの噂は知っていますね。夏目さんが、土御門夜光の生まれ変わりだという噂。夏目さんの特別な『カンシン』は、あなたたちにも向けられることでしよう。私達も相談に乗りますが、早くそう言うことに慣れてほしいと思います。夏目さんのように」

この婆さん……いやババア。

腹の中真つ黒黒助だ。

と言うよりもまず……

「ババア、夏目は夜光の生まれ変わりじゃねえよ」

「……ババアの件は不問にしておきましょう。なぜそうお思いに？」

「んー？それにしても記憶の継続も全くと言つていいほどに認められないし、それにな……夜光は……」

「ここから先は言えなかった。」

否、言わなかった。

だつて面倒なことになりそうだったから。

「夜光はなんですか？」

「それ以上は今とは言えない」

「そうですか……まあいいでしょう。お二人は夜光についてどんなイメージを抱いていますか？」

夜光ねえ……正直、土御門家のことはあまり興味がない。

だつて、ねえ？

すぐに破門されるしき、いい思い出がない。

「あれだな、どうでもいい人間。別に死のうが生きていようが全く持つて俺には関係ないそんなイメージ。っーかイメージって言えるのかこれ」

「あなたは？」

ババアは冬児の方を向く。

「戦時中、軍部の要請で、現代陰陽術の元となる『帝国式陰陽術』を生み出すも、敗戦直前に、呪術儀式に失敗。東京で多発する霊災の原因を創った人物。功罪共に大きすぎて言い表しにくいが、天才、でしょ」

ババアは一度顔をうつむかせる。

そして、一言。

「将棋がね、好きだったんですよ。でも弱くてね、弱いのに好きでやろうやろうって。そのくせ負けるとすねるもんだから、みくんな迷惑していましたよ」

「あつたことあるんですか？」

冬児が焦つたように訊く。

俺？

俺は別にどうでもいいから。

「まだ私が、ほんの子供の頃ですけど。夜光だって、貴方がたを同じ、普通の人間だつたんですよ。でも、それがわからない人たちもいるのです。夜光の人格を無視し、盲目的に祀り上げる、夜光信者の人たちとか、ね。彼らは、夏目さんにも接触しようと試みていました。イメージというのは一種の呪術なの。噂だつて同じ。人に作用し、人を惑わすわ」

……夏目に何かあつたさ、『神使』の出番かもな。

そんなことを考え得ているときだつた。

コンコン

扉がノックされる。

「塾長、失礼します」

関西弁の男が入ってきた。

右足は義足か……何かあつたな。

それに……結構な実力者だ。

「いい加減時間押してますけど」

「ごめんなさい、今終わりましたよ」

「ん？これか？かっちよええやろ。僕も陰陽師の端くれやさかいなあ、こんくらいはつたりきかせんと」

なるほど、その時の傷ってことね。

「大友陣先生です。あなたたちの担任です」

おう……マジか。

でもラツキーかもな。

実力者の授業を受けれるなんて。

——教室。

……誰一人と声を出さない。
ただひたすらジーンと俺たちのことを見てくる。

「ほら、二人とも。あいさつ」

仕方ねえ、なるようになるか。

「神淨刃だ」

「阿刀冬児です」

「あれ？刃くんは土御門とちやうの？」

「ああ、破門されたんですよ。特に何もしてなかったんですけどねえ」

「へえ……それと、もつとアピールしいや」

だりいな……面倒だなあ。

ふと、教室を見回すと夏目と目があう。

ニコツツと笑っていくれた。

だから俺も笑い返す。

「二人はみんなより半年遅れなわけやからあ、いろいろ教えたってやあ」
「先生!!」

先生の発言に声を上げる生徒がいる。

女の子か。

ふうん……かわいいじゃん。つてあいつ、ガキのときに会ったことがあるな。

「京子くんかあ、なんやあ？」

「おかしくありませんか？この時期に突然編入なんて、本来なら来季まで待つはずでしょ？彼が、土御門の人間だからですか？納得できません」

あー……いるよねえ。こういうさ、身の程知らずのガキつてさ。

バンツ!!

夏目？

珍しいな、夏目が怒るなんて。

でもまあ……

「言いがかりm「夏目、騒ぐな」…なっ!?刃はいいのか？あんなこと言われて黙っているのか？」

「はあ……いちいちガキの我がままに付き合う必要はねえ。言わせとけ」

「な!?ガキですって!!」

「それにさ、誰がおまえごとくに従うんだ？だいたい俺と冬児の編入になんでおまえが納得しないといけないんだ？なあ？おまえはそこまで偉いのか？なあ、なあなあなあ！！」

「ぐっ……」

ハイ論破ハイ論破ハイ論破ハイ論破ハイ論破ア！！

「じゃ、先生。これからよろしく」

——休み時間。

「さっきのことは気にしなくていいから。刃は堂々としてて」

「そだな、てか相手にしてねえし」

「あの京子ってのは、いつもああなのか？」

冬児が夏目に訊く。

「んー……でも今日みたいなことは珍しいかな」

そうか……あれだな？

調子乗っちゃったのかな？

「夏目くん!!担当の人、来てるよ」

男の子が呼びかけてきた。

「僕行かなきゃ、今特別なカリキュラムを受けているんだ」

これは嘘だな。

「おい……あいつには気を付けろ。あいつは夜光信者だ」

「あはは、そんな訳ないよ。じゃあね」

夏目は途中まで歩いてこっちを向く。

「刃、冬兎。これから一緒に頑張ろう!!」

ニコツと笑って言ってきた。

かわいいやつめ。

「おう」「ああ」

「さてと、一緒に来い」

冬児が立ち上がる。

そして、さつきの男の子のところに行く。

もちろん俺もついて行く。

「さつきはどくも〜」

「え？」

「ちよつと、クラスのこととか教えてくれないか？ええ〜つと」

「はい、百枝です。百枝天馬」

「俺もよろしく頼む」

なるほど、これが狙いだっただのね。

「田舎で陰陽師が暴れた事件があっただろう？俺たち、あれに巻き込まれてさ。

「ええ!!あの事件!!そんな事情が……大変だったね」

正直に言おう。

俺、空気じゃね？

今も二人でどンドン話を進めていつてる。
結局、俺は何を話しているか最後までわからなかった。

——放課後。

「この……バカ刃!!」

机にあるのは0点のテスト。

いやあ、寝てたらいつの間にか終わってたし。

「バカだバカだと思っただけ……まさかここまでだなんて!!」

「だって眠かったし……」

「眠かった？ たったそれだけで何も書かないでテストを出したのかい!？」

睡眠は大切です。

「まあ、本気出せばこんなの全部解けるよ。ほら」

「ほ、本当だ……全部あっている……」

「じゃあ、そう言うことで」

俺はそそくさと教室を後にした。

——俺の部屋。

そう言えば親父からもらった式神をまだ試していなかったっけかな。

「ハイ」

ボン

おお、獣耳の幼女だ!!

ヒヤッハー!!

さすが親父だぜ!!

「お、お、おおおおおお初にお目持ちいたします。わわわ私、コンと申します」
「あいよ、よろしく。そんじゃ、寝ようか」

俺はコンを抱き上げる。

そしてそのままベットヘイン。

「zzzz」

「ひゃううううう」

コンコン

「刃々入るよ」

何も言っていないのに入ってくる夏目。

そしてベットに視線を向ける。

「なにやってるのかなあ？刃あ」

「zzzz」

「あ、あれ？寝てるの？しょうがないな」

そう言つて夏目は俺の部屋を後にした。

——翌日、教室。

「便利やろお、独立封魔官クラスになるとフェイズ2くらいなら一殺や」
「俺なんかあくびしててもできるぜ」

「なにぼうつとしておるんや？刃くん。気が抜けとるんやないか？」

「なに言つてんだ先生。気どころかなにもかもが抜けてるぜ」

俺は胸を張って応える。

冬児はヤレヤレといった顔でこちらをみてる。

「先生、授業を進めてください。送れている自覚のない人の為に、時間を無駄にしたくありません」

京子か……

いちいちイラつく話し方だな。

「なに言ってるんだおまえ。このくらい俺が五歳の時でもわかってたぜ」

「嘘つけえ!!」

「あのさあ……座学ばつかの甘ちゃんがよオ、生言ってるじゃねエぞ!!」

俺は殺気を開放する。

そりゃもちろん全員冷や汗ダラダラでガタガタ振るえますよ。

先生と冬児は別みたいだが。

「ほら？なんか言ったらどうだ？優等生。底辺のやつにビビてんじゃねえぞ!!」
「ぐう……」

パンパン

「そこまでや、ここはひとつ、式神勝負と行こうか」

いいねいいね、最ツ高だねエ!!

やっとおもしろくなってきたぜ!!

???

とりあえず、先生に連れられていた。

ここは鍛練場みたいだな。

「さて、式神勝負だったよな？」

「そうよ!! まああなたにはその子しかないだろうけどね!!」

向こうが構える。

それを確認して、俺も構える……わけがないだろう。

「始め!!」

さて、俺も本気で相手をしてやろう。

「朱蓮!!白!!」

『いいぜ!!』『久しぶりだね〜』

ガアアアアアアアアアア!!

ギャアアアアアアアアア!!

「りゆ、龍?!なんであんたが龍を……」

「なんで?だって俺は『二天龍を従えし者』だから。赤龍帝、白龍皇。この二体を表現するのが天龍……だから二天龍。まあ、そんなことはそうでもいい。おまえら遊んできていいぞ」

俺は終わるまでコンを愛でていきますか。

「コン、おいで」

「はい!!」

俺は膝の上にコンを乗せる。

そして撫でる。

さあ、お遊びの始まりだ。

第2話くおおう、まさかの・・・く

—
???

ガアアアアアアアアアア!!
ギヤアアアアアアアアア!!

「なんなのよこの龍!!強すぎでしょ!!」

京子が何か喚いている。

だが俺には関係ない。

俺は今、全力でコンを愛でているのだからッ!!

「はあ、かわいいなあコンは。癒されるぜ」

「や、や、や、刃様あ……く、くすぐつて」ここがいいのか?ほれほれほれ」……ふあああああ

／
／
／

萌えええええええええええええええ!!

バチチチチチチ!!ボン!!

バチチチチチチ!!ボン!!

電気がほとぼしるような音が鳴り響いてからの二回の爆発音。こりゃ、向こうの人造式がイカれたな。

「はあゝい、刃くんの勝ちい」

「どもつす」

ぜんぜん達成感がわかない。

だつて俺つてコンを愛でてただけじゃん。

まあ、その件に関してはものすごい達成感があるんだけどな。

「朱蓮、白。楽しめたか？」

『いや、全然』

『同じく〜』

そりやそうだろうな。
まだ相手はガキだったし。

——翌日、教室。

「一体なんなんだい君は!! さっきの二匹の龍はなに!?! 片方は知っていたけどもう片方は知らなかったよ!?!」

夏目がさつきから耳もとでギャーギャー騒いでいる。まったく、どうでもいいじゃないか。

ただ俺が従えていただけ。それだけのことなのに。

「神浄くん」

「や、刃くん」

「ん?どした?」

クラスの女子が三人も話しかけてきてくれた。ちよつとうれしいね。

「ちよつといい?」

「いいよ」

「凄かったよね!!昨日の試合!!」

「私、びっくりしちゃった!!」

「よく倒せたよな」

「なにしろ相手はあの倉橋だからなあ」

な、なんだ？

急に話しかけてくるようになったな。

ああ、昨日京子に勝ったからか。

「おはよう、刃くん、護法式なんて持ってたんだね」

「ああ、まあな」

「そうそう、あの小つちやい護法式、もう一度見せてくれない？」

「あ、私も見たあゝい」

まあ、頑張ってくれコン。

「コン」

ボンと煙を上げながら出現する。

「きゃー!!」「かわいいー!!」「触らせてー!!」

女の子三人がコンを撫で繰り回している。

「ややや刃様あゝ」

ははは、楽しそう……ではないな。

まあ、いいんじゃない？

「そう言えばあの龍、すごかったな」

「ああ、そうだな。赤と白だったっけ？」

「ん？ああそうだよ。あの二体の龍はな、神ですら敵わないと言われるほど協力的な力を持つてるんだ」

「す、すげえ……」

こんな風に、みんなで仲良くしていると必ず壊そうとしてくる奴がいる。

「これだから名門様は——」

その先は聞いてない。

興味が失せたのと、コンがそいつの首に小刀を当てていたからだ。

「コン、やめろ。そんなやつ相手なんかするな。時間の無駄だ」

「名門様だからってえらそーにs「うるせえな……テメエ」…はっ!？」

「「「「え……!?!」」」」

俺はその男の後ろに瞬間移動する。

「どうした?なに驚いてるんだ?瞬間移動しただけじゃないか。俺がいたところではこの程度ではだれも驚かないぞ?」

「う、うるせえっ!!」

男は俺に殴りかかる。

それを俺は何もせず受ける。

もちろん、拳は顔面……額にあたる。

普通は俺が痛がる。

普通はな。

あいにく俺は普通じゃない。

だから……

「い、いてええええええええええ!!」

殴った方の拳がものすごいことになります。

指の骨は全て砕けるのは当たり前。

爪も割れて、手首まで折れる。

「あーあ……すぐそうやって手を出すから」

「や、刃くんは平気なの?」

「ん? ああ、あんなへなちよこパンチは全く効かないよ。てか、殴った方が怪我をする。

あいつみたいに」

「」「」「ああ……」「」「」

どうやらみんなも納得してくれたようだ。

とりあえず、『フェニックスの涙』でもかけておくか。

「ほれ、これで手は元通りになったはずだ」

「んなわけ……マ、マジだ……」

「んじやな。今度はちゃんと鍛えてから殴ってこいよ」

「もうしねーよ!!」

あー面白い。

最ツ高だぜ!!

やつぱりここに着てよかったかもな。

——階段。

「で、何の用？」

良く見てみると、京子ってかわいいな。

胸デカいし。

ボン!! キュ!! ボン!!

ですな。

「昨日は悪かったわね……成り行きでああなつちやったけど、もともと文句着けてたのは大友先生に対してなんだし」

髪を人差し指でイジイジしながらテレくさそうに言う。

なんか、いいな。

「とにかく!! 大げさになったことは謝っとくわ」

……ハハアン。

「なあ、おまえつてさ……俺をだしにして夏目に突っかかっただけだろ。なんで？」

「……会ったことがあるの……子供のころ一度、夏目くんと」

「ああ……あの時の子はお前だったのか」ボソ

「なんか言った？」

「なんにも」

へえ……なかなかかわいいところあんじゃん。こいつ。

でもさ、絶対に覚えてないだろうな。

なんとなくだけど、そんな感じがする。

「それで？再開した時に何かあったのか？」

「……忘れちゃってたのよ、会ったこと」

「ふうん……まあ一度だけなら仕方ないかもな」

「でも約束したんだもん」

「なんのだ？」

「つーか、また約束？」

「夏目は本当に約束が好きだな。」

「リボン……ねえ、夏目くんのあのリボン。急に結ぶようになったけど……あれ」

「ああ、あれは俺が夏祭りの時射的で取ったやつだよ」

「そう……土御門のしきたりではないのね。阿刀くんから聞いたわ。あなたが夏目くんの式神になったのも土御門家のしきたりなんでしょ」

「まあ、な」

「しきたりで、あなたたちは深くつながっているって……心も体も」

「……ああ、男同士ってことになるのか。」

「本当は夏目は女だからノーマルなんだけどな……」

「ああ、そうかもな。体はともかく」

「そう、なんだ。体は違うのね……よかった。でも、結局彼の頭の中にあるのは土御門のことだけ……」

「まあ、まちなさい。式神にしてくれて頼んだのは俺からだし」

「ええ!？」

「あいつは確かに土御門って言うバカみたいにデカイ看板を背負っているけどだ、それだけしか頭がないわけじゃない。そこは信じてやれ」

それから気づいた。

あ、これ地雷踏んだって。

だってこれまでの言い分をまとめると、京子はたんい忘れられただけってことになる。

「じゃあなに？私はたんに忘れられたと？」

俺の胸をポカポカ叩きながら詰め寄ってくる。

その時だった。

「そんなところで何をしている」

夏目の声だ。

おまえこそ何しに来たんだ？

「二人でコソコソと出ていくから、何かと思うじゃないか」

あ、こいつ妬いてんな。

妬いてますな。

「別に、ただ和解してただけだ」

「そ、そうよ。私たち和解していたのよ」

「何度言ったらわかるんだ？」

何度も言われているからもう聞き飽きたんだよ。

つーかよ、筆記ばかりできても実戦で使えなかったら意味がないじゃねえか。
夏目みたいに。

「君は他の人たちより遅れているんだぞ!!少しでも時間があつたら、自分を磨いたらどうだ!!倉橋さんやクラスのみんなに媚び諂う暇なんてないだろう!!どうして本気にならないんだ!!君も土御門の人間だろう!!まわりに甘えるなよ!!僕たちは早く、誰の助けもいらぬ一人前の陰陽師にならなければいけないんだ!!どんなに辛くても!!寂しくても……」

最後の方は夏目は泣いていた。

『陰陽師』ね……俺は『結界師』だったの。

「そうか……そんな風に思ってたのか。まず訂正しておこう。俺は土御門の名は捨てた。そして元の名を取り戻した。それが神浄だ。それに俺は『陰陽師』にはならない。『結界師』だから。陰陽術は使える。でも『陰陽師』にはならない。『結界師』だから。でも『結界師』でもおまえを守ることくらいはできる。だからさ、そんなこと言うなよ」

俺は夏目抱きしめようと階段を下りていく。

その時だった。

壁がひび割れてきた。

夏目につき飛ばされる。

コンが何か騒いでいる。

目の前には邪悪な何か。

夏目を助けなければ。

でも、なぜだ。

体が全く動かない。

やがて邪悪は夏目を完全に包む。

「刃!!」

この声は冬児か。

「阿刀!?!天馬!?!」

「なんだこれは……」

冬児が叫ぶ。

ああ、なんだよこれ。

『おまえのような下郎が、北辰王のお心を乱すなど、承服できぬわ!!』

キモ……

なんだこいつ？

「北辰王？まさかこいつ……」

「夜光信者!？」

「どういうことだ?？」

冬児が天馬に訊きなおす。

「君たちが入塾する二日前、夜光信者が夏目くんに接触してきたんだ。拉致しようとして、呪術のやりとりになっただけ。その件で夏目くんは呪捜官の取り調べにあつ

たつて……ほら、休み時間に」

ああ、やつぱりそうだったのか。

納得したよ。

「ハハははははははははハハははははははハハははははハハ!!」

「お、おい刃? 大丈——」

「なーに言つてんだア冬児イ!! 今よオ最ツ高にキレてんだ。俺の目の前で夏目がさらわれたんだぜ。だから、今回は本気で行く。天龍の片割れ、赤龍帝の力を見せてやるよ!! 朱蓮!!」

『わかつてる!!』

『Welsh Dragon Balance Breaker!!!!!!』

俺は赤龍帝の鎧を身に纏う。

右手には『赤龍帝の龍刀』がある。

とりあえずこの邪悪を消し去るか。

「結……………滅」

邪悪をすべて結界で囲い、一気に消し去る。

「さあ、邪魔まものはなくなった。夏目の所に行くぞ」

俺は先に進む。

後ろからついてくる気配がするが気にしない。

待ってろ夏目。

???

「夏目エ!!」

俺は叫んだ。

夏目は俺が誰だか分からないようだった。

ああ、鎧か。

「王よ、今からあなたの護法である我々が、あのガキどもとの格の違いをお見せいたします。ご覧あれ!!」

その瞬間、野郎の背後に片腕のない鬼が現れた。

「隻腕? そんな、まさか!!」

なんでみんな驚いているんだ?

やることは変わらないのに。

『北辰王、土御門夜光が使役せし二体の式神、我こそは角行鬼』

「そして、我が名は飛車丸!!」

なにかほざいてる。

だが関係ない。

「あれ……本当の角行鬼？」

「そんなわけあるか。あれは雑魚だ」

俺は一步、また一步と歩みを進める。

「冬児、殺ってくる」

「ああ、殺ってこい」

「ちよつと!!いいの刃くん一人で行かせて!!」

「いいんだ。俺たちは足手まといになるだけだ。もちろん夏目でもな」

「ええ!？」

上手く冬児が止めてくれたか。
さあ、ここからは俺の仕事だ。

第一に夏目の救出。

第二にクソ野郎共の惨殺。

よし決めた。

俺は鎧を解除して外套に変形させる。

よし、これで動きやすくなった。

俺は『念』を発動させる。

そして『発』につなげる。

「いくぞ………弦術・修羅修羅々」

俺は念で創った弦を周囲に張り巡らせる。

この時点で敵さんはもう身動きだ取れない。

だって、弦が体に絡み付いて体をちぎるくらいに締め付けているんだもの。

『弦術・修羅修羅々』は周囲に弦を張り巡らせると同時に、範囲内の標的も縛り上げる。

「どうだ、動けねえだろ？」

「グツ!!ガキ!!なにをした!!」

「教えるかよ、バーカ」

俺は弦を締め上げていく。

「テメエは後回しだ。先にあの鬼もどきをブチ殺す」

みんな驚くだろうな。

忍術が使えるなんて言ったら。

「影分身の術」

影分身をつくり、俺の右手にチャクラを乱回転させていく。

そう、風遁・螺旋手裏剣だ。

「さて、鬼もどき。俺の持っている忍術のなかでもかなり高威力のものだ。喜べよ!!
風遁・螺旋手裏剣!!」

螺旋手裏剣は鬼もどきに当たり、肥大化する。

ギヤアアアアアアアアアア!!

鬼もどきが叫ぶ。

痛いよなあ……でもしようがないよなあ。

夏目をさらったクソの仲間だもんな。

鬼もどきは塵になった。っと思ったら式神の紙の状態に戻っていた。

「さて、残るはお前だ……ってあれ?」

あのクソは何処にもいなかった。

おいおい……あれから抜け出すなんてどんな小細工使いやがったんだ?

それともさっきの螺旋手裏剣で弦が切れたか?

なら仕方ないか。

俺は夏目の元に行く。

「まってく、心配させんなよ」

「ごめん……」

俺は呪符を全部破る。

そして抱きしめる。

「ふえ／＼／＼」

「守るって、約束したからな」

「うん!!」

俺は夏目をお姫様抱っこでみんなのところに連れて行く。

「や、刃!!この格好はまずいよ!!」

「大丈夫だ、問題ない」

とりあえず、みんなのところについたので、夏目を下した。

「倉橋さん、天馬くん、ありがとう。迷惑をかけてすまなかつた。倉橋さん、あんな態度をとっていた僕を助けに来てくれて、本当にありがとうがたく思うよ」

「そ、そんな……気にしないで」

ほう、少しは成長したんじゃないか？
夏目も。

——四日後、俺の部屋。

「ああたりねえ……やっぱ昨日の偽物じゃ俺のストレスは発散できねえ」
「確かにな。本物の鬼はあんなもんじゃねえ」

俺の部屋には俺、冬児、天馬、京子がいる。

昨日の件について話していたのだ。

「ていうか、あなた全然元気じゃない。四日も休むから、心配して見に来てやったのに」

「あー……まあ、さぼりつてやつ？」

「なんで疑問形なのよ!!……ねえ、夏目くんは来てないの？」

「「気になるか？」」

俺と冬児がハモリながら聞く。

「もういいわよ、それは!!」

プリプリしながら返ってくる。

ポン

煙が出てきた。

「刃様……」

こんにく促されて部屋の外を見ると、そこには式神が荷物を部屋の中に運んでいた。

「これはそっち、これはあっち」

部屋の中では夏目が式神に指示を出していた。

「夏目、どうしてここに？」

「やあ、僕、今日からここに住むから」

「ほう……いいねえ。じゃあ、部屋をつなげて同棲するか？」

「どどど同棲!?!ま、まあ刃がどうしても言うならいいけど……」

人差し指どうしでツンツンしてる。

……かわいいっす。

「どうしても同棲したい」

「わ、わかったよ……ここ、これからよろしくね」

「ああ、よろしく。マイハニー。というわけで、ほい!!」

俺は壁を取っ払った。

ついでに下にあるという夏目の荷物をすべて転移させた。

「さて、頑張りますか」

「おー!!」

第3話くデートく

——階段。

「はあ……しっかりしてくれまったく」

なんなんだこの式神は。

全く持って面倒だ。

勝手に服を脱いでいくし。

「」

「」

二人の女の声がする。

まずいな。

面倒なことになる前に転移しよう。

俺と式神は俺の部屋に転移した。

—— 食堂。

「夏目の作った浴室用の簡易式が誤作動して、それを刃が捕まえた。そして人が来た、ね。チツ!!もう少いで面白いことになりそうだったのにな」

「まあ、そんなかともなったら全員の記憶を消せばいいんだけどね」

「「おいおい………」」

だつてそうだろ。

証拠がなければいいんだから。

「つーかき、部屋に浴室創つたんだからさ、部屋で入ればいいじゃん」

「ああ……」

「忘れてたんかい!!」

夏目ってなんか抜けてるよな。

「そうだ、久しぶりに遊びに行こう。そろそろ息抜きしないと大変なことになる」

「すまん、明日は無理だ」

「いや、もともと夏目と行くつもりだったし。デートだし」

「だよ」

冬児はニヤニヤしながら夏目のほうを見る。

「デ、デート。刃とデート」

——翌日、俺の部屋。

「夏目、制服はやめようぜ」

「しよ、しょうがないじゃないか!!これしか持っていないんだから!!」

仕方ない、創るか。

今の季節はまだ暑いからな……

白のチノパンに白のシャツ。そして黒の細ネクタイ。

「こんなもんだろ。」

「ほれ、これを着ろ。制服よりはマシだ」

「あ、ありがと……／＼／＼」

「俺も向こうで着替えてくるから」

そう言つて俺は夏目から離れた。

ちなみに俺の服は夏目の色違いだ。

黒のチノパンに黒のシャツ。そして白の細ネクタイ。

ペアルックとも言えなくもない。

「や、刃？もういい？」

「ああ、いい……ぞぞ？」

「ど、どうかな？」

「めっちゃかわいい」

「ふえ／＼／＼あ、ありがと／＼／＼」

最高だ。

もう……最高だ!!

「それじゃあ、行こうか」

「はい♪」

——東京駅。

「それで？夏目は東京に詳しいのか？」

「え？い、いや……僕はそんなに」

「そうか」

「うん」

どこがいいかな？

服の件は俺がいくらでどうにかできる。

なら今日は楽しんだ方がいいよな。

「なあ、どこか行きたい所とかあるか？どんな感じのところがいいかとか」

「うくん……特にないかな」

「そうか、なら秋葉原にでも行くか」

「いいよ」

いいの!?

確かに電気街って認識もあるかもしれないけどさ、オタクの聖地と言っても過言じゃない。

まあ、俺が用があるのはゲーセンだけだ。

——秋葉原。

「やっとついたら〜……と言っても数分か」

「あはは……それにしてもすごい人の数だね」

「そうだな、よし。はぐれないように手をつなごう。ほら」
「う、うん!!」

顔を真っ赤にししながら俺の手を握る夏目。

いいねえ……

「とりあえず、SEO Aに行くか」

「え？それってどこ？」

「こつちだよ」

——ゲーセン。

「プリクラでも撮るか」

「プリクラ？なにそれ？」

こいつ……プリクラを知らないだど!?

まあ、そりやそうか。

陰陽塾に入ってからろくに遊んでないって言ったもんな。
なら仕方ないか。

「とりあえず、ここに突っ込んで」

「え？え？え？」

有無を言わず、中に入れる。

そして俺は流れる動作で100円を入れる。
始まった。

背景、フレームを選択する。

光の加減なども。

つうか、機能多すぎだ。

やっとなりか。

『いくよ、3、2、1』

カシヤ!!

一枚目を取る。

これは普通に二人が並んでいる。

二枚目。

今度は正面から抱き合う。

最後。

キスをしながらだ。

もう夏目の顔は真っ赤だ。

仕方がないので、落書きは全部俺がやった。

丁寧にハサミで切って二等分する。

そしてそれをみてニヤつく夏目。

ま、まあいいんじゃないか。

そのあとも色々なゲームで遊んだ。

そして昼食を適当なところでとる。

さて、次はどこに行こうか。

「アハハ……どこだ？」

「ご、ごめん……僕のせいで……」

——
???

泣きながら俺に言う。

俺は夏目を抱きしめて、ポンポンと背中をたたく。

「大丈夫だ、安心しろ」

「で、でも……」

まったく、心配性だなあ……

しかも雨が降ってきがあった。

「亜子、みつかった？」

この声は!?

陰陽塾の先生だな？

まずい、このままだとホモのレットルを張られる。

とりあえず……しかたない。

入るしかないか。

「とりあえず、入るぞ」

「ええ!?!や、刃がいいなら僕もいいけど……」

はあ、ヤレヤレだぜ。

——ホテル、部屋。

「……………」

「なーに緊張してんだ。べつにやらないといけないわけじゃないだろ」

「そ、そうだけど……」

なにがっかりしてんだよ。

そんなにやりたいのか。
俺はうれしいけどね。

「そんなにやりたいのか？」

「ふえ／＼／＼い、いや……そこまでは……でも興味は……」

「なら、今日はやめておこう。そのほうがいい」

「そうだね……そうしよ」

そう言つて夏目はゴロンとベットのの上に寝っころがる。
俺もつられて寝っころがる。

「夏目……」

「刃……」

俺は夏目を背中から抱きしめる。

だが、夏目はすぐにこつちを向く。

ちようど向き合うようになる。

なんか落ち着くな。

レティシアと似ている。

「すう……すう……」

「寝てやがんの……」

俺はホッペをつつく。

もちもちだ。

さすが女の子。

俺も少し寝よう……

z z z

——数時間後。

「きて……起きて刃!!」

「なんだあ?」

「もう結構時間経ったよ!!それに雨もやんだし……帰ろう」
「そうだな」

俺と夏目は服装を整えて部屋をでる。

む?

あー……これは探知されたな。

下で待機してるやつが居やがんな。

この気は……京子、天馬、冬児、大友先生にあとさっきの女二人。
ちよくせつ部屋に飛んだ方がいいな。

幸い、このホテルは先払いだったしな。

「夏目、手を」

「う、うん」

夏目が俺の手をしっかりと握る。

「転移するぞ」

「へ？」

魔法陣が俺たちを通す。

そこには俺たちの姿はなかった。

——俺の部屋。

「よつと、ついた」

「す、すごい……本当に刃って何者？」

「……聞きたいか？」

生半可な気持ちで聞いてもらいたくない。

それが俺の本音だ。

「うん……聞きたいよ。刃のことが好きだから」

「ここまでまつすぐに言われたら断れるわけがない。

「俺はな……この世界の人間じゃないんだ。転生者ってやつだ」

「へえ……つてええええええええええええええええ!? 転生!? で、でもそれつて……」

よ、よかつた……この部屋に防音の結界張つておいて。

「だが、夜光ではない。まあ、意識がないだけかもしれないが……今こうしておまえと話しているのは神浄刃だ」

「そ、そうだよね!! それならいいんだ」

まだ納得していないようだが、関係ない。

話を進めよう。

「そんなでな、俺は色々な世界を回ってきたんだ。一番初めに言った世界は『箱庭』。神仏、悪魔、精霊、妖。さまざまな種族がいた。なかでも力をもつて理不尽に振るう奴は魔王と呼ばれて恐れられていた」

「神仏が普通にいる……とても信じられません。よくそんな世界で生きていけましたね……」

確かに……結構キツイ世界だよな、『箱庭』って。

「二番目の世界は『魔法』がある世界だ。でもレーザーとそう言う魔法な。ファンタジー要素はほとんどない」

「……………」

あ、夏目が……

でもかまわず続ける。

「そして最後。俺が今までいた世界だ。ほれ、しっかりしろ」

「う、うん……よし!!いいよ」

「この世界も『箱庭』と似ていてな、悪魔、天使、墮天使の三大勢力がひしめき合う世界だった。まあ、同盟結んだんだけどな。この世界ではたくさんの『神使』が生まれたな……………」

「え? 『神使』って私だけじゃないの?」

あ……言い忘れてた。

「そうだよ、何十人っている。でも安心しろ、この世界にこれるのは月に一度で、全員一
気に来れるのは年に一度だけだ」

「そ、そっか……」

「これで俺から話すことはほとんど話した」

「うん……ありがとう刃」

「んにゃ」

俺はそれだけ言って、風呂に入ることにした。

——風呂場。

ああ……生き返る。

今日はいろんなことがあったな……

プリクラとれたのは一番うれしかった。

まあ、ホテルは予想外だったけど。

しっかしここは広くていいな。

まあ、魔力で空間を創ったんだけどね。

ガラガラガラ

「お、おじやましまーす」

「夏目? どうしたんだ?」

「い、いや、背中を流してあげようかなって」

おお、それはありがたい。

「早速頼む」

「う、うん……」

タオルを使って丁寧に背中を洗ってくれる夏目。

ムニユン

ん？

背中に素晴らしい感触が……

「どうした？」

「あのね……僕うれしかったんだ……刃が秘密を僕に喋ってくれて……」

「俺もよかったよ、夏目に話せて」

「刃はさ、強いよね」

「いや……俺はまだ弱い。本当の意味で強い奴は、俺は少なくともひとりだけ知っている」

上条当麻だ。

あいつは力が右手しかないのに、それ一本だけで最強クラスの化け物に挑む。

俺はすげえと思う。

「そう……でもやつぱり一番は刃だよ」

「……ありがとな」

「……………」

「さて、そろそろ流して湯船に入ろう」

「そ、そうだね」

二人して泡を流す。

そして湯船へ。

「……刃、好きだよ」

「ああ、俺も好きだよ。夏目」

こんな風に過ぐすのもたまには悪くない。

第4話く鬼を喰った?く

——登校中。

「おはよう、みんな」

天馬が俺たちにあいさつをしてくる。

「おーっす」

俺は天馬に返す。

「おはよう夏目くん」

だが京子は夏目にあいさつをする。

「試験も後半戦だね」

天馬が言う。

ああ、そうだな。

あのダライ試験もやつと後半戦か。

もう勉強は嫌だ。

「刃くんはどう？」

「ん？俺かあ……ま、赤はないな」

「当たり前でしょ!!」

京子がつつこんでくる。

ははは、別にいいじゃないか。赤点さえ取らなければ。

「いい加減しつかりやれよ、本気でやれば満点取れるんだから」

夏目が言ってくる。

あー……確かにそうなんだけどな。

記述が多すぎてダルイ。

あんなに書くななんて無理だ。

「まあそのうちな」

「そのうちって……」

そんなことを言いながらも歩き続ける。

ふと、後ろを振り返る。

すると、冬児が立ち止まっていた。

「どうした？」

「ああ、もう半年だな、と」

——教室。

「プリントは、後ろから集めてこい」

担当の教師が言う。

あー……やつと終わった。

疲れたわー。

「あの……刃くん？」

天馬が声をかけてきた。

「んく?どした?」

「どうだったのかなと思って……」

「余裕だ……けど最低限しか解いていない。さっさと解いてあとは寝てた」

「あはは……」

「刃!!次は実技だぞ!!」

今度は夏目か。

そういえば実技もあつたな。

朱蓮と白は使えるわけないしな……

今回は俺が出張るか。

——競技場。

俺は今、京子と模擬戦をしている。
京子は人造式を出して攻めてくる。
だが甘い。

「結」

俺は結界を張る。

ただし、槍の軌道をそらせるためのものだ。

大きさにすると、鉛筆程度の大きさだ。

そうしないとバレちまうからな。

大友先生にはバレてそうだけど。

「今度はこっちのターンだ」

俺はなんの変哲もない刀を創造する。

もちろん創造したのがばれないように、懐から紙を出してそれを霧散させたときに出る煙に乗じてだ。

俺は刀を抜き、人造式に特攻する。

もちろろん、反撃をしてくる。

それを刀でいなしながら、腹を斬りつける。

「うゝん……さすがにこの鈍らじゃあ、たいして効かないか」

とは言ったものの、相手の人造式は少しだけラグってる。

ああ、俺の斬撃の速度が速かったからか。

まあいい、もうそろそろ決める。

「コン!!」

「はい!!」

俺はコンに指示を出す。

たった一言。

これだけでいい。

コンは、人造式の気を引く。

その隙に俺は神速で人造式の後ろに回り込む。

そして……

「破ッ!!」

刀を『念』で強化して、斬りこむ。

もろに食らった人造式はラグがひどくなる。

よ、よかった……壊れるんじゃないかと思った。

そこまで強化しなかったのが幸いしたな。

「これで俺の勝ちだな」

「くっ……」

京子は悔しそうに顔を歪める。

ははは、悔しいか。

「お見事です、刃様!!」

コンがほめてくれた。

ほめてくれた。

コンが、ほめてくれた。

ハッハッハ!!

俺に敵はもういないぜえ!!

「おまえもたった一言だけでよくあそこまで動いてくれた」

コンの頭を撫でながら言う。

「そ、そのような、もったいなく、かたじけなく……」

腕をブンブン振りながら言う。

ちなみに顔も真っ赤だ。

……かわいい。

「ふん、本来黒楓（こくふう）は白桜（はくおう）とセットなんだから」

……関係なくね？

ようは使い手の技量不足だろ？

「そんなこと実戦でも言うつもりか？あとさ、式神操つてるときさ、無防備すぎ。おまえ自身を狙われてアウトだぞ」

「そ、そんなことわかってるわよ!!」

本当にわかってんのかよ……

わかってたら直してるはずだろ。

——夕食。

「はあく疲れた。やっとメシか……」

今日の夕食はきつねうどんだ。

油揚げがたまねえ。

コン?

コンは隣で油揚げを食べてるぞ。

お茶も飲んでるけど。

「隣……いいかな?」

夏目か……

答えは決まっている。

「もちろんだ」

もちろんOKだ。

当たり前だろ。

「あのさ……刃は本当に、絶対に『陰陽師』にはならないの？」

夏目エ……

どうしたんだ？

何回も言ってるはずなんだけどな……

「だから俺は『結界師』だからさ、『陰陽師』にはなれない。つか、なんでそんなに『陰陽師』になって欲しいの？『結界師』でもこうして一緒にいられるじゃん」

「それは……それはだって……お、おんなじじゃん」

……一緒にいってことですか？

そうなんですか？

……悩むな。

夏目にここまで何回も頼まれたらな……

でもなあ……自分の考えを曲げるのもなあ……

「だ、だめ？」

ぐう……

上目遣いは反則だ。

そんな目で見られたら……

そんな目でみられたら……

断れるわけじゃないじゃないかッ!!

「うし、しょうがねえ、『結界師』から『陰陽師』に転職してやる!!」

「ホント!? ありがとうとつ、刃!!」

「ちよ、おまつ!」

ガバツ!!と抱き着いて来る夏目。

よかつたぜ……

周りに人が居なくて。

いたらホモ説が流れちまう。

あの寮監二人が主に流しそうだ。

——夜、屋上。

「おつす、なんだ？タバコか？」

俺は冗談まじりに冬児に言う。

「んなわけねえだろ……」

「ほれ」

俺は缶コーヒーを冬児に向かって投げる。

「サンキュ」

それを難なく受け取る。

「明日の実技さ……霊災の修祓とはな」

「まあ疑似霊災だしな……クラス全員でなら何とかなるだろう」

「夏目は見学だつてよ……俺も見学してえ……」

マジでさ……ダルう……

なんで霊災の修祓なんだよ……

模擬戦でいいだろ。

「試験の必要がないってことだろ？ 陰陽塾は実力主義だ」

「俺たち凡人は、地道にやるしかねえか」

「おい、おまえが凡人だったら世の中のほとんどの人間がクズになっちまうぞ……」

（もつともで。

「冬児さ、最近さ、霊気が乱れてねえ？」

「……そうか？ まあ、意識するようにはなったな」

やばっりか……

「コントロールできるようになったのか?」

「そうかもな……まあ、おまえが心配するようなことにはならないさ。親父さんの治療がバツチリ効いてる。無茶はできねえが」

ならいいだけだな。

「ま、おまえがいれば無茶するようなことにはならないだろ」

「当たり前だ」

そんなこと起きたら間違えなく日本は沈むだろうな。

「そんなじゃ、行くわ」

「おう」

俺は一足先に部屋に戻った。

——翌日、バス。

「ふあああああ……ねみい……」

「まったく……早く寝ないからだぞ」

夏目がプリプリ叱ってくる。

そんなこと言われてもなあ……

ラノベは一度読んだらとまんねえぜ!!

——
広場。

目の前では、教師たちが疑似霊災を起こそうと準備をしている。

正直に言おう。

不安しかねえ。

いくら疑似とは言え、霊災だ。

そこから本物の霊災につながるかもしれない。

まあ可能性の話だが。

そして、時は来た。

「では、実技試験を始める」

「「「はい!!」」」

みんなは術を発動させる。

「よし、いいわ。もう少しよ」

京子がみんなに言う。

隣でメチャクチャ天馬が焦ってるんですけど……

「落ち着け天馬。焦ってもしょうがない」

「わ、わかった」

本当にわかっているのか？

まだあたふたしてやがるぞ。

「みんな、落ち着いて。時間をかけてもいいから確実に靈気の変更を正すの」

時間をかけるのはまずいんじゃないの？

瘴気が漏れてるし、それを吸い込んだらまずいし。

それにしても冬児はうめえな……

焦る様子もないし。

さて、俺もやりますか。

「臨、兵、闘、者……皆、陣、列、前、行」

む？

おかしくないか？

靈気が強くなってないか？

「おかしいわよこれ、靈気が強くなってない!？」

誰かが叫んだ。

すると、地面がひび割れ、そこからも瘴気が漏れてくる。

これはまずいねえ……

「みんな、結界を強めて。抑えるわよ!!」

京子がみんなに指示をする。

だがみんなは少しパニックに陥ってて聞こえていないようだ。

「結界班は現状を維持!!」

「修祓班はただちに結界外へ退避しろ!!」

おっさん教師がみんなに指示を飛ばす。

天馬もコールセンターへの連絡を頼まれた。

「冬児!!しっかりして!!」

冬児……??

まずい!!

「冬児……」

「まだ、もつ……」

とてもそうは思えないんだが……

まあ本人がいいならそれでいいだろ。

「が、余裕はねえ」

ダメじゃねえか!!

その時だった。

ドオオオオオオオオオオオオオオオ!!

瘴気が一気に噴き出してきた。

「まずい!!」

「だめ………結界が!!」

「うぐううううう………」

ますます冬児の調子も悪くなつていく。

しょうがねえ……

やつたりますか。

「十二人の先神よ…百鬼を退け、凶災を祓わん」

それは先代当主達を呼び寄せる召喚式神、破軍。

「東海の神、名は阿明、西海の神、名は祝良——」

鎖が放たれ、瘴気が抑えられる。

「祓いたまい、清めたまう——」

瘴気に、新たに紡がれる神咒。

俺の後ろからなにかが出現する。

「はらいたまい、清めたまう。いわまくもあやにかしこきはらえどおおかみのおおみいずをこいのみまつり、すべてのまがごとけがれをはらいのぞかむと——」

十二の破軍を囲むように四体の式神が顕現していた。

すなわち、北に玄武、東に青龍、南に朱雀、西に白虎。

四神相応の陣だ。

それによって増幅された祓えは、瘴気を極限まで抑える。さて、仕上げだ。

「『式神融合』黄泉送葬龍斬・神獣奉刀」

今回の式神は朱蓮と白だ。

おかげですごい力だぜ。

現れた刀で瘴気のを元を斬る。

すると、瘴気は消えてなくなつた。

俺はくるつとみんなの方を向く。

「これでいい?」

「あ、ああ……す、すまない」

おっさん教師が頭をポリポリかきながら答えてくれる。
すると、固まっていた夏目がこつちに走ってきた。

「すごいじゃないか!!それよりも今のはなんだい!」

後ろにいるクラスのやつらも興味津々のようだ。

みんな耳を傾けている。

まあ答えてもいいだろ。

結構奥の手だけだ。

「今のは式神・破軍だ。花開院陰陽術秘儀で、これを使える者は別格とも言われるほどの術だ。先神を呼び出して、その霊力を借り極限にまで術者の『才』を増幅させるんだが……正直、これはあんまり使いたくない。今のも一割程度で使ったんだが……制御が難

しくてここら一体を吹き飛ばしそうになった」

「「「「.....」」」」

みんな黙り込んでしまった。

とりあえず、俺は式神・破軍を解く。

そして、一番初めに口を開けたのは夏目だった。

「ねえ刃.....花開院ってさ、なに？」

あ.....

この世界に花開院家はないんだっけか？

まずったな.....

そうだ!!

「夏目、この前話しただろう？俺のこと」

「刃のこと.....ああ、そういうことね」

どうやら納得してくれたようだ。
多分だが、俺が転生者だからというのと他の世界のことだろう。
そう思っていると思う。

「お、いい」

冬児が叫ぶ。

何事だ？

「全員……ここから……離れろ……今……すぐにだ!!」

ここまで冬児が焦っている。

それにこの気配……鬼？

直後、瘴気の出ていたところに何かが着地した。

「うがああああああああああああああ!!」

さらに冬児の様子がおかしくなる。

「刃様!!」

コンが声をかけてくる。

だがその声には焦りがある。

俺は原因の方を見る。

そこには、馬鹿でかいキモい鬼みたいなものがいた。

「フエ、フエーズ3………鶴!!」

その瞬間だった。

『ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

鶴が叫んだ。

それはソニックブームのように衝撃を与えてくる。

があああ、うるせえなあ……

クラスのやつらも耳を抑えるが、完璧には遮断できていないようだった。しょうがねえな……

「結」

俺はクラスのやつらと、教師を囲うように結界を張る。

「みんな、無事か!!」

そう訊くと、数人だが返事をしてくれる。

ざっと見回すが、特に被害は出ていないようだった。

「コン……どうした?」

「……刃様、あやつ、手負いです。何かを恐れている」

教師がみんなに指示している中、俺はコンに声をかける。

そして帰ってきたのは少し驚くことだった。

手負い？

あいつが？

一体誰に……

それに恐れる？

「なんだあ？ガキ共が俺の獲物に何やってやがる。おまけになんだこの結界……まったく仕組みが理解できねえ」

俺は声の主を見る。

げ……なんだこいつ。

白髪で、メツチャピアスしてて、装飾品をゴチャゴチャ。

そして額にはバツに刻まれた傷。

「お、鬼喰い……オーガ・イーター」

教師の誰かが言った。

「おいジジイ……その名で俺を呼ぶんじゃねえ。俺の名は鏡伶路だ。十二神将相手に調子くれってと……ぶっ殺すぞ」

やべえ……まったく怖くない。

なにこのチンピラ。

完全な雑魚キャラ臭がするんですけど（笑）

「バカ!! 刺激を与えるな!!」

おっさん教師が言う。

それを無視して近づいていくチンピラ。

そして、また鷓のシャウト。

それに対してチンピラは……

「うるせえ……黙れ」

それだけで黙らせた。

逆に言おう。

そこまですしないと黙らせられなかった。

殺気をぶつけるなり、威嚇するなりあるだろうに。

「甲種言霊だ……霊炎相手に!？」

夏目が驚いている。

そこまですごいのか？

俺は視線だけで魔王を黙らせるやつを知ってるぞ。

「咩!!」

チンピラが言う。

すると、鶴の体に稲妻がほとぼしる。

だが、それと同時に鶴はビルを駆けあがって逃げる。

「面倒かけさせんなよ。もう——」

そしてチンピラは何かを唱え始める。

すると、炎が上がる。

炎は鶴に迫っていき、やがて鶴を包み込む。

そして、鶴はそのまま下に落ちる。

被害？

そんなもんあるわけねえだろ。

俺は結界張ってるんだから。

「はあ、もう少し周りに配慮できないものかね」

「あ、あ？誰だ今ほざいたやつ」

あ、やべ。

聞こえてた。

「俺だけど？なにか？」

「ふうん……おまえ、名前は？」

「一番初めのやつがいい?俺さ、名前変わってるから」

「始めのいいからさっさと答えろや!!」

「土御門刃」

「へえ……おまえがねえ」

なぜ、俺があえて土御門と名乗ったか。

それはだな……面白いことになりそうだからだ。

「聞いてるぜえ……大連寺のゴスロリ娘を泣かしてやったそうじゃねえの。あんなガキでも十二神将の端くれだ。もうちつと胸張ってもいいんじゃねえか?」

チンピラは俺の周りをぐるぐる回りながらしやべる。

落ち着けよ!!

止まって話せよ!!

ガキかよ!!

「俺はその方が好きだぜ……なんせいきがつてるガキの方がイロイロとやりがいがある

からなあ」

その時だった。

鵜が起き上がって襲ってきた。

それをなんかチヨイチヨイつとやって防いだ。

何したかはどうでもいい。

「先にこっちを始末しとくか……おまえあの結界張ったやつか？」

「ん？そっただけど？」

「なら、その結界を使ってこいつを始末してみろ」

「ええ……」

ダルい……いやね、大した作業じゃないけどさ、チンピラに命令されてやるのは
ちよつとな……

「んだよ、鵜ごときにビビってんじやねえよ」

「いや、ビビってないよ。うん。もっと怖い知ってるし」

「へえ……」

チンピラが近づいてくる。

そして俺の胸ぐらをつかんで持ち上げる。

ぐええ……ちよとばかし苦しい。

「実にいいぜそういうの……やりがいがある」

……いい加減むかついてきたな。

ゴオオオオオオオオオオオオ!!

今度はなんだ?

ってまた瘴気か……

そういえばあそこには鶴がいなかったっけ?

「チイ!!瘴気喰って、回復しやがった」

あーあ、何やってんだこのチンピラ。

「おおおおおおおおおおお!!」

冬児がまた叫びだした。

こりや本格的にまずいかな……

「別の霊災? 動的霊災……鶴じゃねえ……そのガキなにか憑いてるな。カツハハ!!」

チンピラが冬児に近づいていく。

いったい何する気だ?

「おまえら、マジ最高だぜえ!!」

そしてそのまま冬児のヘアバンドをとつ……た?

「ハハハ!!こら立派な生成りだ!!落ちるまであと一歩つてどこか?」

あいつは……何をした……？

第5話く生成った？く

— 広場。

「こいつはいい……鬼。しかも生成りとは……」

バレちまったか……

でもいざれ話さないといけないことだったしな。

「生成り？」

「冬児くんが……鬼？」

京子と天馬も驚いているようだった。

「ちゆうとハンパなことになってるなあ……いつそ完全に堕ちちまえば話は早いんだが……大連寺がそうだった。二年前の霊災テロ……その首謀者は自らを核に霊災を引き

起こし、鬼になりやがった。コイツに鬼は憑いたのは案外二年前じゃねえか?」
「そうだけど? なにか?」

確かに二年前……ああ、なるほど。
そういうことね。

「独立祓魔官として、靈災の種は見過ごせねえ」

その時だった。

「気安く触るな……バツテン野郎……十二神将かなんだか知らねえが……生成り相手に調子くれてつと……ぶつ殺すぞ」

おお、元気いいねえ。

だが肝心の冬児はチンピラに殴られて地面に落ちた。

「人が必至に制御してる横で……いい加減にしてほしいぜ」

ああ、必死だったのか。

必死にこいつが頑張ってるのに、チンピラはあんなにふざけて。まあ、止めなかった俺も悪いんだけどさ……

「おい……いい加減にしてくれない？」

「チィ!!上等じゃねえか!!」

チンピラが靈気を開放させる。

ハッ、こんなもんか。

「その程度かよ……ほら」

「なっ?!? テメエ……」

俺は三割靈気を開放させる。

この程度でもチンピラの倍はある。

さすが俺クオリティー。

『鏡!!何してるか!!』

なんだ?

俺は声の主の方、上空を見る。

あれは……烏天狗?

それも三羽も……

何か言いあつてるようだが関係ない。

今はチンピラだ。

どう殺してやろうか?ん?

「鏡!!:鶴はどうした?」

今度はバイクに乗ったあんちゃんだ。

「気配は感じだが、修祓したかんじじゃなかったぞ」

『鏡のバカ、鶴逃がした』

『失態、失態』

「さらには民間人からんでた!!それもどこそこのチンピラみたいに!!あと、殴ってた!!」

俺も便乗して言う。

チンピラが睨んでくるが関係ない。

「どうなってる?」

「鶴なら逃げちm「逃がしたんでしようが、ふざけてて」…あ、あん?」

あれ?俺は本当のことを言っただけなんですけどね……

「何やってんだか……陰陽塾、なるほど。よし鏡!!俺と共に鶴を追え」

「はあ?」

「仕事だ」

「チイ!!」

「鏡がいろいろやらかしたと思うが、今は緊急事態につき、霊災追撃に移させてもらう」

「ご武運を」

おっさん教師が言う。

「刃、冬児、おまえらの名前……覚えてたからな」

それだけ言い残して、消えて行つた。

おおう、なかなかやりますな。

でもちよつとカツコつけすぎやしねえ？

「冬児は？」

夏目が訊いてくる。

「まだ意識は戻ってないよ。なんか俺の親父が施した封印を安定させてるみたいだけ
ど」

正直言つて、俺が動いたほうが早く解決する。

でも、それだとな……

なんかだかな……

「まさか、冬児くんが……」

天馬が呟く。

そりゃそうなるか。

友達が生成りだったなんて知ったらな。

「悪いいな……夏目と京子も。今まで黙ってて……」

「確かに、なかなか言いだせることじゃないわね……」

「冬児のことは責めないでやってくれ。多分さ、俺に気を使って黙ってたんだと思うからさ。それにさ、あいつは安全だ。だって俺が近くにいるからさ……しかもずっとその治療をしてたんだ」

冬児のやつも遠慮しなくていいのにな。

まあその遠慮がちなところは日本人の悪いところだ（笑）

「こんなところにいたのか」

俺は声のする方を向く。

教師？

「塾長が君を呼んでいる」

どうやら夏目を呼びに来たらしい。

しっかし塾長……あの腹黒ババアがねえ……

まあもちろん、俺たちもついていくけどな。

——塾長室。

「そんな!!夏目くんの龍をおとりに使うなんて!!」

京子がババアに食って掛かる。

確かにおとりに龍を使うのはな……

うちの龍だと殲滅しちまあうからおとりにならないし。

「動的靈災は、龍の持つ上質な陰の気を好むの」

「だからって……」

「もちろん強制ではありませんよ。それと、京子さん。塾内ではちゃんと警護をしないな
「さか」

これってさ、遠回しに断るなって言ってるようなもんだよな。

「でも、危険すぎます!!」

天馬も心配しているようだ。

確かに北斗ってさ、緊張感が皆無だもんな……

別に北斗がくたばってもいいけどさ、夏目が怪我するのはいただけない。

「父は……父は許可を出したんですか?」

夏目が口を開いた。

「おいおい……親父が許可を出したらやるのか？」

「祓魔局はそう言っているわ」

なるほど、祓魔局は、ね。

「なら祓魔局に出頭します」

「そんな……」

「夏目くん!？」

天馬も京子も驚いている。

「今回の霊災は二年前の霊災と同じ、夜光信者によるテロ行為であることが極めて高いのです。だからこそ、夏目くんは祓魔局にいた方が安全だとも言えます」

「おいおいババア、忘れたんじゃねえだろうな……その祓魔局からこのまえ夜光信者が

見つかっただらうが」

チリリリリリ

このタイミングで鳴るか？

塾長は受話器をとる。

「ええ、そうですか……」

それだけ言って、受話器を戻す。

そして一言。

「冬児さんの意識が戻ったようです」

「本当ですか!？」

天馬が言う。

「ただ……目を離れたすきに居なくなったらしいわ」

その一言に俺以外の全員が驚く。

「少し朦朧としていたそうだし……正直よくない傾向ねえ」

頬に手を当てながら言う。

ぜんぜんかわいくねえから……

むしろ、ね。

——廊下。

しばらく無言のまま進んでいく。

「バカ刃」

それを破ったのは夏目だった。

「ああ?」

「どうしてすぐに追いかけないんだ?いつもの刃なら、一も二もなく冬児を探しに行くはずだろ?」

「そうだな……そうかもしれないねえ……けどな。俺はおまえの式神だ。だから主の近くにいて主を守る。これが俺の役目だ」

「だから君はバカなんだ。そんな中途半端な気持ちで僕を守れるのかい?」

「ああ、守れるよ。フェーズ4までなら体術だけでも守れる」

「え……」

さすがにこの返しは予想外だったらしい。
普通ならここで無理だ。

とか言うんだろうけど、俺は違う。

くぐつてきた修羅場の数が違う。

越えてきた脅威の大きさが違う。

だから俺には関係ない。

「そ、それでもだよ!!冬児の親友なら探してやれよ!!ほら、行け!!」

……もうヤケクソじゃねえか。

まあ主の命令なら行くしかねえか。

—
???

「コン」

「ははあ」

天馬も来たか……

うし、やるか。

「冬児を探すのを手伝ってくれ」

「かしこまりましてございまする」

日本語が変じゃないか？

「天馬はあつちを頼む」

「う、うん」

天馬つてさ、体力なさすぎじゃね？

ちよつと走っただけではあはあいつてるし。

とりあえず、二手に分かれた。

コンも、上空から探しているようだ。

それにしても、どこに行ったのかなあ。

気もさぐれねえし……

つーか、しらみつぶしにさがすのに渋谷は広すぎる。

おお？

「いってえ……」

誰かにぶつかったようだ。

「おいゴリア、どこ見てやがんだ!!」

……とんだチンピラにからまれたな。

「おいなんだその顔は!!」

「……放せよ。ぶち殺されてえのか?」

「ひいひいひい!!」

胸ぐらをつかまれたので、殺気をぶつけてビビらせる。

「そのへんにしておかないか? いやなら……俺がt「いえ、結構です。どもつした」

……誰かさがしてるのか?」

こいつ……なんでわかる?」

「誰を探しているか分からないが、同じ制服の少年なら少し前に見かけた。様子がおかしかったから覚えている」

「そうか……どこでだ?」

「この先だ」

そうやって指察したのは実技試験の場所。

「サンキュ」

「早くいってやれ」

俺は駆けだす。

そして、一度振り返る。

そこには誰もいなかった。

もしかして……いや、まさかな。

——実技試験会場。

「ざまあねえよな……塾長に釘を刺されたつてのに、ふたを開ければこのザマだ」

とりあえず、俺は『写輪眼』を開眼させる。

ふむ、鬼気は感じられないな。

でもこれは……鬼の匂い？

「らしくねえな冬児、おまえには情熱がないから鬼は住みようがないんじゃないか？笑える話だな、鬼になりたいとかスカしてたおまえがな」

「本音は今も変わっちゃいねえさ……鬼になりたいまでとは思わねえでも、なっつかまわれないとは思ってる」

はあ……まったく、なんでこの世界の人間はこう面倒なのが多いんだ。

「正直、これが俺の考えなのか鬼の考えなのかわからねえし……正直どつちでもいい。変えようがねえのさ……俺の本質に根付いたことだからなあ」

「なにが本質だ……まだ数十年しか生きてねえガキがナマ言ってるじゃねえぞ!!」
「悪いが……俺はお前とは違う」

そりゃそうだ。

片や、神様。

片や、人間だけど鬼に憑かれている。

「そうだな……でもおまえは考え過ぎだ」

「何も考えないバカよりました」

「何も考えてないか……そうか、そう見えるか」

何も考えてない。

それは何も考えてないことを考えている。

なに言ってるか分からないけど、そういうことだ。

あー面倒だな。

「帰ってこいよ」

「帰ってどうなる? また封印を強化して、自分の中の鬼をごまかして……このままずつと先、俺は爆弾を抱えたまま生きていくんだぜ!! それがどんなもんか……おまえにわかるのか!？」

「ああ、わかるよ。おまえが爆弾なら俺は核だ。ちよつと衝撃を与えただけで世界を破壊しつくしちまう」

「そんなのは建前だ!! そうだ……そうだ!! 一番手っ取り早いのが、さっさと鬼になって払われちまえばいいのさ!!」

冬児の姿が変わる。

鬼武者?

髪が白に染まった。

体には青い鎧をつけている。

これが冬児に憑いている鬼?

ふうん……かっこいいな。

「つーかき……甘ったれてんじやねえぞ、このガキが。おまえの命はもうテメエ一人のもんじやねえんだよ。俺や夏目、京子に天馬。かかわった人が一緒になつて創り上げたもんだ!! テメエだけでどうこうしていいもんじやねえんだよ!!」

「俺と殺りあおうつてののか!?! 今の俺と!! いっぱつ当たるだけで頭が砕けるぜ!!」

「やってみろよ。俺はデコピンで頭を吹き飛ばせるぜ」

「バカが!!」

俺は特攻する。

もちろん加減をしてだ。

速度は精々普通の人間程度だ。

何回も攻防を続ける。

だがそれは終わりを告げる。

俺は動きを止める。

そして、冬児が俺の顔面に一撃を入れ……ずに止める。

「どうした? できねえのか? そうだよな……俺の頭が砕けちまうと思ってるもんな!!」

俺が腹に一撃を入れる。

冬児は倒れる。

そして俺は冬児に馬乗りになる。

胸ぐらをつかむ。

「伊達によお、何年もつるうじやいねえんだ。おまえに俺が殺せないことくらいわかる。なんせおまえは心から仲間思いだからなあ……それがおまえが自分自身にかけて呪いだ。たかが鬼ごときにどうこうできるちやちな呪いじゃねえ。そいつが解けねえかぎりなあ、おまえは鬼と戦うしかねえ……いい加減よお、腹くくれや!!」

その瞬間。

冬児の鬼化が解ける。

どうやら成功か……

そんでもな……

「手間かけさせんな」

俺はデコピンをする。

それは結構な力を込めて。

もちろん冬児は気絶したよ。

「はあ、これが青春ってやつかねえ……何万年前にやったきりだったよ」

次は鶴か……

第6話～修祓してやるぜ!!～

???

とりあえず夏目の気を追ってきたんだが……
なんだこりや？

かなり強い霊祭が二つ。

それも片方は結構な速さで移動している。

こつちが鶴だろう。

それで、その鶴の気配は追ってきたんだけど……

「(イヤ)ど(イヤ)だ?」

絶賛迷子中 (笑)

どうしよつかなく……ってなんだ？

急に光ったな……

あつちか……

「行くぞ、コン」

「ははあ」

しばらく走る。

すると、バイクのエンジン音が聞こえてきた。

止まってしばらくすると、バイクがこっちに向かつて走ってきた。

つか、後ろに追ってるのって夏目じゃねえか？

「刃!!」

ほれみろ、夏目だ。

夏目に駆け寄ろうとした時だった。

突如、上空から式神が投げられる。

そして、地面にあたると同時に、爆発する。

もちろん俺には効かない。

A Tフィールドが自動で防御するからな。

コンは……

まあ、大丈夫だろう。

俺は夏目の元に向かう。

その時だった。

「ひゃあああああああああああ!?!」

爆炎の中から一人でバイクに乗った夏目が出てきた。

『小僧、乗れ』

烏天狗が俺にヘルメットをかぶせてくる。

もちろんそれを俺はぶん投げる。

コンが俺を持ち上げようとするが、それより早く俺はバイクに乗り込む。

もちろん、夏目の前だ。

なんか乗れたし。

細かいことは気にしたら負けだ。

「ひゃああああああ!!」

「落ち着け夏目!!」

「や、刃!!?いつの間にそこに!?!」

「ついさっきだ」

俺は夏目に声を駆けながらバイクを操る。

なんか俺の運転しにくいなって思ったらこいつ式神か。

しばらく走ると、北斗が目の前に落ちてきた。

「北斗!?!」

俺はバイクから降りる。

「北斗、俺を乗せてこのまま鶴の所まで行け。コン、お前も来い」

「刃君!?!」

北斗は素直に動いてくれた。
なかなかないやつだな。

——上空。

鵜を見つけた北斗はかかんに鵜に体当たりをする。
体で締め付けたりなど、様々な攻撃をする。

そんななか、コンはと言うと……

「我こそは——」

と、長々に名乗って特攻していく。

結果？

そんなもん決まってる。

デコピンで吹き飛ばされた。

何回も何回も吹き飛ばされていった。

途中で、烏天狗が来たけど、なかなかだった。

「さて、そろそろ反撃しますか」

「刃様!!」

なんだ？

そう思っただけの方を向く。

すると、コンが鶴の一撃を防いでいた。

しかし、力が足りないのか押され気味で体にラグが走っていた。

ラグ？

ラ……グ……

消えちまうのか？

このままだと……

北斗みたい……

「 } } } 」

誰かがなにかを叫んでいる。

だが俺には関係ない。

今、殺ることができたから。

「モード、エンジェル」

頭の上には輪っかが、背中からは翼が生える。

両方ともATフィードでできたものだ。

「最大の拒絶」

俺は鵜を下に弾き飛ばす。

それにつられて、俺も地面に降り立つ。

「刃!! いったいな……にが……」

夏目が俺が下に降りてきたのがわかったのか、近寄ってきた。

だが、俺の顔を見て言葉が続かなくなった。

きっと俺の顔は怒りでゆがんでいるのだろう。

「夏目か……少し離れてろ。巻き添えくらつても知らねえぞ」

夏目に一言だけ言って、鵜を見る。

「式神・仰言（ぎょうげん）……金生水の陣（こんじょうすいのじん）」

この技は、普通なら準備に三分間必要な大技だ。
そう、普通なら。

俺ならそんなに必要ない。

普通の人間に三分必要なものは三秒も必要ない。
故に、すぐに技が出せる。

金生水の陣……それは仰言という純度99、9999%の軟水で出来た水の花で方陣
を作る。そこから仰言を噴出させる。

この花に触れたものはすべて溶ける。

「溶けろ………鶺鴒」

『ギヤアアアアアアアアア!!』

鶺鴒は花に捕まり溶けていく。

だが、消えはしない。

抜け出そうともがくが意味をなさない。

もつと苦しめ……

コンをラグらせた罪は重いぞ。

しばらく、溶けたり再生したりが繰り返される。
もう飽きてきたな……

「そろそろフィナーレだ。おいで……ミツキ」

金色の魔法陣が展開される。

そこからでてくるのはミツキ。

「お久しぶりです、お兄様!!」

抱き着いてくるミツキ。

俺も抱き返す。

そして頭を撫でる。

鵜?

ああ、まだ一生懸命もがいてるよ。

「刃!!その女の子は一体誰!?!」

夏目？

なんでここにいるんだ？

離れてたはずだろうに。

「お兄様、こちらの方は？」

「ああ、土御門夏目。この世界での俺の嫁だ」

「……また『神使』を増やしたんですか？」

ジト目で見ないでおくれ。

「刃!!さつきから二人だ話してばっかじゃないか!!それよりこの女の子は？」

「ん?ああ、こいつは神浄ミツキ。『箱庭』で妹にして、そのまま『神使』になった九尾の妖だ」

「九尾!?!まあそれはおいておこう。なんでこの子が『神使』なんだ!?!僕だけじゃないのか!?!」

「あれ?言わなかったか?『神使』は数十人いるって。

「あ……」

人の話はちゃんと聞きましたよう。

これは何度も言いました。

いい加減に学習しましょうね。

「とりあえずさ、夏目。ここいにいる。俺は鶴を殺す。ミツキ、衾々切丸（ねねきりまる）預けてただろ。ちよつくら貸してくれ」
「わかりました」

すると、腰から衾々切丸を取り出した。

え!?

どこにそんな隙間が!?

もしかしてミツキはスキマ妖怪になっちまったんですか!?

そんなわけはないだろうけど。

「ミツキ、九尾の姿に戻れ」

「わかりました……これでよいのか？」

「ああすまない」

「なに、そなたが気にすることではない」

相変らずすごい豹変ぶりだ。

まあこの話し方も好きなんだけど。

「さて、ミツキ。あそこにいる鶴とかいうクソ野郎がよお、俺のかわいいかわいい式神のコンを泣かせたんだけどさ……どうしてやろうか？」

「コンとはその子狐のことかえ？」

「そうだ。どうやって殺すのがいいと思う？」

「う、うむ……そうじゃな……瞬殺という選択肢はないのかえ？」

「あ……ミツキさんマジ天才」

どう苦しめるかに集中しすぎてその選択しが出てきてなかった。

案外瞬殺ってさ、苦しそうじゃない？

というわけで……

「この祢々切丸を使って、鶴を瞬殺しようと思いまーす」

「うむ、行つて来い」

「なに言つてんだ、最初はおまえの狐火で燃やすに決まつてんだろ」

「げえ……」

なんのために呼んだと思つてるんだ。

まさか祢々切丸だけのためだったら呼ばない。

「はあ……仕方ないのお……ほれ、これでいいじやろう」

「おお!!さすがミツキ。愛してるぜ!!」

「わらわもじや、刃」

では、殺りますか。

「鶴……お前はやつちやいけないことをした。それは俺の家族を傷つけることだ。コンは式神とはいえ、俺の家族だ。傷つけた分、キツチリとな……」

祢々切丸……それは本来、鶴切丸と言う名だった。

それが徐々に変化していき、最終的に今の祢々切丸と言うなになった。

これは名のまま、鶴を斬るために生み出された刀だ。

だから、ちようど良くない？

「というわけで、死ね」

俺は鶴に神速で近づき、首を斬る。

鶴は黒いものを出して消えていく。

これぞまさに瞬殺。

あつけねえ……

これだとすぐになんでも片付いちまうな。

「はあ……やっぱり規格外だなあ」

「冬児？それに雪風？」

なんで冬児が雪風と一緒にいるんだ？
しかも……

「なんでツノ出っ放し？」

「似合うか？」

ニツと笑ってサムズアップしてきやがった。

どうやらふっきたようだな。

いいこと……なのか？

「まあ、悪くないぞ」

む……

この気は……

「冬児、夏目には先に帰ったって伝えておいてくれ」

「どうしたいきなり？」

「俺はチンピラにちよつとお灸をな」

「ああ……」

冬児は少し顔が引きつった。

ハハハ、これから何するか分かったんだろう。

俺はチンピラの元に向かった。

——
歩道橋。

「素人共があ……しかし皮肉だなあ……これで土御門夏目の噂は信憑性を増し、夜光信者はむしろ活気づく。それにあの生成り……二年前の大連寺と関係しているようだな……」

「だとしたらどうするんだ？殺すのか？」

「誰だ!!」

チンピラがこつちを向く。

「俺だよ……神淨刃さ」

「なんだテメエか……殺されにでも来たのか？」

「いやいや違うよ……俺が殺しに来たんだ」

「んだ……これ……」

俺は靈気を五割解放させる。

それに伴い、髪の色が白みがる。

「どうした？」

「テメエなんだこの靈氣の量は……俺なんて目じゃねえ。ヘタしたらアイツよりも……」

「アイツつてのが誰だか知らねえがよ、これでもまだ半分だ」

「これで半分だど!?! テメエますます何者だ? まさか——」

「そこまでにしときい」

この声は……大友先生?

チンピラの後ろで何やってんだ?

「誰かと思えば引退した大友先輩じゃないすか」

「ご無沙汰しとるなあ」

何だ?

知り合いか?

つーか先輩?

つてことは大友先生つて元……

これ以上は考えるのをやめよう。

「引退した人が何してるんです？」

「それを答える前に……刃くん、キミはもう戻りいや」

チツ!!

情報が手に入ると思ってたんだが……

ここで何か術式を発動させても感づかれるだろうな。

大人しく引くか。

「どもつす。じゃ」

俺は夏目たちの元に戻った。

???

「おつす」

「ふやあ!?!」

「あ、先に帰ったんじゃないのか?」

「ん? ああ、ちつとな」

今ここにいるのは俺、夏目、冬兎、コンにミツキだ。

どうやら歩いて帰っているようだった。

その時だった。

一台の車がやってきた。

「閉鎖が解かれた? いや……違う」

俺たちの前で止まる。

そして後部座席の窓が徐々に降りていく。

「刃様?!」

コンが顔を青くして叫ぶ。

「刃………こやつ……」

「ああ………結構やるな………初めて会ったときの霊夢より二回り強い程度だ」

それにしてもこいつ………人間じゃねえな。

「少しは回収するはずじゃったが………どうやら跡形もなく払われたようじゃのう。まあ良いまあ良い、今宵は実に楽しませてもらうた。楽しみじゃのう、実に楽しみじゃ。じゃがお主らは雛も雛じゃ。卵から孵ったにすぎん………まあその小僧は別じゃ」

俺に視線をずらし、そう言った。

「精進するが良い。そして早く……こちらにおいで」

「あ、あなたは誰だ!？」

夏目が怯えながらも訊く。

「儂の名は……蘆屋道満」

なるほどね……

でもまあ……

「ジジイ……俺の大切に手エ出したら……『破壊』しつくすからな」

俺は殺気に乗せながら言う。

「ふおふおふお」

それを何事もなかったようにして、去っていった。
また、厄介なのがきたな。

「や、やいばあ……」

「安心しろ……おまえに手だししたら……日本ごとあいつを沈めてやる」
「おいおい……」

さて、これからどうなるのか、な？

第7話く神童（笑）く

——一ヶ月後、陰陽塾。

『新塾生のみなさん、入塾おめでとうございます。陰陽塾塾長の倉橋美代です』

いやあ、俺も先輩ですか。

うれしいな。

この時までではそう思ってた。

この時まででは。

『それでは、新塾生代表に……あいさつをしてもらいましょうか』

これが波乱へのカウントダウンだった。

『神童と呼ばれている、大連寺鈴鹿さんです』

「「はあ?」」

俺と夏目と冬児の声がハモった。

おいおい……

まさか……

『はじめまして、みなさん。大連寺鈴鹿です☆』

「「「「きやああああああああ!!!」」」」

「「「「おおおおおおお!!!」」」」

その瞬間、あたりは悲鳴にも似た叫びが響いた。
だが俺たちは違う。

「「え……」」

俺たちは顔が引きつった。

なんで?

仮にも十二神将（笑）だろ。

なんで陰陽塾なんかに……

ああ、罰ね。

『えへ、あたし今日はすつごく緊張しちやつてえ——』

ここで、祭のときを思い出してみよう。

「うっせーよ、ブス!!」

そういいながらチョコバナナを北斗に向けていた。

うわー……

これがかの有名な、ブリっ子か。

もはや二重人格の域だぞ。

『でも、とつてもうれいす』

さらに振り返ろう。

「虫が多いからア!!」

……女の子、怖エ……

『同世代の人たちと、陰陽術に取り組むことって……ずっと、あたしの夢だったんです』
もっと振り返ろう。

「ちんこもいじやうから♪」

……とてもこれを満面の笑みで言ってた人間とは思えない。

『今日、その夢がかないました!!』

両手を広げて満面の笑みで言う。

「あおり、横顔に38°。計算しつくされた角度だ……自分が一番かわいく見えるすべ
を知り尽くしている」

「おまえもよく知ってるなそんなこと……」

冬児がキメ顔で言っている。

よく知ってるな、本当に。

「ひっ」

それだけ言って夏目は下に隠れた。

どうしたんだ？

「あ……」

目が合ってしまった。

刃くん、終了のお知らせ？

一瞬鈴鹿の顔が赤くなったと思ったら、一瞬にしてイケナイことを思いついた顔に変わった。

「冬児、間違いない。やつだ」

「……………」

冬児はキメ顔のままだ。

てかいい加減キメ顔やめろし。

『せーんぱーい!!刃先輩じゃありませんかー』

その一言で生徒が俺の方を向く。

てかよく俺がここにるのがわかったな。

『あら、彼とはお知り合い?』

ババアが余計なことを鈴鹿に訊く。

——教室。

「神童とファーストキス!? あんた、普通の高校に通ってたんでしょ!? それがどこでどうしてそうなったのよ!？」

京子が顔を真っ赤にして俺に言う。

つか、周りの女子の顔が真っ赤だ。

「そうだよ」「そうよ」「なんでだよ」

などと、いろいろなことを言われる。

「落ち着け、まあ落ち着け」

「冗談じゃないわ!!」

バツ!!と腕を広げてガー!!つとしゃべってくる。

「おかげで気になってしょうがなかったわよ!!」

「いやいやいや……」

なんで?

なんで気になった?

別によくね、どうでも。

「いいこと刃!!彼女は陰陽庁がイメージガール扱いする業界のアイドル。実力も兼ね備えている!!ぶつちやけ、塾生のあこがれの的なのよ!!」

うんうん、ととなりでニヤけながら天馬がうなずいている。

ちよつとキモい。

「マジかよ……」

「それが!! どうしてあんたみたいの家柄だけ半端にいいってだけの落ちこぼれ塾生と!! キ、キ、キ、キス!! しかも、一度しかないファーストキスなんてことになるのよお!! おかしくない?! おかしんじゃない?! おかしいわよ!!」

「なにがあつたか、教えてくれたっていいじゃない」

「さあ答えなさい!!」

天馬……オカマみたいでキモいぞ。

それに京子もがつつきすぎだ……

「二人は恋人同士なのお?」

「ホントにキスだけ?」

「「「「きやああああああああ!!」」」」

はあ……

面倒だなあ。

ボン

コン？

なんで出てきた？

「ねえなきうえ、大人しくしておれば!!」

コン……おまえは俺の味方なのか。

もうそれだけでいいよ。

「ねえコンちゃん。私たち、別に責めてるわけじゃないのよ」

「殺気立っておったではないか!!」

これはコンが正論を言っているぞ。

殺気立ってたぞ。

「気にならないあ？十二神将の一人が、刃とキスしたって言うてるのよ？キスってわかる？」

「こよお？」

「口づけとかあ、チュとか……」

「チュ……チュチュチュチュチュウ!?」

コンまでもか……

真つ赤になつて涙目で俺を見てくる。

京子のやつ……覚えてろよ。

このかりは絶対に返す。

「そーいや、冬見くん、同じ学校だったよね?知らないの?」

天馬が冬見に話を振りやがった。

「そうだなあ……キスつてのは初耳だがあ、恐らく……あの祭りの夜だな」

「「「きやああああああああああ!!!」」」

本当に女子はこういう話が好きだな。

てか、天馬も混じってるし。

その時だった。

バン!!

夏目が机を叩いて立ち上がった。

「失礼……」

全員が震えながら夏目の方を向く。

「刃と……話があるんだ」

ものすごい空気を纏ってそう言ってきやがった。

——階段。

「だからさあ、あれはキスじゃねえって……逆レイ——」

「そんなことはどうだっていいんです。忘れたんですか？ 去年の夏。私は大連寺鈴鹿に会っているんですよ？——彼女は見たはずですよ。巫女装束の女としての私を」

「ああ……なるほど」

確かにあいつはそれをネタになにかしてきそうだなあ……

まあいざとなったら『写輪眼』、ね？

「入塾式ではとっさ穩業の術で気配を消しましたが……このままだといずれ……」
「しようがねえ、とりあえず放課後に俺が話してみる」

とりあえず話してみないとな。

——放課後。

「帰った？いつ？」

教室に行ってみると鈴鹿は帰ったとの返事が帰ってきた。

「ついさつきです」

「一緒に帰ろっかなあと思ってたんですけど……」

「なんか話しかけるきつかけが見つからなくて」

ああ……あいつ独特な雰囲気かもしだしてんもんな。
それにアイドルみたいらしいし。

「それより!!先輩って大連寺さんの元彼だったりするんですか?」

「あいつとは——」

「あ、今ちよつと間があつた!!」

「あいつだって!!」

「「きやああああああ!!!」」

うるせえ……

もしかしてしばらくこのままか?

やってられねえぞ!!

——廊下。

「ああ……ファーストキスはねえぜ。だいたい俺のファ——」
『ま、まことにさようなのでございますか？』

コンか……

実体化しないまま声出せたんだな。

ボン!!

おお、実体化しましたか。

「コン……俺のファーストキスはもつと昔だ」

「昔!?刃様が——」

……察してくれ。

ものすごく長いんだ。

コンの一言って。

もう八割以上は聞き流すしかねえ。

「ハッ!?!」

コンが急に構えた。

ああ、なるほど。

誰か来たのね。

「……なんか用か?」

「……幼女……」

……こいつもしかして……同類（ロリコン）か!?

「幼女だわ」

「コンのことか？」

「狐の幼女」

「ううう？」

コンが俺のことを見上げてくる。

俺にどうしろと？

「かわいい狐の幼女」

コンは怯えきつてる。

何かを感じ取ったんだろう。

「こいつは俺の護法式だ。で、なんだ「かわいい狐の幼女の式神」……」

こいつは俺以上に特殊だ。

「つまりあなたは神淨刃」

「俺のこと知ってんのか？」

「はあ」

なぜ小首をかしげた。

「おまえは何だよ」

「私はあなたの先輩」

「三年か……まあ歳は俺のがはるかに上だが」

「私が小さいからね」

「ああ？」

「私が幼女だからね」

あ、こいつ面倒なやつだ。

「いいのよ、よく間違われるから」

「一年に？ 幼女にか？」

「私、すごく若く見られるの」

「安心しろ、確実に幼女には絶対と言ってもいいほど見られねえ」

その瞬間、不自然に震え始めた。

なんなんだこいつ。

本当に面倒だ。

その時だった。

一歩一歩コンに歩み寄っていく。

そして、頭を撫でようと手を出した。

が、コンに怯えられた。

そして、へこむ。

少し離れて三角座りをした。

……もう帰ってもいいよね？

「そんなに幼女が好きなのか？」

「違うわ。土御門の分家の息子がそういう式神を連れてるって知ってたから」

はあ？

なんで？

それになんの意味があるんだ？

「それは？」

俺の左目尻にある五芒星を指さす。

「いろいろ訳ありだ。まあ、呪術の——」

「似合ってない」

……ぶち殺してやろうか？

「じゃあ、またね」

そして最後にコンを撫でようとするがまた怯えられる。

あきらめろよ……

——
函書室。

「ここにもいない、か。しっかしなんなんだ？さっきの幼女好きの幼女は……」
「そのロリコン」

この声は……

「鈴鹿か……?」

「相変らずの……てか顔変わってない?」

「ああ、これが本来の俺の顔だ」

「へえ……なかなかじゃん。それより私のツインテールに熱い視線向けられても、迷惑なんですけどー」

「あ、ごめん。俺ストレート派だから」

「……………」

「……………」

無言がこの場を支配する。

先に口を開いたのは鈴鹿だ。

「今朝のどうだった? 酷い目に会ってくれてるとーうれしいんですけどー」

「喜べ、大変な目に会っているとこだ」

「ざまあ!!」

「……おまえ、猫被るのも大概にしとけよ」

「アタシには立場ってもんがあるのよ」

立場ねえ……

だったらそれをわきまえろっての。

「そんで？入塾したのなんか理由あんのか？」

「なんでアンタなんかに話さないといけないわけ？」

「つれねえな……ファーストキスの相手なんだろう？ハニイ」

「なっ!？」

顔を真っ赤にして固まる鈴鹿。

なんだなんだ？

普通にかわいいじゃねえか。

「はあ……罰則よ。ペナルティ」

「去年の件か？」

「ホントなら、私はもうこの世にいないはずだったのよ……それが誰かさんのおかげで、みじめなもんよ」

「よかったな、その誰かさんがいてくれて」

バツ!!と一瞬こつちに顔を向けてまた戻した。

一瞬だけだったけど、涙目だった。

なんか、いいな。

『神使』のみんなは涙目になるなんてことがなかなかないからな。

「兄貴は？埋葬してやったのか？」

「ん」

コクつと一瞬うなずく。

「ペナルティっていつまでなんだ？」

「三年か……たった三年か……よかったなそれだけで」

「はあ!?!バカなの!?!」

「なんだそれ」

鈴鹿の額にはバツテンがかかっていた。

「呪術？」

「そうよ……私の呪術を封じるね」

「ふうん……」

俺はよく見るために鈴鹿に近づく。

ふんふん、なるほどなるほど。

解呪は簡単だ。

「ふ、封印は暫定的だし……アンタぐらい余裕で倒せるんだからね!!」

急に立ち上がったと思っただらなんだそりゃ?

つーか、俺を余裕で倒せるとか……ほとんど、いや、全世界で無敵じゃね?

「はいはい……おまえ、まだあの夜のこと気にしてんの?」

「は……はあ? 自意識過剰だつーの。ああ、そうそう。土御門家の時代当主の夏目。いまだにこんなところで講義を受けるけるようじゃ、アタシの敵じゃないってゆーか」

こいつバカだ。

夏目の正体に気付いてない。

「そーいや、私って土御門夏目って見たことないんだけど……ねえ、本人に会わせなさいよ。頼んだわよ、ダーリン♪」

……どうしましょ。

——翌日、教室。

隣では一生懸命伊達メガネで変装しようとしている夏目がいる。

「ははは、それ意味あんの？」

「くっ、だいたい刃はうかつすぎる!!」

「まあ封印の件は収穫だった。これで夏目の霊気の偽装も、見破られにくくなったな」

だろだろ。

俺っち、頑張りましたよ。

「それにな、どんなに才能があっても根っこのところはガキだ。そうしようもないクズってわけでw 「せんばーい!! おっはよーございまーす♪」 …うげえ」

きやがったな……この諸悪の根源め!!

「穩行穩行」

「はっ!!しっしっ——」

……悪い気はしない。

ただ、そのせいで周りが騒がしくなったけどな。

「そういうことならわざわざ二年の教室に来なくてもいいんじゃないか？」

そう言いながら鈴鹿と教室を出ていく。

出た瞬間に走り出す。

階段。

「はあ……いい加減にしてくれないか？」

「一年の教室つて、退屈なのよ」

「友達つくれよ」

「アタシと釣り合うわけないでしょ。もちろんアンタもね☆」

……いやいや、誰も聞いてませんけど？

「だったら新入生にからめよ」

「いやよ、疲れるじゃん」

なんだこのわがまま姫様は……

リアスを思い出すな。

「だいたいおまえは猫被ってるからだろ」

俺は鈴鹿の手首をつかみながら言う。

「手が……痛い……」

「あ、わり」

なんだよなんだよ……普通にかわいいじゃないか。

「そうだ、土御門夏目。同じクラスよねえ」

「そうだけど」

「どいつなのよ、会わせなさいよ」

どうしよ……最終手段『写輪眼』を出すか？

いや、まだ大丈夫だ。

「今日は休んでる。高熱でだ」

「そう……ならまた今度ね」

おおぅ……信じてくれたよ。

—— 昼休み。

「せーんぱーい♪お昼一緒に食べましょう♪」

またきやがった。

夏目は冬児に言われて穩行をする。

——
図書室。

「今日はここからここまでの本でどうだ？」

夏目が参考書を指さしていく。

そしてやつが来た。

「せーんぱーい♪」

そしてまた夏目は穩行をする。

「やだーもー、なに似合いもしない難しい本を読もうとしているんですかあ？」

——書道。

「せーんぱーい、♪」

またきやがった。

隣の夏目が思いつきり筆を振り上げて俺の方に墨を飛ばしてきやがった。

が、そこはもちろん俺の結界で防ぐ。

夏目？

なんか穩行して机の下にもぐってるけど？

「あれえ？この書きかけの書、誰の？」

——放課後、噴水。

「もう無理です、体がもちません」

夏目が眩く。

「ああ、そろそろ俺もイラついてきてる」

本当にどうしてやろうか？

——
階段。

「ここは刃が本音で話したほうがいいと思う」

冬児が提案してくる。

「そうか？」

「刃、おまえじゃなきや意味がない」

夏目が俺と冬児を交互に見る。

やるつきやねえか……

——翌日、廊下。

「いやーん、せんぱーい♪どこいってたんですかあ？」

「ん？ああ、俺もおまえを探しててな」

俺は鈴鹿に近づいていき、そして頭を撫でる。

「ほれ、いくぞ鈴鹿」

「な、ちよ、な、ちよちよお／＼／＼」

俺が肩を抱き寄せながら歩くと、鈴鹿は顔を真っ赤にする。

照れてんのか？

んん？照れてるんだらう。

俺の前には顔を赤くしてモジモジしながら座っている鈴鹿がいる。

——ファーストフード店。

「どうした？」

「な、なんでもないわよ」

そうやって飲み物をストローでチューチュー吸っている。

もしかして、こういうところ入るの初めてなのか？

アーシアみたいだな。

「あ……あんた今、ちょー生意気なこと考えてなかった？」

「ん？なかなかするどいな。おまえはまだまだかわいいなと思つてたところだ」
「むっかつくー、ザコのくせに」

俺がザコ……

まだまだ修行が足りないのか？

いや、一番最初に百年間みっちり力の使い方は……

あ……使い方は修行したけど練度は……結構上がつてるな。
今まで何万年も使ってきたわけだし。

「どうだ？陰陽塾は」

「その上から目線、いい加減にしろつての!!」

俺を指さしながら言う鈴鹿。

人を指さすな。

あ、俺人間じゃなかった。

「まあなじめてないんだらうけど」

「なじむきないし」

頑固な子だ。

「面白いやつだっていると思うぞ」

「なにそれ、おっさんくさ」

「まあ俺は歳だけ数えたらもうおっさんもいいとこだ。クソジジイってとこだな」
「はあ？アンタ歳いくつよ？」

えーつと……

神界で1000年過ごして、『箱庭』で1000年。

『リリカル』で50年位に、『D×D』で5万年だっけか？

だから……

「5万1150歳つてとこかな？」

「はあ!?!アンタ嘘つくならもつとまし……な……本当なの？」

俺が真剣な顔をしているからさとっいたらしい。

「本当だ。ほら、冷めないうちに食べよ」

俺は鈴鹿のハンバーガーをさしながら言う。

「あ？あ？あ？」

右、左、そして前に体を振り、じーっとハンバーガーを見つめる。

食べ方が分からないのか。

俺は鈴鹿のハンバーガーを手取る。

そしてラッピングを半分くらいむく。

「ほれ」

そして前を出す。

「じ、自分でできたし／＼／＼」

「そうか」

「もぐぞ、ぜってーもぐ!!」

ナニをもぐんですか？

やめてくれよ……

マジで生きてる価値が半減するから。

鈴鹿はハンバーガーをリスみたいにモグモグ食べている。

「おまえさあ。クラスでもそんな調子でいればいいのにさ」

「あたしには立場ってもんがあるの」

「おまえにとって、その十二神将って立場はそんなに大事なのか？」

「あ……」

ハンバーガーから口をはなして呟いた。

「兄貴のことも決着がついたし、入塾したのもいい機会なんじゃないの？新しい自分が見つかるかもしれないだろ？」

すると、目に見えて暗くなっていく鈴鹿。
ハンバーガーも下に置いてしまった。

「わりい……ちと無神経だったな」
「どうして……」

鈴鹿が呟く。

どうした？

「あんた、私のこと恨んでないの？」

「恨む？何をだ？」

「あの時の式神のことよ!!」

ああ……北斗か。

でも今は冷静だかな。

それに式神操ってるやつに会えたし。

「あんたの式神潰した時……あ、あ、あたしのことすげー殺そうとしてたじゃん!!」

目に涙を浮かべて言ってくる。

ああそうか……ずっとそれを気にしてたのか。

はあ……

「バカめ……あの時のことを気にするのは、選択を間違った俺だけだ。おまえが気に病むことなんかない。変な気をつかうな」

そして本格的に泣き始める鈴鹿。

俺は頭を撫でることしかしない。

髪にそって、やさしく。

「あたし、あたし……」

さらに泣く。

かわいい子の涙はあまり好きではない。

「まあ、北斗は死んでない。あいつは特殊な式神だったしな。遠くから術者が操っていたんだ」

「え？遠隔操作？簡易式？」

「そうだ。北斗の主は今もどこかにいる。つか、会ったし」

「なによそれ……あたしが満足すればそれでいいわけだし」

急にどうした？

これだからガキは……

まだ初めて会ったときのフェイトの方が……ってあの世界の子供は精神が以上にとなだったつくな。

「あたしは……新しい自分を……あたしのでで掴むんだ!!チツ!!クソ、覗き見してんじゃねえ!!」

急に立ち上がって叫ぶ鈴鹿。

「テメエだよ!! 穩行ぬるすぎい!!」

「ふああ!!」

柱の後ろから出てきたのは夏目だった。

「はあ……何してんだ夏目……あ」

「夏目?」

あ、まじい。

ばらしちまった。

「ええ?」

じつと夏目を見る鈴鹿。

「あ!!あの時の巫女!?! ああ……これは楽しくなってきたじゃん」

マジで『写輪眼』の定番か？

——登校時。

「ダーリン♪おはよーがぞいませーす♪」

手を振りながら駆け寄ってくる鈴鹿。

「ああ、おはよう」

俺は普通に返すが、夏目はぐったりしている。

ちなみに、今この場には俺、夏目、冬児、京子、天馬がいる。

「あれー？今日元気ないですねえ？あ！！土御門夏目さんですかあ？」
「んん」

ぐったりしながらもうなずく。

その根性は認めよう。

「お会いできて感激ですう♪あたしーずっと会ってみたかったんですよ」

途中から声のトーンが下がったぞ、おい……

「さっすが夏目くん!! 天才には天才を引き寄せる力があるんだねえ!!」
「すごいわあ!!」

意気揚々と天馬と京子が言う。

「えっへへ、今日から仲良くしてくださいね。せーんばい♪」

あーあ……面倒なことになった。

第8話く刃・・・く

——登校。

「だーりーん♪おっはよーございまーす♪」

「お？ああおはよう鈴鹿」

よくも毎日こうやって俺を見つけられるな。

俺はそれを感じするよ。

「朝から会えるなんてー、鈴鹿ラッキー♪」

そう、この一言で周りにいる陰陽塾生が俺と鈴鹿が付き合っているんじゃないかと
ヒソヒソ話始める。

夏目は顔が引きつつてる。

「ほら、持って」

鈴鹿は夏目に鞆を渡す。

それ、絶対になんか仕掛けただろう。

「ひゃあああ!?!」

ほらな。

「気を付けてくださいねー、今日の鞆、30kgあるんですー、てへ☆でも大丈夫ですよ
ねー♪夏目せんぱーい。男の子だもーん……」

「これ本当に30kgもあるの?すごく軽いけど」

「はあ?アンタ何言って……」

そこまで言って鈴鹿は気づく。

俺がクスクス笑ってんのを。

「夏目、おまえは『神使』だからな。基礎能力は格段に上がってる。だからそのくらいは余裕で持てるぞ」

「ああ、なるほど」

「ぐっ……」

鈴鹿が悔しそうに顔をゆがめる。

『神使』については訊かないんだな。

「おもしろいことになってるな」

冬児が俺に言ってくる。

「おまえは……まったく」

「一気にバラす方向かと思っただらこっちだったか……いやあ実にイイ性格だなあ」

「でも『神使』でよかったよ……そうじゃなかったら今頃腕が上がってなかったよ……」

確かにな……

このままではどのみちまずいか。

「夏目、俺さ、鈴鹿にちつとO☆H A ☆N A ☆S H Iしてみる」

「ええ？」

「いい加減こんなことやめろってな……ククク」

「や、刃？大丈夫？」

「ククク、何言ってるんだか。大丈夫だ、問題ない」
「本当に大丈夫？」

ハハハ、何言ってるんだ。
俺はダイジョウブだよー。

——
広場。

「ああん？アンタらアタシにはむかえるところってわけ？」

俺はデコピンをされた。

……むーん。

——ベンチ。

「ほら、買ってきたぞ」

俺はチョコバナナを買いに行かせられた。

……はは。

——カラオケボックス。

「はあ？今sir抜けてなかった？返事の前と後ろのsirがさー」キーン

マイク使って大声でしゃべるな。

音が割れる。

鈴鹿の肩をもみながら考える。

「S i r y e s s i r !!」

夏目が鈴鹿の宿題を中断して、敬礼しながら答える。

——ファーストフード店。

「だーりーん。バナラシェイク。ダツシユ」

「あこよ……」

この野郎……いや女だからアマか。
このアマ……覚えてろよ。

——日曜日、食堂。

夏目は机に突っ伏している。

「夏目!?おまえ髪の毛のツヤが!?それに枝毛!?おいおい……ちゃんと手入れしろよ!!もったいないぞ、綺麗な髪なんだから」

「は、はい……」

俺が手入れしてやってもいいんだが……

この前のデートから一回も一緒に入ってないしな……

「ま、少なくとも今日一日はあいつに絡まれないで済む」
「本当……こんな休日を貴重だと思うのは初めてです」

ピリリピリリ

俺か……

俺は画面を見る。

そこには……鈴鹿の二文字。

「はうあ!?!」

どうやら夏目の視界に入ったようで、夏目が震えている。

俺はそのまま無視して勝手に切れるまでまつ。

だが次は夏目のケータイにメールが入った。

本文には一言。

出ろよ

そしてまた俺のスマホが鳴り始める。

むかついた俺はスマホの電源を切る。

その時だった。

ギイイイ

扉の軋む音と一緒に現れたのは――

「ぐっもーにーん」

鈴鹿だった。

鈴鹿はスマホを俺たちにちらつかせる。

そしてニヤリと笑う。

——俺の部屋。

何故だか知らないが、鈴鹿は俺の部屋……俺と夏目の部屋に来ている。

「ねえ……なんでここだけ二部屋つながってるの？」

「ん？ああ、俺と夏目は同じ部屋で暮らしてるからな。勝手にこっちでつながれた」

「はあ!?! つなげたって……どうやって?」

「まあ企業秘密だな」

「……まあいいわ」

いいのかー……

とりあえず、部屋についた瞬間に見られたらマズイところはこの世界の技術ではないもので封印したからな。

心配はないだろう。

「電話に出なかった罰として、刃の部屋を見せろつて……」

「そういうことか……」

夏目？

てか冬児!!

いつの間に……

「で、(´・`)/感想は？」

冬児が鈴鹿に訊く。

「退屈な部屋ねえ……まあ二部屋つながってて夏目と一緒に住んでいるのはちよつと驚いたけど。ああ、なんかなの？ エッチ系の本とかーDVDとか」

「いや、ないし。つか、帰れし」

いい加減帰つてくれよ。

正直言つてまだ眠い。

「見てもつまんねーよー。こいつの趣味、どノーマルだし」

「なに言つてんだか……」

つか、エログッズ買う金があったらゲーセン行くわ。

「ま、このくらいにしておいてやるか。じゃあ、次は夏目っちの方行つてみようか♪」
「ええええええ!!嫌です、ダメですう!!お断りします!!」

腕を交差させてバツテンをつくる夏目。

そこまで嫌か。

「あれー？そんなこと言っちゃっていいわけ？」

夏目が俺の方を見てくる。

なにになに？

たすけて

俺は首を横に振った。

その時だった。

「？急如律令!!」

そう叫んで夏目が簡易式を飛ばす。

何事だ!?

だがそれをすぐに鈴鹿が撃墜する。

それを確認すると、今度は夏目自身が動く。

が、それは鈴鹿が足をつかんで止められる。

「は、放してえ!!行かせてええええええ!!」

「ダメだつて言ってるし、てか、何そのマジ反応。アンタの方向があるつてのよ。逆に怖いんだけど!!」

「いやああああああああ!!」

結局夏目は呪術を縄で縛られて声も出せなくされた。

「あの反応からどんだけヤバいもんがあるのかと思つたが……どうつてことないな」「いやいやいや、あるじゃない。おもしろそうなのが」

クローゼットか……

ふんふん、結構な術式だ。

「結界自体を穩行してたわけね。相当こつたつくりじゃーん」

「また、なんか呪術がかかつてんのか?」

そう言いながらクローゼットに触れる冬兎。

すると、冬児は吹き飛ばされた。
え、えげつねえ。

「バーカ。この結界はかなりのものよ。引っ込んでなさい」

そこまでするか、夏目。

「解除は手間取りそうだけど、おもしろい。やってやろうじゃないの」

そう言っって何かを始める。

「~~~~~」

それをみて冬児が一言。

「刃、俺、自分の部屋に帰っていいか？」

「いいぞ」

俺もついて行った。

途中で夏目が涙目で騒いでいた。

「うるさいわねえ!!」

鈴鹿も怒っている。

だがこの夏目の切羽のつまりようは尋常じゃねえ……
仕方がない。

俺は『写輪眼』を開眼させる。

「鈴鹿」

「何………よ………」

俺は鈴鹿を幻術にかけて眠らせる。

それから、夏目の元に行き拘束を解く。

「ほら、これでいいだろ」

「あ、ありがとう!!」

そう言つて抱き着いてくる夏目。
なんだ、いいことあつたな。

——翌日、俺の部屋。

む……

なんだこれ……

確か俺のベットには俺しか寝てないはずだが……

ならなんだこの重量感は何？

俺は布団をめくる。

そこにいたのは夏目だった。

入ってくるなら最初から入ってくればいいのに……

「ほら、夏目。朝だぞ……起きろ」

「ん……」

声をかけるとゆっくりと起き上がる。

そして周りをキョロキョロと見渡す。

そして一言。

「え……えええ!!?なんで刃が僕のベットに!?!」

「おまえが俺のベットに入ってきたんだろ……」

「え!?!、ごめん……」

「んにゃ、入るなら最初から入ってきてもらった方がいい」
「わ、わかった!!」

うれしそうに返事をする。

——
登校。

「いやあ、いい朝だったわ」

「おまえさつきからそればっかだな……」

冬児が飽きれながら言う。

だつてねえ？

かわいい子が朝起きたら俺のベットにいるんだぜ？
うれしくないわけがない。

「ホント、つまんないわ」

「おおう!?!いつの間に」

ちやつかり鈴鹿もいるし……

これからどうなるんだか……

第9話く恋心、それは・・・く

——バス。

「いやあ……面倒だな、合宿」

「ええ？楽しみでしょ合宿」

「俺の言ったことを速否定する夏目。
しかもお菓子の袋開けながら……」

「はあ……」

「元気だしなよ刃!!」

「ちよつとく、うるさいでえ」

大友先生が突っ込んできた。

「この実技合宿はなあ、一応抗議あつかいやからなあ」
「すいませーん」

夏目がニコニコしながら答える。

俺は面倒そうに返す。

「キミらなあ、驚かすつもりはないけど……しんどいでえ」
「しんどいか……」

まあ、なのはO☆HA☆NA☆SHI程ではないだろう。

「いつもの僕たちに比べればそんなことないですよ!!」

夏目が意気揚々と答える。

「まあ、辛気臭くてもしょうがあらへん。今のうちに羽のぼしときい。今のうちにな」

あやしいな……

まさかあいつを連れてきたりなんか……

まさかな。

——山、階段。

俺たちは荷物を持って山を登っている。

と言つても、しっかりと舗装されているので全くと言っていいほどきつくはない。

だが、京子は結構疲れたようだ。

そりやそうだ、キャリアケースなんて持ってくるんだから。階段との相性は最悪だ。

「ねえ、冬児くんはいつ合流するの？」

京子が俺に訊いてくる。

「うちの親父の診察が終わり次第だよ。なんか今の冬児に一番有効な封印にしあげるんだと。詳しくは知らねえ」

「でも、そんな大幅な調整した後でいきなり合宿なんて……」

「むしろ好都合だと。さっさと試せるから」

「それにしても、きついなあ」

京子がキャリアケースを階段にひっかけながら言う。

よし。

「ほら、持ってやるからよこせ」

「ええ!?いい、いいわよ別に……」

「いいから、女の子にそんな大きな荷物はきついだろ?」

「……わかったわよ」

渋々納得して俺にキャリアケースを渡す。

俺はそれを軽々と待ちあげる。

「あんたって……相変らずデタラメね」

「大きなお世話だ」

「まあデタラメなのは否定しないけど。」

「んじや、行きますか」

「もう少しで上りきれる。」

「ああダルい。」

——頂上。

門をくぐる。

そこにいたのは——

「もう、先輩たち遅いしー」

鈴鹿ががががが。

なんでここに？

「今回の合宿には、大連寺鈴鹿くんも参加することになったんや。みんな、仲良くしたつてや」

大友……テメエ余計なことを。

「仲良くしてくださいねー、せーんぱーい」

せーんぱーいのトーンが下がったぞ。

ちよつと引くぞ。

——簡易式神特訓、其の一、カレー作り。

現在進行で俺は簡易式を操って一人でカレーを作っている。

なんで一人でだつて？

だつてみんなが失敗したら大変じゃないか。

せつかくの合宿でおいしいカレーが食えないなんて……

なんかかわいそうじゃね？

ちなみに普通は一人一体だが、俺は三体操っている。

火加減、調理そして混ぜる。

火加減は状況によって強さを変える。

調理は材料を洗って切る。

混ぜるは鍋に材料を入れてその後混ぜて完成させる。

うし、始めるか。

手始めに野菜を切らせる。

それと同時に空いている式神で火の準備を始める。

薪を割り、火は……摩擦熱だな。

「す、すごいね刃くん……一人で三体も操るなんて」

「それにすごい正確だね」

声のする方を向くと女子が二人いた。

クラスのをやつだな。

「まあな、簡易式は便利だからな。案外日常生活で使ううちになれてな。こうなった」

「へ、へえ……」

二人とも顔が引きつった。

変なこと言ったか？

言ってなくね？

「あっちちちち!!」

夏目が何か騒いでいる。

ああ式神とリンクしてたからか。

俺はそんなことはない。

確かにリンクされているが、感覚の共有は絶対にしない。

したら致命傷を受けた時とかが大変だからな。

よし、そろそろこつちも完成だろう。

煮込み終わったしな。

俺の作ったカレーはまだ隠しておこう。

とりあえず俺は天馬の作ったカレーをもらった。

「いただきます」

そして一口。

こ、これは……

「食べられなくはないよね？」

天馬が一口食べて言う。

確かに食べられなくはない。

が、好んで食べる味ではない。

緊急事態なら食べてもいいか。

その程度の味だった。

「夏目くんは倉橋さん、それに大連寺さんのはすごいね。料理は下手だったけど、式神の操作は完璧だったもん。特に夏目くんは、本当に式神に乗り移っているみたいだね。やけどしたときも、完全にリンクしてたでしょ？ほとんどまるごと意識を簡易式に集中させるなんて、あれってすごいことなんだよ」

「へえ……」

でも料理はダメだったんだな。

まずかったんだな。

「はい、ダーリン♪」

「なんだ？」

鈴鹿が何か持ってきた。

「決まってるじゃない。あたしの作ったカレー、ダーリンに食べてもらいたくて♪」

この瞬間だった。

天馬は自分の分のカレーを持ってサムズアップして去っていった。

おい。

「つかよ、これカレー？」

「ごたごた言っているとアツアツのカレー、その口に流し込んだじゃうぞ☆」

仕方ないので俺は鈴鹿の持ってきたカレー（？）を口に入れる。

「につが……まあマシか」

「なんだこれは……カレー？そんなわけない。とりあえず言わせてくれ、まずいと」

これは人間の食べるものではない。

横から手が伸びてきた。

冬児？

「これカレーなのか？」

「はあ？遅刻ぼつこいてるへアバンドが何偉そうなこと言ってるわけ？」

「おまえこんなところまで刃追っかけまわしてんのか？」

「バカ言ってるんじゃないわよ!!アンタのどこの担任に頭下げられてわざわざききてやってんの!!」

大友……テメエ、マジで一回シメる。

「刃、おまえ別に作ってあるんだろ？」

冬児がニヤつとしながら言ってくる。

ハハハ、バレてたか。

「仕方ない、出してやろう。俺が結構本気で作ったカレーをな!!」

そう言いながら俺は鍋の方へ向かう。

そしてご飯とカレーをよそる。

これを三つ作る。

俺と冬児と鈴鹿の分だ。

そしてテーブルに戻る。

「さあ括目せよ!!これが本当のカレーというものだ!!」

そう言つて二人の前に皿を置く。

二人は一口食べる。

そして……

「お、おいしい!!何このカレー!?!おいしいすぎるんだけど!!」

「ああ、さすが刃だ」

「ハッハッハ、おかわりもあるからな!!」

この声に反応したのか、夏目が寄ってきた。

「なんだ？夏目も食べるか？」

「う、うん。いいかな？」

「もちろんだ!!」

俺はカレーをよそって夏目に渡す。

そして夏目も一口。

「お、おいしい……おいしいよ!!」

夏目のこの一言がきつかけになった。

「なんだなんだ？」

「そんなにおいしいの？」

「私にも頂戴!!」

などとじゃんじゃん俺のカレーを食べに来た。
そして必ず言ってくれるのがこれだ。

「おいしい!!」

うれしいねえ……

作った人間としてこれほどうれしい言葉は知らないね。
その後は、使ったものを簡易式で洗った。

これでカレー作りはお終いだ。

——林。

「双角会？」

鈴鹿からこの名がでた。

俺は知らない。

無論、他の人もそうだった。

「二年前のあたしの父親を始め、過激な夜光信者で組織されている秘密結社のことよ」

この一言でみんなが顔を見合わせる。

ちなみにこの場には、俺、夏目、冬児、鈴鹿、天馬、京子がいる。

「夏目に接触してきてるのも、その連中なんだそうだ」

「しかも双角会の構成員は陰陽庁の中に潜り込んでいるらしいって噂は昔からあるらし

いの。あたしの父親とその部下の六人部ってのがそうだったし。それと、Dこと蘆屋道満」

「ああ、あのクソジジイな……」

「呪搜部はDも双角会と繋がりにあると思ってる」

なかなかこの世界も面倒なことになっているな。

まだまだ深くは知らないがな。

「あの、大連寺さん」

「何よ」

夏目が話しかける。

「正直なことを教えてください。僕は本当に夜光の生まれ変わりなんですか？」

「夏目……」

それは違う。

違うが、そうは言えなかった。

俺が言ったらしようがないと思っただからだ。

「あたしは今でもそうだと思ってる。けど断言はできない。今ではあたしが夜光研究の第一人者みたいに言われちゃってるけど、そもそも興味を持った発端――

―

俺はそつから先が頭に入っってこなかった。

そう、考えていたからだ。

夜光について。

俺は夏目は夜光の生まれ変わりではないと断言できる。

なぜか？

そんなもの『答えを出す程度の能力』でいくらでもわかる。

いつ創ったかって？

そんなの今だ。

能力創造なんてもう一瞬でできる。

この能力に調べてみた。

夜光の転生者は誰だ？
と。

答えはこうだった。

俺。

神淨刃。

あれえ？

マジか……

そりゃ見つからないよな。

同時に納得することもあった。

ガキの時の封印についてだ。

なぜか知らんけど身に覚えのない封印。

それも結構強力なものが俺の体に仕掛けられていた。

まあ、そんなもん神様パワーで簡単に解けるんだけど。

ふんふん……どうしよ。

まあ秘密にしておくしかないよな。

「彼はレポートの中で、あの烏羽を使えば夜光の転生かどうかは判明するって唱えてい

たの」

鈴鹿のこの一言でさらにみんながいきを飲む。

鳥羽、夜光の愛用したコート。

それあつたら俺もバレちゃうね。

マズイね。

「今は陰陽庁に保管されてるはずだし、なんなら、倉橋のつてを頼って試してみれば？」

この間、夏目はずっとうつつむきっぱなしだ。

どう声をかけていいのか俺にもわからない。

「そこで俺は考えたんだが……今後、緊急時には大連寺に力を貸してもらおうと思う。ま、その見返りと言っちゃなんだが……夏目、おまえ少しは大連寺の実験に付き合おうとできないか？」

この一言でまたうつつむく。

「おい……ふざけんな冬児。そんなことは俺がさせねえ。絶対にだ」

「刃、俺は夏目に訊いてんだ」

「この野郎……」

「僕は——」

夏目が言いかけたその時だった。

「いやよ」

鈴鹿が声を言った。

「こつちからお断り」

「おまえ、さつきは——」

「冗談……アンタらとなれ合うつてのは毛頭ないつての」

それだけ言って去っていった。
まあもともと鈴鹿はいなくても大丈夫だ。
正直に言おうと、俺一人でもだ。

——夜。

「眠れないのか？」

「うん……ちよつと考え事」

夏目がこつちに寝返りをうつ。

それと同時に俺と目が合う。

そして顔が赤くなる。

「なあ、生まれ変わりの件なんだけどさ」

「うん……」

「俺が断言するよ。おまえは夜光の生まれ変わりじゃないと」

「え？」

目をパチクリさせて言う。

「俺のことは前に話しただろ？」

「うん……転生者だって……」

「そうだ。だからな、いろいろな能力も使えるんだ。例えば『答えを出す程度の能力』とかな」

「あ……」

ここまで言えば夏目も気づくだろう。

でもそれと同時に、なら本当の夜光の生まれ変わりもわかるんじゃないか？
と思われてしまう。

まあそこは適当にごまかそう。

「わかつてくれたか？」

「うん……でも——」

「そこから先はまだ知るべきではない」

俺は夏目の唇に人差し指を添えながら言う。

「ぼ、僕お風呂入ってくるね」

「そうか……なら俺も入ろっかな」

「い、いいよ。一人で大丈夫だから／＼／＼」

恥ずかしそうに言う。

かわいいやつめ。
俺は意識を闇に落とした。

——翌日、林。

「話ってなんだ？」

京子に呼び出された。
何だってんだ？

「あんた、わかってないみたいだけど……鈴鹿ちゃんに協力を仰ぐ場合、鍵は刃。あんたよ」

「わかってるよ……でもな、そこまでして必要な協力じゃねえ」

「はあ？いくらあんたが強いからって十二神将よりは「俺は去年の夏、あいつに勝ってる」……はあ？」

何かいもはあはあ大変だな。

「まあそれは置いておいて……」

「置いておくのか」

「あんたさあ、鈴鹿ちゃんのことどう思ってるの？」

うくん……精々妹だな。

確にかわいいんだけどさ……ああ、かわいいは正義だったな。

「あのねえ……刃気づいてる？」

「ん？」

「あの子……あんたのこと——」

その時だった。

「までこの乳女あああああ!!」

鈴鹿のご登場だ。

「何勝手に口走ってんだよてめえ。このくそ野郎は好きなやつがいるんだって!!」

俺を指さして言ってくる。

よし、ここは正直に話そう。

「うん、いるねえ。ざっと二十人ぐらい」

「え？」

鈴鹿はおろか、京子までも驚いているようだ。

「え？去年のあの式神だけじゃないの!？」

「ん、まあね。この世界にはいないけど、いつでも……いや、一ヶ月に一回、一人だけ会えるか。全員いつぺんに会えるのは年に一度だけだけど」

「「え……?？」」

今度は驚きの中に戸惑いが混じっていた。

「この世界にはいない。俺の一番初めに結婚した相手は。でも生きている。それだけでいい。俺はそうやって——まあここから先は話せない」

「なによそれ……あんた一体——」

そこから先は言うのをやめたようだ。

いや、言えないが正しいか。

だって泣いているんだもん。

「一体、ね……あえて言うなら、ただ万能なだけの人外だ」
「人外って……もしかしてあんたも生成りなの？」

神が憑いているって言えばいいの？

確かにこの肉体はこの世界にもともとあったもので、そこに俺が転生したから……わ
からん。

「それはありえない。それだけは断言しよう」

「そう……」

京子はどこか納得していないようだ。

「わかった……」

鈴鹿が口を開けた。

「ヘアバンドが言ってた協力ってやつ」

俺と京子は顔を見合わせる。

マジか……

まあありがたいな。

—— 帰り、バス。

帰りのバスはみんな寝ていた。

俺はヘッドホンで音楽を聴く。

夏目が俺の肩に頭を乗せてきた。

そう言えばこういう普通のこと、が今までの世界ではできなかつたな。どの世界でも戦い闘いの日々だったからな。

たまにある休日も様々な理由でなくなつていったし。

ふと、夏目のリボンが解けていることに気が付く

俺は夏目を起こさないようにポニーテールにした。

いやあ、起こさないようには難しかつたぜ。

こんなひと時も悪くはないな。

第10話～法師、それは・・・

——鍛練場。

「このスワローウィップはキミらの靈氣を感知すると捕縛するようになってきた。うまく
穩行できんと、からめ捕られるでえ」

大友……

ぼけー穩行をしていたせいか、スワローウィップに捕まった。

「はあくい、刃くん残念。まだ三分m「ふん!!」…嘘やろ……」

俺はうつとおしいので力技で拘束を引き千切った。

そしてすぐに穩行をする。

そのまま『絶』を行い、気配も消す。

「ありえへん……あの拘束を力技で抜け出すなんて……一体どんな体のつくりしとんねん……」

ありえるんだよ。

——広場。

「あーいたいた、見てたわよ、ダーリン」
「ん？ああいたなそういえば」

やっぱりいたのか。

なんか視線を感じたんだよな。

「やっぱりばれてたかー。でもあんた以外誰も気づかなかったわねえ」

へへへ、なんか恥ずかしいな／＼／

「穩行の術か……さすが十二神将」

「こんなの基礎中の基礎よ。そんなこともできないなんて、本当に大丈夫なんですかー
せんばーい」

「大丈夫だ、問題ない」

本当に問題ない。

だって『絶』で完全に気配消せるし。

まあ『円』を使われるとバレるけど。

この世界は使える人間はいないだろうけど。

「おまたせ!!」

京子がやつと来た。

「随分かかったな」

「女の子は身だしなみに時間がかかるの!!デリカシーゼロ男には分からないでしょうけど。ああ!!鈴鹿ちゃんじゃなーい!!」

そう言つて鈴鹿に抱き着く。

嫌がつてる嫌がつてる。

「にゆく放せ〜!!」

……かわいい。

「あれ?天馬は?」

「先に帰ったぜ」

「ええ？　そう言えば元気なかったわよね」

——下校。

「天馬、家の人に何か言われたのかしら？」

「家の人？」

なぜに家の人？

「百枝の家も、陰陽道の旧家で天馬もその跡継ぎだからいろいろとね」

いろいろとか……

しっかしこの世界も家柄があって面倒だな。

——俺の部屋。

!?

なんだこの気配は……かなり……つーかこの気配は蘆屋道満だ。
なぜ？

陰陽塾にいるわけではないな……

でも近くだな。

確認しとくか。

「夏目、今いいか？」

「何かな？」

「前に渡した指輪とネックレス……ちゃんとつけてるか？」

「う、うん。毎日肌身離さず」

「そうか……」

なら大丈夫……と言えるか？

ATフィールドは絶対と言っていい程の防御力はある。

それに歩く教会もある。

……それでもこの心配がぬぐいきれないのはなぜだ？

考えても仕方ないか。

「それならいいんだ」

「どうかしたの？」

夏目は少し心配そうに俺に訊く。

「ここは本当のことを話すべきなのか？」

否、話したらまた無茶をする。

話さないほうがいいな。

「いや、ちゃんと持つててくれているかが心配だな」

「持つてるよ!! だって刃がくれたんだもん」

「そうか……うれしいよ」

「あ……／＼／＼」

俺は夏目の頭を撫でる。

夏目は恥ずかしそうに顔をうつむかせた。

蘆屋道満……どうしようか？

確かに殺すだけなら簡単だ。

まわりの被害を一切考えなければな。

考えないと、街一つは何もなくなるし……

力がありすぎるのも考え物だな。

むーん……

どんどん考えがまとまらなくなっていくな。

「刃……」

「どうした？」

「い、一緒に寝よ？」

おっふ……

小首を傾げながら、なおかつ上目遣いは卑怯だ!!

そこまでされて断れるわけがない!!

「よし、行こう。今すぐに」

「え!?!う、うん……」

俺は夏目と一緒にベットに入る。

「あのさ、刃」

「なんだ？」

「一人で抱え込まないでさ、僕のこと頼ってよ」

「!?」

「全部一人で抱え込まないでよ。僕だって力になれる。だからさ、もう少し頼ってよ」

初めてかもしれない。

こんなこと言われたの。

いつも勝手に俺が終わらせてただけかもしれないけど……

ずいぶんと人に頼ることを忘れていたかもしれない。

頼ったとしても圧倒的な力があるレティシアや紅、オフィスにペストぐらいだ。

その四人が一番付き合いが長い。

もう少し、人を頼ってみるか。

俺はそこまで考えて寝ることにした。

——翌日、登校。

「こうやって二人で登校するのは初めてかもな」

「そ、そうだね……」

いやあ、たまにはこうやって二人きりで登校もいいな。

……視線を感じる。

「誰だ？ って……幼女先輩」

「幼女先輩？」

夏目は首をかしげた。

「幼女を愛する者は、永遠の時に生きるの」

「はい？」

夏目は何を言っているかわからないようだ。
俺はもちろんわかる。

「この人は幼女好きの幼女先輩だ」

「光荣ね」

少しだけ頬が赤く染まった。

照れたのか？ 照れちまったのか？

「あなたは土御門夏目ね」

「は、はじめまして」

「私は涼。幼女先輩と呼んで」

それで本当にいいのか!?

——教室。

「大友先生は急用で来られない。いいから席に着きなさい」

何があつた？

あの先生が呼び出されるって……余程のことがないと……

—— 昼休み。

「え、おまえのどこも先生こなかつたの？」

「うん、急用ができたからって……」

どこからかそんな声が聞こえた。

「なんか妙じゃない？」

鈴鹿が切り出してくる。

「ああ……」

冬児も同意見のようだ。

「ちよつと小耳にはさんだんだけど……実技系教師の授業が、軒並み変更になってるわ。これって……もしかして……」

もしかするんじゃないか？

そんなことを考えているときだった。

「おい!!なんだよそれ!!」

急に騒がしくなったのだ。

『繰り返し、ただ今入ったニュースをお伝えいたします。本日正午、東京都台東区秋葉原にある陰陽庁庁舎が、何者かによつて襲撃を受けました。これは現在の陰陽庁の映像です』

そこに映し出されたのは、土蜘蛛で攻撃を受けているものだった。

「嘘……装甲鬼兵が……あんなに!?!」

鈴鹿でも驚きのようだ。

!?

きやがった……

「やつだ……やつがきたぞ」

「誰だ? やつって」

冬児が俺に訊いてくる。
俺は答える。

「蘆屋?…道満!!」

「「「?!?!」」」

全員がその一言に驚く。

始まるのか……

させねえ……おまえの好きにはさせねえぞ!!

蘆屋道満!!

第11話く術比べ？相手になるのか？く

——食堂。

「土蜘蛛があんなに……」

夏目が呟く。

確かにこの量はまずいかね。

仕方ない。

「朱蓮、白。行けるな」

『もちろんだぜ!!』

『もちろんです』

うし。

俺は朱蓮と白を出す。

「おい刃それって……」

「そうだ。京子との闘いで使った式神の本当の姿だ。赤いほうが『赤龍帝の龍刀』白いほうが『白龍皇の龍刀』だ」

説明し終えたときだった。

『塾生の皆さんにお伝えします。ただちに呪練場に避難してください。繰り返し、塾生の皆さんにお伝えします。ただちに呪練場に避難してください』

そうとうあせってるな……

「ぼ、僕たちも早く避難しないと!!」

『こんなところにおったか』

この声は、蘆屋道満!!

どこだ？どこから……

『こうして会いまみえるのは鶴の夜以来よな』

「ジジイ……言つたよな？俺の大切に手だししたら……ぶつ殺すって」

『何、ちよつとした野暮用よ。此度の件はわしにとつてもイレギュラーといおうやつでなあ……いやあ……せつかくじや。お主らとは少し遊んでいくとしようか』

殺取りで遊ぶ？

「塾舎は結界で守られてるわ!!入れるわけないわよ!!」

京子は叫ぶ。

確かにそうだ。

『これはしたり。わしが何の土産も持たず主らの宿を訪問したと?』

確かにありえない。

『この道満、ことう見えて皆を驚かすのが生きがいだな。近頃はこいゆうのだったな……? 急如律令!!』

その瞬間、土蜘蛛の眼が一瞬赤く光る。

そして――

「ぬあああああああ!!?」

天馬のポケットにある式神が輝く。

そして、その黒い式神は瘴気をぶちまける。

結界が壊れた……

「天馬!!」

京子が叫ぶ。

天馬に土蜘蛛がせまる。

それを京子が人造式で防ぐ。

そのまま京子は結界を張った。

「起きろ天馬!!」

冬児が天馬を立たせる。

「ごめん……ごめんなさい……僕のせいで……」

「はあ? アンタ何様のつもりなわけえ? 内部に仕掛けを仕込ませて、結界を破るなんて……超古典的なやりくちだし」

「でも……」

「その駒にアンタが選ばれたのなんて、単なる偶然だつっの。はつきり言つて自意識過剰。相手はDよ。アンタごときでどうにかできるわけないでしょ。このメガネ!!」

毒舌だああああああああああああ!!

つかそろそろヤバいな。

いっちょやったりますか。

「行くぞ……朱蓮!!白!!」

『応よ!!』『はい!!』

赤と白。

二色の龍刀が俺の手に収まる。

そして近くにいる土蜘蛛を薙ぎ払う。

「俺も負けてられねえな……ファーストシール・パージ!!」

冬児の髪は白く染まり、肩にだけ青い鎧を付けていた。

おお!!

か、かつけー!!

冬児にメチャクチャ似合ってる。

うし、さっさと吹っ飛ばして行くぞ!!

『Boost』『Divide』

十秒がたち、俺の力が倍化されると同時に土蜘蛛のエネルギーを半減する。
触ってない？

触らなくても余裕だ。

冬児も土蜘蛛を殴り、沈める。

「行くぞ!!」

ラグってる土蜘蛛を横目に食堂を出る。

——廊下。

ここにもか。

ここにも土蜘蛛がいる。

正面から突撃をしてくる。

冬児が向かい撃とうとするが、俺は構わず特攻する。

ちなみにもう龍刀は仕舞っている。

途中からババアの猫が先導する。

それは置いておいて……

手の平にチャクラを集中させる。

そして乱回転させる。

それをバスケットボールくらいの大きさにする。

そして——

「大玉螺旋丸!!」

当たった土蜘蛛はもちろん吹っ飛んでいく。
進もうとした時だった。

後ろからも壁を突き破って土蜘蛛が来る。

「白桜、黒楓!!」

それは京子が人造式で対処する。
でもおかしい。

ラグが激しすぎる。

徐々に押されていくが——

「押し返す!!」

鈴鹿がフオローをして乗り越える。

「なかなかなだな」

「ふん、呪力を制限されてたって、これくらい余裕だし。十二神将なめるなっつーのー」

「さすがだなー!!ホレちまいそうだぜ!!」

「ほほほーほ?」

その瞬間夏目が睨んできた。

なんだよ、ジョークだつつの。

「ば、ばばば、ばかじゃにやいの!?!い、いきなし何言つてのよこのばかあ／＼／＼」

照れちゃって、かわいいー。

「こちらです!!」

猫に言われて続いていく。

そして行き止まりになった。

なるほど。

「開門!!」

その一言で門が現れて開かれる。

その奥はものすごい量の階段があつた。

「さあ、ここから屋上へ!!」

その瞬間、また土蜘蛛がやってきた。

しかも上から。

「いでよ北斗!!主命である!!我らの前に道を開け!!」

北斗が出現した瞬間、土蜘蛛を上には押し上げていく。

俺たちはそのあとを追って行った。

——屋上。

「やはり、土蜘蛛は機甲式じゃない。偽物だ!!」

夏目が言った。

偽物……

だから弱かったのね。
なるほど。

「あれは?」

鈴鹿が叫ぶ。

ババアがいた。

「皆さん!!こちらへ!!」

ババアが叫ぶ。

それにしたがって全員がババアの元に行く。

「聖域を閉ざし、邪気を遠ざけん。天壇、封印!!」

四方位にある鳥居が青く光り、結界を形成する。

……この結界もろいな。

「リブート……ああ」

冬児が鬼化をやめる。

そのまま倒れそうになるのを支える。

「あーあ……無茶したな？」

「ハッ、こんな実戦経験無駄にできるか」

お元気なことで。

「倉橋塾長。これはどういうことですか？」

夏目がババアに訊く。

俺も気になってたところだ。

「この天壇は土御門家に伝わる、泰山府君祭の祭壇です。どうして陰陽塾の屋上に？」

確かに気になるな……

「お話は後で……私たちは助かったわけではありませんよ」

そりゃそうだ。

この程度の結界でどうにかなるほど甘くない。

「ほっほっほっほっほ……またせたのう」

北斗開けた穴から蘆屋道満がゆつくり現れる。

貫禄たつぷりのご登場で……

腕を振るうだけで土蜘蛛もどきが三体出現する。

「こんなおもちゃでもなかなか役に立つ」

あーこのじいさん気味悪くて好きじゃねえな。

「おや、土御門の天壇か。じゃが封印が緩いのう」

カン!!

蘆屋道満……ジジイが杖を一回打ち付けるだけで、結界が壊れる。

「法師、お目当てのものは見つかりましたか？」

ババアが訊く。

「いや、まだじゃ」

「ですから申し上げたでしょう。ここにはございませんと」

ニヤリとジジイが口元を吊り上げる。

「北斗!!」

夏目が北斗にジジイを攻撃させる。

だが――

「縛れ!!」

この一声。

この一声だけで土蜘蛛は口から糸を吐き、北斗を捕える。そしてそのまま地面に押し付けられる。

役目を果たしたせいかな、土蜘蛛は消えていった。

「お粗末きわまりない。これほどの龍がまるで放し飼いではないか」

「夏目さん!!龍の実体化を解いて!!」

ババアが夏目に指示を出す。

「ほ、北斗。戻れ!!」

だが戻らない。

「北斗の実体化が解けない!?!」

「強制的にこちらにつなぎとめられているんです!!このままでは……」

まずいねえ……

「土御門の龍ともなると、さすがにわしも心が動く。良いかな?この龍このままわしの式神にしてもうても」

このジジイ……

「そんな……」

「夏目……」

夏目が心配そうに声を出す。

その時だった。

「ええ歳した爺様が、子供のもの欲しがってどないします?」

この声は大友……

声のする方を向く。

そこには……ククク。

コスプレみたいな服を着た大友がいた。

「やれやれ、エレベーターのない屋上なんて勘弁してくれへんかなあ……かたつば義足ちゅうねん……」

そのままてくてくと歩く。

「こらまた見晴らしのええ。晴れ時なんか富士山なんかが見えそうやなあ」

「大友……」

「おお刃くーん。遅れてすまんかったなあ。塾長、時間外手当、つきますよねえ？」
「考えておきましょう」

ニコリと笑いながら言うババア。

まったく、のんきなもんだ。

「あんじょう、よろしゅう」

それだけ言って大友は蘆屋道満の方を向く。

「法師、再びお目にかかれて光栄です。僕のこと、覚えてらっしゃいますでしょうか?」
「ん、良く覚えておるぞ。おのときお主はひたすら逃げに徹した。それこそろくに手合せもせぬうちから己の片足を投げ出してまでもものう」

その一言で全員が息を飲む。

もちろん俺以外だけ。

「ただの恐怖からではあのような判断はできない。氷のごとく冷徹でしかも高度な状況判断がくだせておらねばあのような選択はなかったはずじゃ」

「痛み入ります」

……なげえ……

もう飽きてきた。

さつさと北斗を取り返して蘆屋道満殺して……どうしよつか?

「主はわしに己の手札を一切明かさず片足だけ差し出して消えた。これすなわち、お主にわしと再戦するあつたればこそ。次は勝つためにわが身を切らせた。ちがうかのう？」

「自分はまだ若輩者。折々に、最善と思われることを愚直になすのみです」

この一言にジジイは笑う。

「この世に目覚めて数百年。胸の躍ることも少のうなつた。じゃが三つ子の魂と言うやつか、術比べと言うやつだけは今だに良い。いや、もはやそこにしか残つとらんだろうな。わが魂は……まずは肩慣らしよ」

その瞬間、土蜘蛛が大友を襲う。

「散れ!!」

その一言で土蜘蛛はすべて吹き飛ばされる。

「甲種言霊!!なんて威力!!」

京子が叫ぶ。

そうか?どんなでもなくない?

それから二人は攻防を繰り返す。

そして大友はこちらに跳んできた。

「鈴鹿くん」

「え?」

大友は親指をかじり、血を出して鈴鹿の額になすりつける。

ああ封印の解除ね。

「まさか、こじ開けたの!?!倉橋源司の封印を!?!アンタ一体何者なのよ!!」

「元呪搜官の塾講師や。鈴鹿くん、結界でみんなを守りい。期待しとるでえ神童」

「そ、そんなの言われなくてもわかってるし!!」

そう言いながら結界を張る鈴鹿。

「あと、夏目くん」

「は、はい」

「キミの龍取り戻すでえ」

「ちよつとまで」

「なんや？今忙しいん……や……」

もういい加減にしてくれよ……

こっちは散々待った、しかもその上夏目の龍の奪取だつてみんなに被害が行くから我慢していた。

それを大友はすぐにやろうとした。

冗談じゃないぜ……

「なんや、その靈氣の量は……？それに髪が白なつてるで？」

今の俺は六割解放している。

だから髪も白っぽくなる。

靈気の量は人間の持てる量を軽く越えている。

「いい加減にしてくれよ……こちとら今まで我慢して手を出さなかったのによオ……もう手、出させてもらうぞ?」

「ちよ、まちい!!あいつはおまえが手え出していい相手じゃ——」

「答えは来てない。おいで、紅」

真紅の魔法陣が展開される。

それを見て大友は目を見開く。

何か知っているのか?

そこから紅が出てくる。

もちろん幼女の姿で。

「ひっさしぶりー!!お兄ちゃん!!」

「ああ、久しぶりだな紅!!」

「「「お兄ちゃん!?!」」」

「あ、ありえへん……」

俺は紅を抱き合う。

なぜかみんなが驚いているようだった。

大友は別のことに驚いているようだった。

「それで、どうかしたのお兄ちゃん？」

「ああ、あそこにいるクソジジイがな、俺の大切な人の龍……ほら、あそこに押さえつけられているだろう？あいつを奪おうとしたんだ。それに俺にも迷惑をかけてきてな……」

「ホント!?ならさっさと消しとばさなきゃ!!」

「「消しとばす!」「」」

またみんなが叫ぶ。

いい加減にうるさい。

「刃くん……その子龍か？」

「あゝ?そうだけど」

「それもかなりのやなあ」

「ああ……こいつは真なる赤龍神帝（アポカリユプス・ドラゴン）グレートレッド。通称、紅だ。俺の妹だ」

「真なる赤龍神帝やて!?!」

なんだ?この世界でも有なのか?

つか、俺は創った世界だから多少は違う部分があるのか?

もしかして『神使』の存在は伝説にでもなってるのか?

「大友先生、何かご存じなのですか?」

夏目が大友に訊く。

「もちろんや!!真なる赤龍神帝はやな、次元の狭間に棲んでおり、たまに実相世界に姿を現すことはあるらしいんや。そして基本的に実相世界の生物や事柄には関心を示さないらしいんや……」

「らしい?」

「そうや。明確なことは誰ひとりわからないんや。僕も書物で少し目を通した程度やからな……ただ、なんで刃くんがあんなに親しそうなかが不思議でしょうがない」

ジーつと全員が見てくる。

ジジイは顎に手をあてて何かを考えている。

まあいい、始めさせてもらうぞ。

「紅、北斗の拘束を解いてこい」

「わかったよ!!」

「!?!」
「!?!」
「!?!」

紅はクレーターができるほど強く踏み込んで一瞬で北斗の拘束を解く。

「龍化して北斗を次元の狭間で治療しとけ!!」

「オツケー!!」

ガアアアアアアアアアアア!!!

辺りに龍化した紅の叫び声が響く。

「なんだよあれ……北斗なんて目じゃねえぞ……」

冬児が口に出す。

当たり前だ。

龍としての格が天と地ぐらいの差があるぞ。

とりあえず、これで北斗は大丈夫だ。

いくぞ、刃くんのスーパー無双タイムだ☆

「またせたなジジイ。手加減に手加減を重ねて思いっきりイージーモードで相手してやるくらいしかできねえぞ?」

「ふおふおふお、言いよるな小僧!!」

ジジイが土蜘蛛を数十体出現させる。

その程度じゃあ相手にならない。

瞬時に印を結ぶ。

そして発動させる。

「千鳥……光剣!!」

千鳥を剣状にして、10m程に伸ばす。

そして横に一回転。

それだけで土蜘蛛は全て片付く。

「ほう……なかなかやるのう。これはどうじゃ!!」

今度は呪術を放ってくる。

ぜんぜん何なんなのか分からないけど。

もちろんこの程度なら簡単に防げる。

『万華鏡写輪眼』を瞬時に開眼させる。

そして使う術はもちろん——

「神威!!」

この術で時空間に飛ばす。

これで完了。

な、簡単だろ?

「ほお!!これも防ぐか……なら——」

「悪いがお前に付き合ってる時間はない。さっさと決めさせてもらう」

「小童が!!この無礼者め!!」

何かほざいているが気にしない。

「天照!!」

「なんじゃこの黒炎は!?!消えぬぞ!!小童お主わしになにをした!!」

ひどい焦りようだなあ、おい。

これでも手加減してんだよ。

天照なんて俺の視界からいなくなれば簡単に逃れられる。さて、仕上げだ。

印を結ぶ。

「火遁・豪龍火の術」

術を雲にぶつける。

これで準備は整った。

辺りの天気が変わる。

どんよりとした曇りから雷にだ。

いいぞ……これで威力は更に高まる。

「ぐう……厄介な術を……まあそれもここまでじゃ!!」

ジジイは呪術を発動させようと何かを唱える。

その時間が大きな隙になる!!

「これにて終幕……麒麟」

「うぐああああああ!!」

詠唱を中断し、叫ぶジジイ。

「ん……わしの負けじゃ」

それだけ眩いて、塵になった。

いや、燃え尽きた。

あ、紅を呼び出さないで。

「紅!!」

「おっす!!北斗はほら、このとおり元気いっぱいだよ!!」

ガアウ

短く返事をしたのか?北斗が鳴く。

「刃!!」

そう言つて抱き着いてきたのは夏目だった。

おいおい……みんな見てるぞ？

「もう!!心配したんだらからな!!」

「ごめんごめん。でもいい加減ストレス発散しないと死にそうで」

「それって僕のせい？」

「んにや、違う。別の理由だ、しいて言うならあそこにいるババアと大友のせいだな」

声を大きくして言う。

二人の顔が引きつった。

ハハハ、ざまあ。

「刃くん、ちよーつとお話しがあるんやけど……ええかな？」

「さっきのことか？」

「そうや……あれは呪術とちやうやろ？」

「ああ忍術だ。ちようどいい、ここにいるやつには教えておこうか」

俺は全員を集めた。

全員集まったことを確認してから、話をすすめる。

「さつき使ったのはみんなもわかっていると思うが、呪術ではない。忍術だ」

「忍術って忍者が使う、アレ?」

「そうだ。火遁、風遁、雷遁、土遁、水遁の五種類、これを通称、五大性質変化と言う。まあその中でも弱点になる性質とかもあるんだが今は省こう。さつき使ったのは火遁と雷遁だ。あー面倒だな……簡単に結論を出そう。呪術の五行みたいなものの忍術版だと思ってくれ」

「「「ああ、なるほど」」」」

本当に理解したのかよ……

つか、それだけで理解できるんだつたらはじめからそうやって説明すればよかったな。

この後もしばらく質問をされ続けた。

途中で俺がキレて終わりになったが。

ないはともあれ、この件についてはこれで解決だ。

いやあ、久々にストレス発散ができたぜ☆

第12話～邂逅ってな～

——回想。

ジジイ襲来事件はあっけなく幕を閉じた。

陰陽塾は膨大な損害を被ったが、ジジイが奪おうとした烏羽は夏目の親父、土御門泰純がすでに持ち去っていた。

塾舎の修復の間、俺たちは祓魔局目黒支局に通い、プロの祓魔官に囲まれて引き続き呪術を学ぶことになった。

回想、終了。

——呪練場。

俺は今、プロの祓魔官を相手にしてるんだが……

「なんなんだ貴様は!!」

まるで相手にならない。

俺は武器を一切使っていない。

俺は呪術も一切使っていない。

俺は身体強化すらしていない。

なのに相手にならない。

よくよく考えてみれば当たり前のことだった。

いくらプロの俺は祓魔官だとしても、それだけだ。

今まで十二神将や道満の相手をしてきたんだ。

その程度じゃ、まったく相手にならない。
さっさと決めるか。

「よつと……」

一気に懐に踏み込み、人造式を殴る。
それだけでラグが強くなり、やがて消えていく。

「これでいいか？」

「ぐつ……」

悔しそうな顔をする相手。

「すごいな、刃くんは」

「おっさん……」

いつぞやのおっさん教師だ。

「藤原さん!! なんなんですかこいつは!!」

「んん? 陰陽塾の塾生だけど?」

「信じられません!! 生身で人造式を一撃で倒すなんて……」

「こつちもだぜ……この程度かプロと言っても」

「なんだと!!」

おうおう元気がいいねえ。

「ちよつとは何かの役に立つかと思っただけだだめだこりや。準備運動……いや、遊びにもなんねえ」

「き、貴様!! 黙って聞いていれば——」

「まあまあそこまでにしときなさい。刃くんも」

「うつつ」

「くつ、わかりましたよ!!」

あー……なんか刺激的なことないかなあ……

——
帰り道。

俺は夏目を二人で帰っていた。

「すごいですね、刃くんは……プロの祓魔官を相手にあんなに簡単に会ってしまっ
て」

「そうか？今の夏目でも余裕だと思っぞ？」

「そ、そんなわけ——」

「ある。なんせ『神使』で俺の嫁だからな」

冗談交じりに言う。

「よ、嫁って／＼／＼」

だがそれを真面目に受け取ったのか、顔を真っ赤にしてしまった。

「そういえばさ、塾の上にあった祭壇。あれさ、田舎にあったのと同じだったよな？ 今からさ、塾舎に行ってみないか？」

「わかった」

——塾舎。

「や、刃様。ここはコンめが先導いたします」

「ああ、頼む」

コンが青い狐火になって出現する。

真っ暗だったからな、ちようどいい。

「うわあ……ひつでえなあ……」

「……そうだね。でもこの程度ですんでよかったですとも言えるよ」

——屋上。

例の穴から屋上にでる。

「あ……」

コンが声を上げる。

「どうした？」

「さ、祭壇に何者かおりまする」

確かに気配を感じる。

俺たちはゆっくり祭壇に近づいていく。

「誰だ？」

声をかけてきた。

「……この塾生だが。そっちは？」

「……………」

この野郎……

「明かりをつける。ただの明かりだ。コン、火を」

コンは狐火を祭壇に向けて一列につけていく。

そして相手の顔が見える。

ん？

俺たちは祭壇に近づいていく。

「土御門の……」

一瞬だけ微笑んでこっちに向かって歩いてきた。

「土御門夏目くん、君はつちm「違う、神浄だ」…神浄刃くんだね」

俺と夏目は顔を見合わせる。

「初めまして、僕は相馬多軌子。君たちと同じ、陰陽の道を歩むものだ」

なんだかな……

こいつは好きになれないな。

「相馬……多軌子さん？」

「多軌子でいいよ。でも、こんなところで直接会えるなんて!!うれしいよ、夏目、刃」

また俺と夏目は見合せる。

「多軌子はここの塾生なのか？」

「僕の場合はちよつと事情があつて……」

「事情？」

「うん。でも僕も塾生ではあるんだ。本当だよ」

……なーんか信用できねえ。

「多軌子さんは、ここで何をしていたんですか？」

核心を訊く夏目。

「君たちと同じことじゃないかな？天壇を見に来たんだよ」

「この祭壇か……多軌子はこれを見に来たのか？」

「そうだよ」

こつちを見ずに答える。

「君はこの祭壇がどういうものかわかっているのかな？」

「まさか。僕如きじや天壇は理解できないよ。だってこの祭壇は土御門家の呪術の粹。かの安倍清明が残した最大の呪的遺産じやない!!土御門夜光ですら全てを理解できていたかどうか……」

「君はこゝで行う儀式のことを知っているのか？」

夏目は冷たい声音で言う。

「泰山府君祭のこと？もちろん」

ますます信じられなくなった。

「泰山府君祭は土御門家の秘密の儀式なんじやなかったのか？」

俺は夏目に訊く。

「君は一体何者なんだ？」

俺をスルーして多軌子に訊く。

「言つたじゃない。君たちと同じ、陰陽の道を歩むものだよ。あんまりおしやべりしていると怒られてしまいそうだから少しだけ。どうして天壇がここにあると思う？ 陰陽塾は元々、夜光の私塾だったからだよ。その名を夜光塾。家や血筋に関係なく、素質あるものに門戸を開いた育成塾だったのさ。これはいわば、夜光の痕跡なんだよ。そのころの事情は倉橋塾長が詳しいんじゃないかな？ 何しろ当事者だもん」

「当事者？」

「今の陰陽塾を育て上げたのは彼女なんだよ。彼女は小さいころ夜光に見いだされた。いわば、夜光塾設立当初のメンバーだ」

俺は転入初日のことを思い出す。

将棋が好きだと言っていた。

「もしかしたら、この塾にもまだそのころの夜光の資料があるかもね」

——翌日、塾舎。

「その女、信用できるのか？」

「わからない、だから調べに来たんだ」

絶対信用できない。

「それが確かなら烏羽のオリジナルは陰陽庁ではなく陰陽塾に保管されてたって野もう
なずけるがどう考えてもここを穿り返すより、塾長に直接問いただす方が手取り早いだ
ろ」

「塾長は今とても忙しいし、ああ見えて曲者だからごまかされないための情報が欲しい
んだ。陰陽師設立時の資料は夜光の手掛かりがあるかもしれない」

「一番早くて確実なのは今すぐ相馬つてやつに電話する手なんだがなあ」

それはしようもない案だな。

「連絡先しらねえし」

— 図書室。

「これはまた随分と派手に荒らされたもんだ」

「大丈夫、陰陽塾の歴史に関する資料が固まっているところを見つけて、そこだけ掘り返せばいい」

「……今度から、初め会った子にはまず、ケータイの番号を聞いとけ」
「そうだな、とりあえずおまえを呼び出すよ」

やだよ、得たいの知れないやつ番号知るなんて。

しっかしなんで図書室がこんなに荒らされてるんだろう？
分かん。

それから簡易式を複数出して書を机に持ってこさせる。

そして俺たちが読む。

時間がたつにつれ飽きてくる。

冬児はすっかり夢の中だ。

「だめだ!!名簿がつくられたのは十期以降。設立時のものはない!!」
「ソウデスネー……でもちよと見たかったぜ。六十年前のババア」
「確かになあ……」

俺はふと気づいた。

「これってさ、大友のとかもあるよな？」
「あるなあ」

冬児のやつ、すごくイイ顔してる。
俺もかなりイイ顔してると思う。
早速行動に出る。

「確か小暮が同期だっけ？何期だ？」
「夏目!!おまえ、知ってたよなあ？」

メチャクチやる気がでてる冬児。
もう興奮しまくってる。

「二人とも真面目に……はあ、三十六期」

観念したのか、素直に教えてくれた。
見つけた……

「いたぞ!!大友陣!!」

冬児がすぐによってくる。

「クソ!!なぜ写真がない!!」

「んーなになに?有意義な三年間でした。つてなんだそりや。手抜きもいとこだ
なあ」

「ぶっ」

「妙におかしいな、なんか」

「「あはははは」」

さてさてお次は……

「小暮だ小暮。ああ？」

「どうした？」

「おいおい……この名前って……」

二人とも覗き込んでくる。

「あっ」

そこに記されていたの名前は早乙女涼。

鈴鹿のを夜光への興味に導いた人間だった。

——翌日。

「早乙女涼って大友先生の同期だったんだ」

京子が言う。

「卒業生ってのは分ってたんだけど、うかつだったわ」

親指の爪をかじりながら言う鈴鹿。

「その相馬って子も本当に塾生なのかな？」

「いつもなら事務の先生に訊いていた」

「ま、どちらにしろ先生に訊けばわかるさ」

プツプー

横を通り過ぎた車からクラクションを鳴らされる。
窓から顔を出したのは幼女先輩だった。

「こんなところで何してるの？」

「あんたこそ上野になんかようか？」

「コンちゃんをさそってドライブ」

「真面目に答えろ」

「心配しなくても夜には返すから」

「そういうもんだいじゃねえ」

こいつ、コミュニケーション能力が皆無なのか？

そうなんだな？

「少しくらいならお金もある」

「いい加減にしろ」

「紹介する。夏目は前に会ったな。涼先輩。こいつらは——」

「知ってる。阿刀冬児、倉橋京子、大連寺鈴鹿、メガネ」

「メガネ!?!」

「なんだ知ってたのか。まあ有名と言えば有名だからな」

「あ、あの僕は……?」

あえて言おう。

天馬はメガネでいいと。

運転手を見る。

こいつ式神だな。

「式じゃよ、たんなる運転用じゃ」

後ろにいかにも坊ちゃん——こいつ、道満だな。

「息災でなによりじゃ、あれから少しは——」

その先は幼女先輩のアイアンクローさされて言えなかった。

「しゃらつぷ」

「そいつさ——」

「親戚の子よ。ちよつと預かっているの。今日はこの子がどうしても会いたいって人がいたからわざわざこうして連れてきたのよ。でも、あいにく先客がいたから機会を改めようって帰りかけていたところ。正直、よかった」

「なんだ？」

「何があつた？」

「涼よ」

「じゃあ行くわ」

「あ、ちよつとまつた」

「何？」

俺は少し殺気を放ちながら、だがみんなには聞こえないようにして坊ちゃんに言う。

「道満、また遊ぼうな」

「あなた……」

「ふえふえふえ、そうじゃな」

今度こそ、去っていった。

——病室。

大友は道満の瘴気をくらったせいで入院している。

「大友、来たぞ」

俺はノックじないで扉を開ける。

「おう、ようきたな」

なんかいかついおっさんもいる。

「京子ちゃんと大連寺さんは久しぶりだなあ。あとのメンツとは会うのが初めてかな？」

「天海のおじ様!!」

「京子、知り合いなのか？」

冬児が訊く。

「まあね。呪搜部の部長さん」

「天海だ、よろしくな」

「おええええええ……おっさんがウインクすんなよ」

「ちよつと刃くん!!」

見てはいけないものを見てしまった。

「なんで部長さんがここに？」

「別に驚くほどのことじゃないでしょ？ アンタらの担任は元呪搜官で、おまけに爺さんは塾長ともつるんでるんだし」

「元部下だから、わざわざお見舞いに来てくださったんですか？ お忙しいところをすいません」

京子が訊く。

てかババアとつるんでんのか……

「こちら、それは僕が言うべき言葉やぞ。言わんけど」

「はん、ただ元の部下のところはこの爺さんがいちいち顔を出すわけじゃないじゃん」

その一言で全員が鈴鹿の方を向く。

「つーか、これで確信が持てたわ。あたしにかかった封印をあつさりハックし、帝式ですらない古代の呪術を操る。その正体は呪搜部部长、『神扇』天海の懐刀職務上名を伏せて行動する、呪搜官の十二神将。ついたあだながシヤドウ。だっけ？」

かわいく決める鈴鹿。

大友はやつぱり十二神将だったのか。

「はあ？なん？」「はあーコイツは一本取られた」…て、部長!!」

「今更ごまかしきれるもんじゃねえよ。ああちなみにシヤドウなんて気取った呼び名じゃなくていいぞ。黒子だ黒子」

「神扇の方がよっぽど気取ってて恥ずかしいとおもいまっせえ」

「大友がねえ……こんど殺りあうか……」
「勘弁してくれ」

だろうな。

道満の二の舞だ。

「どうして先生は呪搜部をやめて先生になったんですか？」

「その理由は夏目、お前だと思っぜ」

冬児が言う。

俺もそう思う。

「大友先生が塾に赴任したのは昨年度から。つまりお前が入塾してからだ。塾長は星詠みだしな。おまえに起こるトラブルをみこし、天海部長経由で大友先生に声をかけた。そう考えるのがどうだ」

すごいいい読みだ冬児。

「結構なことだ。大事なことは他人に訊くんじゃなくて、まず自分で考える」
「凶星ってことだな」

おっさんの話はながくてたまつたもんじゃねえ。
さつさと結論を言ってもらいたいものだ。

「二つだけ教えておいてやる。この世界にいる大人どもはどいつもこいつも曲者ぞろいだ。いちいち真に受けている間は——一人前にやなれねえぞ」

それだけ言い、病室から出て行った。
だがその途中で、

「大友さつきの件。おめえからはなしてやんな。とうぶんは連絡は付かねえと思うがそのつもりでな」

くえねえおっさんだ。

「まあ、とりあえず座りい。伝えたいこともあるしな」

聞いたことを簡単にまとめよう。

どうやら、天海のおっさんは双角会が壊滅すると思っっているらしい。

だが、警戒は必要だ。

陰陽庁から護衛がつくらしいが、それでも気を付けろ。

道満もどう動くかわからない。

相馬多軌子。

こいつは大友でも聞いたことがない。

早乙女涼。

コイツの話の時にはものすごく反応した。

「僕の動機やからなあ」

「わざわざ足はかいがあつたわ。その様子だと、早乙女涼が夜光研究のパイオニアつていとも知ってそうよね？」

「烏羽衣の件やなあ……君ら一個間違えとる。涼（すず）や。早乙女涼（りょう）と買い

て、早乙女（鈴）

「おいおい……」

やっぱり幼女先輩か……？

「僕が言うのもなんやけど、気つけや。この女、一筋縄ではいかへんで」

——翌日、祓魔局、目黒支局。

「結局、早乙女涼のことも相馬多斬子のことも収穫なしか。京子、塾長の方はどうだ？」
「ごめん、まだ訊けてないの」

まだ訊けないか。

「おばあ様、今はそうとう忙しいみたいで」

誰か来たな……

気配の方を向く。

そこには――

「喜べ、スーパーVIP待遇だ。なんせ俺がお前らの護衛につくんだからなあ」

「あ、結構です。どうぞ、お帰りください」

「テメエ、ぶち殺されてえのか!!」

まったくうるさいチンピラだ。

第13話くはあ・・・神扇って・・・く

——祓魔局、目黒支局。

「喜べ、スーパーVIP待遇だ。なんせ俺がお前らの護衛につくんだからなあ」

「あ、結構です。どうぞ、お帰りください」

「テメエ、ぶち殺されてえのか!!」

まったくうるさいチンピラだ。

だいたい俺より弱いやつに護衛が務まるど？

否、務まらない。

「刃、そこまでにしときなよ。講義が始まるよ」

しようがないな。

夏目にそう言われちゃったら従うしかない。

なんせ俺のゴシユジンサマだし。

「シエイバ、見てろ」

シエイバ？

ああ、隣にいつオレンジ髪をやつか。

そいつは短くうなずく。

なんだ？

チンピラは何をする気だ？

……シエイバが俺のことを睨んできてるんだけど。

俺、何かした？

——中庭。

「大友先生が行ってたとうり、今度の捜査はかなりの大がかりのようだね」
「それに……アイツがな……」

夏目に冬児が返す。

アイツ……シエイバのことだ。

「シエイバって呼ばれてたよね？」

座ってじつとこつちを見ている。

正直言つてキモい。

「さつき、鈴鹿ちゃんにメールで聞いてみたわ。十二神将だし、何か知ってるかも」

その時、京子のスマホが鳴る。

京子が内容を読み上げる。

「バカ刃に言つとけ!!シエイバは陰陽庁が鏡に禁止していたヤバい式神って聞いてるよ!!見かけがどうでも絶対に気を抜くな!!」

沈黙がこの場を支配する。

見かけ、ねえ……

……いかにも軟弱そうだ。

ただ……目がイってる。

「おっと……」

「何やってるんだよ……」

俺は手に持っていた箸を落としてしまった。

「じゃーねえ、新しいの持ってくる」

俺はそう言つて、食堂へ向かった。

—— 食堂。

「よお……」

げえ……なんでチンピラがここに？

「話があんだ。ちよつとこい」

テーブルに乗せた足でテーブルを叩き、命令してくる。

「なんの用だ？」

「ああ？それが護衛についてくださった年長者に対する態度か？」

「何言ってるんだガキが。俺のが年上だ」

「はあ？テメエ歳いくつだ？」

「5万1150歳」

「あゝ？ザケてんのかテメエ？」

えー……

俺は真面目に答えてあげただけだな……

折角の善意を……

「ふざけてない。本当のことを言ったまでだ。ちなみに俺の知り合いには三兆歳オー

バーの人外の女の子もいるぞ☆地球が氷河期のころから存在したとか」
「……ケツ!!そのことはもういい。大友の件で訊きたいことがある」

大友のことです？

何を？

何を知りたいんだ？

「Dを撃退したのは小暮ってことになってるが……やつはぎりぎり間に合っていないはずだ。時間的にな」

いいえ、余裕で間に合ってます。

「つまりそれまでDを足止めしたやつがいることになる……まず確認したい。大友は生きてるのか？」

「生きてるよ」

「なんだ？そっけねえ答えだなあ。命の恩人に「まずその認識から改めろ」…ああ？」
「Dを撃退したのは俺だ」

「……ザケてんのか？」

またその返しか……

レパーティーの少ないやつだな……

「ふざけてない。実際にあのジジイを殺したのは俺だ」

「……そうか。とりあえずダメージはデカかったわけだな？」

「ああ……俺とジジイの戦闘の余波に巻き込まれてな」

大友も結界を張っていたようだが……

意味をなしていなかったか。

「聞かせてくれねえか？」

「ああ？」

「おまえとDの呪術戦の内容。俺の気持ちわかんדר？だから話せ、もったいぶらずにな」

……どうしよ。

忍術については話さないほうがいいか？

でもそれは不可能だ。

戦闘は忍術が基本だったからな。

しかたない……仮に忍術が理解されてもこの世界の人間には俺が教えない限り忍術は使えないだろう。

「忍術を使った」

「忍術だと？」

「そうだ。俺は一切呪術を使わなかった」

「んなバカな……それに忍術だと？ 忍者が使うアレか？」

「そうだ」

それからもしばらく続く。

使った系統。

どのような戦法でいったのか。

最後はどういう仕留め方だったのか。

「なんだそりや……そんなデタラメなことがあつてたまるか!!天候を簡単な術一つで変え、それを利用して強力な術で一気に仕留める……しかもたいしてエネルギーを食わない……」

「呪術ならものすごく時間がかかるものも、忍術なら一定量の印を結ぶことで可能にする。これが一番の呪術と忍術との違いだな。忍術のが便利だ。なんせ呪術みたいに小難しいことを一切考えなくていいんだからな」

ここまで話すと、チンピラが黙り込む。

顎に手を当てて考え込む。

フフフ、悩め悩め。

「Dの呪術に関してはあまり気にしてなかったからな……まったくと言っていいほどわからないが……まったく脅威を感じなかった。あれなら俺の娘のがよっぽど怖い」
「……おまえの娘ごんだけだよ」

あれー？

口調が変わってますよー？

「まあそれはどうでもいいことか。で？他に訊きたいことは？」

「そうだな……おまえ、何年でそこまで至った？へたすりや十二神将全員でかかっても勝てない。だから聞きてえ……何年かかった？」

……まさかこんなことを訊かれるとは思わなかったぜ。

でもまあいいだろ。

このくらい答えても。

「俺のこの力は年月をかけて進化したものもあるが……基礎は百年だ。百年かかった」

「そうか……」

納得した、そんな顔をしている。

「悪かったな、いろいろ聞いちゃって」

「んにゃ、別に」

チンピラは立ち上がる。

そして出口の前で立ち止まる。

「なあ、刃。おまえ、そんなに実力があるなら祓魔官でも目指せよ。おまえがこつちに来れば面白くなりそうだからな」

「気が向いたならな……」

「そうか」

今度こそ、出て行った。

はあ……今の話し合いで少しだけ評価が上がったぞ。

——中庭。

「常務が終わっても双角会狩りが終わつてるとは限らない……なるべく一緒にいたほうがいいと思うぞ。鈴鹿は冬児と天馬が探しに行っている」

その時だった。

「何をしている」

声をかけてきたのは俺にボロクソにやられたプロの祓魔官（笑）だった。

「ここで何をしている。おまえを慕う者たちが死力を尽くして戦っているのに」「何の話ですか？」

プロが夏目に言う。

もしかしてコイツ!?

「助けに行つてはやらないのか? おまえにとつてはバカな信者なんて矮小くだらしない。取るに足らない存在なのか? 教えくれ、北辰王」

その瞬間、夏目と京子の体がこわばった。

第14話～髭切の分際で!!～

——中庭。

「あなたは……」

「双角会か？」

俺は訊く。

夏目も京子は警戒をしている。

「少なくとも今はもう違う。ただ、やつらの気持ちはわからんでもない。土御門夜光に
すがらざる得ない気持ちは。この春、霊祭テロを起こした六人部千尋と新宿支局で呪搜
部と戦っている牧原義隆は陰陽庁の同期でな。一晩中、夜光について語ったものだ」
「江藤さん……」

夏目もドン引きだ。

「迷惑な話だよな。だが……あんたに夢を見た者がいること、知っておいてほしい。せめてもの手向けに、こいつに呪力をそそいでやってくれないか？」

そうやって取り出したのは赤と黒の御払い棒的ななにか。

俺にもわからん。

しばらく沈黙が続く。

先に口を開けたのは江藤だった。

「すまない。邪魔をしたな……」

そして、俺たちの前から離れた時だった。

江藤はシェイバに斬られていた。

シェイバは刀についた血を舌でペロリとなめとる。

「殺さないほうが良かったかな？」

呟くシエイバ。

「伶路が悪いんだ。全然遊ばせてくれないから。で、何これ？」

そんなの俺が知りたい。

とりあえず、夏目と京子を下がらせる。

周りには人が集まってきた。

江藤が棒に手を伸ばす。

「えい」

その手をシエイバが刀で貫く。

その瞬間、瘴気があふれ出てきた。

「？急如律令!!」

夏目が式神を投げて結界を張る。

「刃様!!瘴気はどうやら地下にももぐっているようです!!このままでは霊脈が!!」

いつの間にか出てきてたコンが言う。

その間にも周りに地割れが広がる。

そして瘴気は四方に散り、霊災となる。

「フェーズ3ってどこか?」

面倒なことを……

「出でよ、北斗!!」

夏目が北斗を呼び出す。

そして霊災の一部を止める。

「倉橋さん!!護法式を!!」

「わ、わかったわ。白桜、黒楓!!」

京子も一部を止めにかかる。

うし、俺もやるか。

『写輪眼』を開眼させる。

そして印を素早く結ぶ。

「千鳥光剣!!」

俺も一部を斬り刻む。

だが、すぐに次が来る。

夏目が俺たちの前に出る。

「私の周りを囲め、這う者の足を妨げよ!!? 急如律令!!」

俺たちの周りに光の柱ができる。

だがそれは一撃で壊れる。

「だめだ、時間稼ぎにもならない」

だがそれもここまでだった。

「だめだよお……遊ぶなら僕が先でしょ!!」

シエイバが仕留めたからだ。

「こいつ……霊災になりかけてるな」

「北斗!!」

夏目が北斗に指示を出して、シエイバを仕留めさせる。
だが、シエイバはそれを片腕で受け流す。

「ハハッ!!こりやすごいやあ!!」

こいつ……戦闘狂か？

このままではらちが明かないな……

仕方ない……一気にいくか。

その考えもすぐに取り消される。

「その塾生!!早く逃げなさい!!」

祓魔官が俺たちに叫ぶ。

ここは甘えちやうか。

「行くぞ!!」

俺たちは食堂に向かう。

—— 食堂。

「とりあえず、冬児たちと合流するぞ」

パリイン!!

窓ガラスが割れる。

そこから出てきたのはシエイバ。

「まってえ……まってよお」

ヤ、ヤンデレ!?

もー怒ったぞ!!

「ぶち殺してやる……朱蓮、白」

『お、応』『は、はい』

龍刀を二振り出現させる。

そして思いつき踏み込む。

「うわっ!!」「きゃっ!!」

そのせいで床にクレーターができる。

その勢いをそのままシエイバに突っ込む。

そのまま壁まで弾き飛ばす。

だがシエイバはすぐに反撃をしてきた。

「たのしいなあ!!」

甘い!!

動きが単調だ!!

シエイバの刀を弾く。

そして十文字に斬りこむ。

そのタイミングでちょうど北斗が乱入してくる。

北斗はシエイバを口でくわえ振り回す。

だがシエイバは腕を犠牲にして離脱する。

そして――

「北斗!!」

北斗がシエイバの刀に貫かれる。

北斗がラグる。

「コレが龍かぁ。この刀、髭斬って言うんだ。どうだい? すごいだろ?」

そして北斗が消える……

それと同時に夏目が膝をつく。

しやーない!!

「夏目!!しっかり掴まってるよ!!」

夏目をお姫様抱っこして走る。

シエイバはゆっくくり俺たちを追いかけてくる。

—
???

とりあえず、建物のなかに入る。
階段をあがり、上の階を目指す。

途中、窓からシエイバの足止めをする冬児を鈴鹿が見えた。
すまねえ……

扉を閉めて、結界を張る。

「とりあえず「刃か？」……」

「土御門くん!!」

奥からか……

そこからぞろぞろと陰陽塾の生徒が出てくる。

「まだ霊災は祓魔されてないの!？」

女の子が叫ぶ。

「一体どうなってんだよ!？」

今度は男だ。

それと同時に結界が破られていく。

「みんな、隠れろ!!」

みんなはしたがって隠れる。

そして扉が斬り飛びされる。

そこから赤く目を光らせたシェイバがふらふらとやってくる。

「あの龍……君が死にかけたら出てくるよね!!」

俺は夏目を突き飛ばす。

そして迫ってきた刀を受け止め——きれずに吹き飛ばされる。

そして衝撃破が夏目……に？

「夏目くん!!」

京子が叫ぶ。

「なんだよ、形代も持ってないの？」

シエイバは夏目に言う。

「腕とか足とか斬り飛ばしたら、龍出してくれる？」

斬り飛ばす？

何を？

夏目の手と足をか？

「龍出せよ、出せよ。ほら。なんだよ、怖がってばっか。だから男の格好をして周りをだましてたんだ。ずるい奴」

この一言で、夏目は涙を流した。

「ずる、嘘つき」

泣かせたな……

夏目を泣かせたな!!」

俺は無言で、気配を『絶』で消してシエイバに近づく。
そして思いっきり蹴り飛ばす。

「夏目を泣かせた責任、とってもらうぜ」

俺は静かに怒る。

そして唱える。

二天龍の覇の呪文を。

「我、目覚めるは」

俺の周りが陥没する。

「覇の理を体现せし、二天龍なり」

辺りには旋風が巻き起こる。

「無限を喰らい、夢幻を掌握す」

龍の波導が場を支配する。

「我、天の龍の霸王と成りて」

やがてそれは形を創り始める。

「汝を天龍の極地へと誘おう」

詠唱が終わる。

『Juggernaut Ultimate Drive
!!!!!!』

俺を漆黒の鎧が包み上げる。

すぐに兜を取る。

うし、視界良好。

羽織るものを創造し、夏目にかける。

「まってる、今すぐ片をつける」

「うん」

シエイバに近づく。

それは一步。

だが逸歩だ。

シエイバをさらに蹴り飛ばし、外に出す。

「冬児……見てろ。これが俺の怒ったときの力だ」

「お、おう……」

まだ怒りは収まらねえが仕方ねえ。

とりあえず――

「終わったぜ!!」

夏目に向かってサムズアップをする。

あ、そういえば夏目が女だってことバレちゃったよな……

『写輪眼』でやっちゃまうか？

でも、いざれバレることだしな……

そんなことを考えていると、みんなが集まってきた。

もちろん夏目もだ。

だが表情は暗い。

それに下を向いている。

「はあ……さつきも言ったけど終わったぜ」

「あ、ああ。それよりその鎧……」

「あ、よつとこれでいいな」

京子だ。

最初は笑っていた。
でも作り笑いだ。

「倉橋さん……」

夏目がなんとも言えない顔で呼びかける。
それを皮切りに京子の表情が暗くなる。

「嘘つき……」

「おい……」

頬には涙が滴っていた。

「嘘つき!!」

今度は力強く言った。

言い切ったのだ。

俺は静かに『写輪眼』を開眼する。

そしてみんなに幻術をかけて帰らせる。

冬児と天馬以外だけど。

二人には通常の眼に戻してアイコンタクトをする。

先に帰れ。

それがわかったのか、二人は帰っていった。

「夏目……」

「やいばあ……」

「今は泣け。胸ぐらい、いくらでも貸してやる」

「うん……うわああああああ!!」

叫ぶ。

泣き叫ぶ。

俺は黙って頭を撫でることしかしない。

「ごめんね……ありがとう」

「ああ……気にするな。俺はおまえの男だからな」

ニカツと笑って答える。

それに対して夏目は顔を赤くするだけだった。

そのまま俺たちは宿舎へと手をつないで、ゆっくり、ゆっくりと帰っていった。

第15話〈強襲?これが?〉

——屋上。

「お、夏目」

声に反応してこちらを向く。

「おまえがここに来るなんて珍しいな」

「明日から塾だと思うと……」

「夏目が女だつてことと俺の嫁ということは知れ渡つてるだろうしな」

「そ、それもそうですけど、倉橋さんのことが」

あー……泣いてたしな。

しかも結構ガチ泣きだった。

でもいいものが見れた。

「まあ、騙してたかな……ま、覚悟決めるしかねえ」

「覚悟、ですか?」

「ああ、正面からぶつかる。しぶとく謝る。道はいくらでもある……隠し事をしない本当の友になれるかもしれない」

「刃は前向きだね」

前向きか……それならどれだけよかったことか。

「あれから一年……なんだかあつという間でした。刃くん……」

「なんだ?」

「ありがとう。この一年あなたがいてくれてよかった」

「何言ってるんだ。これからも一生そばにいてやる」

「はい!!」

うーん……こんなラブコメは何千年ぶりかな?

——翌日、登校。

今日は俺と夏目と冬児の三人で登校している。

しかし、視線をあちらこちらから感じるな……

うっとおかしい。

「案の定と言うか、夏目のことはかなり広がっているようだな」

確かに……

「おはようみんな!!」

天馬はいつもどおり俺たちに話かけてきた。
うーん、こいつはいいやつだな。

「おはよう、夏目くん」

「天馬くん」

おお、少し夏目の顔が明るくなったな。

「この前は大変だったね。今はまだ男子寮なんですよ?大丈夫?」

「うん、刃と同じ部屋だからね。結界も協力だし、それに刃が守ってくれるし／＼／＼」

顔を赤くしながら照れくさそうに言う。

「このこの、かわいいやつめ。」

「そ、そうなの!? 刃くん……」

「んだよ?」

「うらやましすぎる!!」

……ハッ!!

最高だね。

「よう鈴鹿。おまえも一緒か」

「うん、僕が来るまで一人でそわそわして待ってたんだよ」

ふーん、かわいいところあるじゃないか。

「え、ちよつ、メガネ!! 勝手な妄想こかすな!! ぜんぜん待ってないし!!」

「……何もってんだ?」

「ふえ!? ああいや、これは……」

動揺しながらすぐに後ろに隠してしまった。

とりあえず、学校に向かうことにした。

でも鈴鹿が何を隠しているかが気になるな……

「夏目くん、ご両親は?」

天馬が訊く。

「ああ……うん」

「夏目のところは親父さん一人だからな……それに基本連絡取らないし。案外隠し通せるかもな」

「あとは京子だな……」

それな。

面倒だったらありやしない。

つか、だいたい昔会ったのは俺だろ。

「そうだな……」

まあ、どうでもいいんじゃないですか？

——教室。

教室に入ると、みんな無言で夏目を見ていた。

夏目はずっとうつむきっぱなしだ。

教壇の前にたち、頭を下げる。

「土御門……」

男子生徒の誰かが声を出す。

「この間ありがとうがとな!!」

立ち上がって言う。

おおう?

思ってたのと反応が違うねえ……

「おまえらがいなきや、俺、死んでたかも!!」

それを皮切りに、女子生徒も言う。

「私も!!」

さらに広がっていく。

「私も感謝している!!」

「ありがとう!!」

だが夏目は……

「でもあれは……僕らが巻き込んだせいで……」

だがそれも簡単に返されえる。

「みんな無事だったんだからいいじゃないか」

この一言に、みんながうなずき、同意する。

なんだ、なかなかいいクラスメイトじゃないか。

「みんな……ありがとう」

目尻に涙を浮かべながら礼を言う。

その時だった。

ガラガラガラ

教室の扉が開けられる。

入ってきたのは京子だ。

俺、夏目、冬児、天馬と鈴鹿が京子に注目するが、それを気にせず扉を閉めて自分の席に着く。

「倉橋さん……」

夏目が悲しそうに呟く。

授業中も、ずっと上の空だった。

そんなに気にするか。

キーンコンカンコン

授業終了のチャイムがなる。

京子は足早に教室から出て行った。

仕方ねえ……

俺は京子の後を追う。

「さてよ、京子」

後ろでは冬児と天馬が見ているので、変なことはできない。
肩に手をかけ、こつちを向かせる。

「悪かったな、事情はメールで説明した通りだ。夏目の性格はおまえも知っているはずだ。理不尽な、クソみたいなしきたりだろうと、律儀に守っちまう。たがな……おまえにまで黙ってたのは悪かったと思ってる……すまなかった」

しばらくして、京子が口を開く。

「私……私、言ったよね？昔、夏目くんの家で男の子に会ったって。それで、その子のこと……好きになったって」

「ああ……一目ぼれしたってな。だが夏目は本当は——」

「男の子だった。その子は!!やさしかったわ。初めて会った生意気な私のことを少しも嫌がらなくて、ちゃんと覚えてる。土御門くんでしょ??て聞いたら、少し迷ってたけど、うんってうなずいた。あの子は絶対に男の子だったわ!!」

……それ、俺ですね、はい。

なんとなく予想はしていましたよ。

見事、予想的中です!!

おめでとう!!

……めでたくねえ。

「……………それってさ、お「じゃあね／＼／＼」…おい」

顔を赤くして、去っていった。

……夏目からOKでるかな?

——翌日、朝。

ピロロロロロロ

着信？

誰だ？こんな朝っぱらから……

俺は画面に表示されている文字を見て驚愕する。

親父

な、なんで親父から？

とりあえず読もう。

『こっちは大丈夫だ、心配するな』

……やべえ、そんなこと言われたらさ——。

——
食堂。

『未明になって判明した陰陽道の名門、土御門家の火災は消防隊が駆けつけた時は、すでに自然鎮火しており、現在出火の原因を調査中です』

俺はテレビで報道されている内容を聞いて、旋律した。

いくら破門されたとはいえ、実の親ではないと言え、俺の親だ。

恨み？

そんなものはあるわけがない。

心配だ……

もし、これが人によるものだとしたら……

俺は全力で、全力全壊で相手をしてやる。

「や、刃？ すごい顔だよ？ 怖いよ……」

「ん？ ああ、すまん」

夏目に言われちゃった……

『焼け跡からは、遺体などは発見されておらず、建物の所有者である、土御門泰純は今だ連絡が取れない状況とのことです。当局は——』

臭えな……

こら、陰陽庁がかかわってんな……

今はまだ行動を起こすべきではないか？

いや……

悩むな。

でも、面倒なことになった。

第16話く姫か・・・リアスを思い出すな

——廊下。

「親父さんとはまだ連絡つかずか」

「ああ……」

連絡が取れない。

こまったものだ。

能力を創れば一発だが、そんなことの為に創るのはなあ……

「夏目!!刃!!」

むむむ?

この声は——

「多斬子」

「やあ!!また会えてうれしいよ!!」

「おまえ、どうしてここに？」

「今日は一日、見学に来たんだ」

見学？

何をだ？

何を見学しに来た？

「間違いないのか？」

隣に座っている冬児が話かけてくる。

多斬子は授業を一番前の席で受けている。

「ああ……あいつが前に話していた相馬多斬子だ」

多斬子は後ろを向き、手を振ってくる。

手を振って返す。

「火事といい、派手な日だな」

確かに……今日一日でいろいろなことが起こりすぎている。

——
食堂。

「うわあ!!学食ってこんなに種類があるんだ!!」

俺と夏江と冬児は多斬子を案内していた。

多斬子はショーケースに見入ってる。

「こういう場所、初めてなの?」

夏目が訊く。

「うん」

反応でわかりますけどね。

「じゃあ、次は呪練場にも行くか」

——移動中。

「おまえ、楽しそうだな」

隣で歩いている多軒子に言う。

ずっとニコニコしている。

「うん、こうしてみんなと一緒に歩くのが夢だったんだ」

「夢？」

夏目が訊き返す。

俺も訊き返しそうになった。

これが夢か……

「僕はこれまで、ずっと一人で呪術の勉強をしてきたからね」

正真正銘の箱入り娘、姫様ってどこか？

この世界にもいたんだな。

「この塾生だつてのは、嘘、つてことか？」

それだ、それが一番聞きたかつたことだ。

「嘘じゃないよー。確かにまだ籍はないけどね」

「どういうことだ？」

思わず訊きかえしてしまった。

籍がない。

なら塾生ではないだろ。

「それは……まだないしょ」

一瞬表情が暗くなった。

何だ？

何を隠している？

「それより、倉橋長の娘さんは？」

「あー……」

「こいつら今ケンカ中だな」

なんで言っちゃまうかな冬児くん。

「ごめん……」

ほらー、いらぬ気を使わせちやっただじゃん。

「あ、でもだったら早く仲直りした方がいい。ちゃんと話せばわかってくれるよ」

「ちゃんと話せば……」

夏目？

気にしないでおう。

「夏目くん」

この声は……おっさん教師。

「少し、いいかな？ 陰陽庁が事情を聴きたいそうだ」
「わかりました」

あやしい……

「陰陽庁？」

「……ああ、家事のことだろう」

「火事？」

俺は火事のことを簡潔に話す。

「土御門の本家が、消失？」

後ろに下がりながら信じられないと言った表情だな。

「じゃあ、手に入れたって……本当なのか!？」

急に叫びだした。

誰か……いないな。

一体なんだったんだ？

——
呪練場。

「夏目」

「何か分かったか？」

夏目が来たので、即座に質問する。

夏目は首を横に振る。

「逆に事情を知らないかって……」

「陰陽庁も知らないのか……」

冬児の言う通りだ。

陰陽庁が知らない。

まず、これがおかしい。

本気で捜せばもう少しどうにかなるはずだ。
ということとは、グルか？

「僕が説明するよ」

口を開いたのは多斬子だった。

「僕は君に可能な限り隠し事はしたくない。まず、泰純氏は無事だ。行方は分からないが、屋敷に火を放ったのは彼なんだ。原因は陰陽庁の強引な行動にもあったみたいだけどもうしわけない」

そう言つて頭を下げる多斬子。

「要約するところか？陰陽庁が土御門家を攻撃した。火事はその結果だと」

なんだそりゃ？

陰陽庁……つぶしちゃうか？

「本来、土御門と対立するなんてあつてはならない。ただ……泰純氏は責任を放棄してきた人だ。それをめめ事を生んだとすれば仕方なかったとしか言いようがない」

「おい、さつきから何ふざけたことぬかしてんだ？」

俺は多斬子に近づいていく。

なんだ？

心配を感じる。

「下がっている」

多斬子は何かに命令した。

「夏目、僕は土御門夜光と個人的に……いや、血筋として因縁があるものだ。僕が君のこ
とをずっと気にかけていたのは君が夜光の生まれ変わりであるからでもあるんだ」

「君はまさか夜光信者n「違う!!」……」

ますますわかんねえ……

「夏目が知っている夜光信者とは違うんだ。どうか……どうか信じてほしい!!」

「この状況で信じろと？」

何甘いこと抜かしてんだ？

「おまえさ、何がしたいの？」

「……僕は、みんなと仲良くなりたくない。本当に……それだけなんだ……僕には君たちみたいに親しく話せる友達がいなかった。人に何か伝えるのが下手だ……きつと無礼だったり、不作法だったものもあると思う。でも呪術でなら言葉にできないことも伝えられる。だから夏目……どうか一度、僕と手合せしてほしい」

……戦鬨狂ですか？

なんで火災のことを話してたのに手合せに？

意味わからねえ……

なんか夏目は承諾してるし。

俺たちは下に降りる。

目の前では夏目と多斬子が向き合っている。

手合せが始めると、多斬子は水の呪術を、夏目はそれを土の呪術で防ぐ。

「五行結びて、霊脈を絶つ!!急如律令!!」

先に場を変えたのは多斬子だ。
地面び五芒星が浮かび上がった。

「霊脈を絶った!?!」

「鈴鹿に天馬?」

「土御門の龍を封じたわけね」

なるほど……北斗対策ね。

「式神生成、?急如律令!!」

多斬子が手に乗せた大量の式神を鳥にして飛ばす。

「式神生成、?急如律令!!」

夏目も負けじと鳥を出す。

だが色が違う。

多斬子は白なのに対して、夏目は黒だ。
まるで烏だな。

「すごい……やっぱり夏目くんは天才だね」

天馬が言う。

本当にそうなのかね。

裏では努力をしていそうだ。

まあ努力の天才と言ったところか？

「何言ってるんだ。そんな言葉で片付けてやるな。俺たちは知っているだろ……あいつはだれよりも努力をしていることを」

うむ、俺が一番知っている。

「どうした夏目!!土御門の技、夜光の技はそんなものじゃないはずだ!!」

多斬子が吠える。

それに対して夏目は――

「僕は土御門夏目だ。夜光など知らない!!知るものか!!」

竜巻が巻き起こる。それによって鳥の式神は全て紙に戻る。

「君も、己の運命から逃げるつもりか?一、二、三、――」

なんだ?

何かヤバそうだ。

「何か……ヤバい感じじゃない?」

隣にいる鈴鹿もそう言う。

『万華鏡写輪眼』を開眼する。

!?

目尻に刻まれた五芒星が反応した!?

「四、五、六、七——」

痛え……

俺は頭に手を当てる。

「刃?」

「何!?!この靈気の乱れ!!」

俺は痛覚を遮断する。

「八、九……十」

このままだとヤバいな。

主に俺が。

仕方ない。

近くに大友はいるが関係ない。

「いい加減にしてくれないか？」

俺は須佐能乎を展開しながら多斬子に言う。

そして――

「さっきからさ、すごい頭痛がするんだよ。その分だ……喰らつとけ。八坂ノ勾玉」

繋がった3つの勾玉を手裏剣のように多斬子に飛ばす。

そして着弾すると、頭痛が消える。

痛覚遮断してたの痛いなんてな……ありえない。

「刃くんやりすぎとちゃうか？しょうもないケンカはあかんでえ」

「大友、俺は被害者だ。多斬子がな」

大友は多斬子の方を向く。

「君が相馬斬子くんか？大した腕前やなあ。おまけに、随分おつかない式神連れ取るやないか」

多斬子の前に人が現れる。

まあ『万華鏡写輪眼』を開眼した時にはもう見えてたけどね。

式神は多斬子の後ろに行く。

「刃様!!」

コンが出てきた。

「ん？ああ、大丈夫だ。かなりの痛さだったけど……あの時に比べるとな」

あの時とは一度『神殺し』の能力を付与されたナイフで心臓を刺された時だ。

いやあ、懐かしい。

なんせ『箱庭』での出来事だからな。

大友と多斬子は何かを話しているようだ。

多斬子はお辞儀をして去っていったが……何を話していたんだ？

「先生!!もう大丈夫なんですか?」

「もう髪いつそ染めたらどうですか?」

「てか、さぼりすぎ」

ボロクソに言われてる。

ちよつとだけ同情しよう。

「すまんすまん、堪忍やでえ」

じゃがみこむ大友。

「いつからや?」

俺に訊いてんのか？

「いつから……しいて言うなら目黒のときか？でもコレには頼ってないし、勝手に作動するしな……」

「えらい活躍だつて訊いたけどこの呪文」

「これか？コレは俺を見鬼にするために夏目がな」

「その呪術が原因なんですか？」

夏目が心配そうに大友に訊く。

「きっかけはコレかもしれない。でも……今の君の状態は不自然ゆうか、妙に人工的な気がすんやなあ。また、こつそり封印解除してやるさかい、調べたつてくれへんかな？」

「なんであたしが」

プイツとそつぽを向く鈴鹿。

「ついでに、刃くんの体、好きなようにいじつてええでえ」

「なっ!？」

鈴鹿とコンが真っ赤になる。

「ば、ば、ば、ばかじゃにやいの!!」

かわいいねえ。

「そう言えば、京子くんは？」

「こいつら仲たがいでいるんです。結構深刻に」

「原因はなんやねん」

「夏目の正体がバレたからですよ」

あつさり言ったね冬児くん。

「ん？正体？」

あれ？

この反応は、まさか知らない？

俺は説明した。

夏目がしきたりで男のふりをしていたことを。

ものすごく驚いていた。

気づいていなかったらしい。

今、夏目は顔が真っ赤だ。

うんうん、何度見てもこの顔はいいねえ。

「なるほど、乙種呪術ははまるとここまで強烈なもんなんやなあ」

「京子のやつ、夏目が男だと信じてたからな……」

「京子くんは何て言うてた？」

大友が夏目に訊く。

それ訊いちやいますか？

「嘘つきって……」

「そうか」

「私、どうすれば……」

「なあ、夏目くん。僕は思うねん。大事な人に素直な気持ち伝えることは決してあだになつたりせえへん。回りくどいことしたらアカン。謝り倒して来い!!京子くんを探し出して、今、すぐに!!」

夏目はしばらくの間呆けた……

だがすぐに――

「はい!!」

そう言つて祝練場を出て行つた。

俺は大友に一言。

「俺さ、初めて大友が先生だなあつて思つたわ」

「そらないで、刃くん」

あはは、こんな覇気のない先生は初めてでな。

それよりも多斬子だ。

何か怪しいね。

でも、敵では……ないのか？

まだわからないな。

ああ……本当に——

面倒だ。

第17話く花火・・・久しぶりにみたな

——寮前。

「おいてくぞ〜」

寮の前から部屋にいる夏目に声をかける。
すると、窓から夏目が覗いてきた。

「ごめんなさ〜い!!」

それだけ言っ引っ込んだ。

——道。

「たかがコンビニに行くだけだぞ？」

「女の子にはそれなりの準備が必要です」

「それもそうか」

確かに『神使』のみんなも準備に時間がかかってたしな。
女の子なら仕方ない事か。

——公園。

「まだ靈氣は安定しませんか？」

コンビニで買ったかき氷を食べながら夏目が訊いた来た。

「んー？別に、前から気にしてなかったからな。まず、靈氣を使うことがあまりないし。それにしてもかき氷の味は田舎も都会も変わらないな。まあそりやそうか」

「いつもメロン味ですよね」

「食べるか？」

一口分スプーンの上に乗せて夏目に差し出す。

夏目は頬を少し染めて、口に入れる。

「んー……っつて刃くん!!垂れてますよ!!」

「ん?あー……ちよつと手洗つてくる」

俺はベンチを立って、水道まで行く。

そして、水で手を洗う。

む?

誰だ……夏目の近くに一人、誰がいるな……

今振り返るろ気づかれるな……

行動を起こさない限り、こちらから動くのは良くないな。

しばらくすると、気配が消えた。

一体なんだったんだ?

でも、どこか懐かしい気配だったな。

—— 神社。

「冬児、集合場所は？」

「この先だ」

屋台でフランクフルトを買い終えた俺は冬児に集合場所を訊く。

この先って……どの先？

ちなみに、冬児は私服だが、俺と夏目は浴衣だ。

俺は黒を基調にして金字の刺繍が入っている。

夏目は白を基調にして金字の刺繍が入っている。

ようは、黒か白かの違いだな。

もちろん、馬鹿正直にピチツと着ている訳ではない。

胸元は開いてるし、下も動きやすいように少し崩れている。

冬児が歩き出す。

それにつられて俺と夏目も歩き出そうとするが――

「あっ……」

夏目が人にぶつかってよろけてしまった。

「よっと。まったく……」

「や、刃くん……」

夏目の手を取る。

「このまま行こうか？」

「は、はい……」

少し顔を赤らめながらも、同意してくれた。
そして、歩き出す。

「ここのところさ、いろいろなことがあって不安かもしれないねえ。だからこそ、夏目や冬児、京子、鈴鹿、天馬と普段通りに過ごしたいんだ。久しぶりだし、楽しもうぜ。花火」
「はい……ありがとう、刃くん」

満面の笑みで返してくれた。

はあ……この笑顔が見れるだけで、俺の元気はMAXを越えます。

——隅田川。

「刃くくん。こつちこつちく」

天馬が両手を振りながら声を出す。
恥ずかしくないのか？

「遅い!!もう始まつちやうわよ!!」

鈴鹿が吠える。

「まあまあ……」

天馬が鈴鹿をなだめる。

「これで全員そろったわね」

声の方を向くと、そこには薄紫の浴衣を来た京子がいた。

「おおう」

冬児が関心したような声を出す。

「似合ってるじゃん」

俺も言う。

一瞬、京子は呆けたがすぐに、

「当たり前よ、バカ。刃も似合ってるわよ。まあ着こなしはちよつと……え、えっちいけど。夏目ちゃんを見習いなさい」

「へいへい」

夏目は京子と同じく、ピチツと着ている。

女の子はそう着るほうがいいけどな。

まあその肝心の二人は何やら内緒話をして盛り上がっているみたいだが。

——浅草寺。

「こつちよ〜」

「あんまり走るとコケるよ〜」

鈴鹿の行動を天馬が注意する。

「ちよつと遅いわよこのノロマあ」

鈴鹿……楽しそうだな……

隣の冬児は……

「おまえ、何飲んでんだ？」

「ツハー!! 麦の炭酸飲料だ」

ドヤ顔で言ってくる。

そのあとも、みんなは屋台で楽しんでた。

夏目と京子は仲良くわたあめをほおばってたり。

鈴鹿は水ヨーヨーで無双をしていた。

たまに、天馬の顔にヨーヨーを飛ばしたりしていた。

冬児は俺の勝った焼きそばをビール片手につまんできたりした。

俺はそれを見ながら、金魚すくい無双。

もとろん全部すくってやったよ。

オツチャン涙目だったけど。
もちろん、金魚は一匹ももらってない。

——隅田川。

そして、花火の開始時間になった。

「やはー!!キター!!」

鈴鹿は一番前ではしゃいでいる。

「鈴鹿ちゃん危ないわよ!!」

それを京子がたしなめる。

確かにきれいだ。

いつも爆撃とかしか見てなかったからな……

花火を見るのは……結構あつたな。

パーティーの時とか。

「よかったね、みんなで来られて」

天馬が話しかけてくる。

「ああ……そうだな」

空を見上げる。

ああ、綺麗だ。

そして夏目をみる。

とてもうれしそうだ。

ふと、京子を目が合った。

「どうした？」

「ねえ、飲み物買ってきてくれない？」

「何買ってくればいい？」

「私ラムネね」

「コーラ」

「麦系の炭酸飲料なあ」

「じゃあ、僕はウーロン茶」

「あいよ……夏目は？」

「わ、私も一緒に行きます」

どうやら夏目は一緒に来てくれるようだ。

まあ、もし夏目が来なかったら俺は創造しようと思ってたんだけどな。

——道。

「よかった」

「ん？」

夏目が話しかけてきた。

「花火、来てよかったです。いいえ、花火だけではありません。刃くんが東京に来てくれ

て、皆と一緒にいられて、本当によかった」

「そうだな」

「去年の夏、頑張ったかいがありました」

「ふーん、何を頑張ったんだ？」

「絵馬とか……」

絵馬ねえ……

確かにあれも一押しになったのかな。

「見つけた」

誰かの声が響く。

「多斬子……」

「刃……僕はこれが君の為に、僕たちの為になると信じる」

「多斬子さん？」

夏目も会話に入る。

俺の為？多斬子たちの為？

何だそりゃ？

「夏目、君には同情するよ。けど、刃が目覚めればきつと君も僕の同士になってくれる」
「あー……なんのこと？」

「言葉では説明できない。なぜなら、君たちは生まれてすぐ、呪いに捕らわれたのだから。土御門泰純め、その呪縛、破って見せる」

「や、刃様!!お下がりにください!!」

多斬子がそう言った瞬間に、コンが出てきた。

「一、二、三、四、五、六、七、八、九、十——」

多斬子がそう唱えると、頭が痛くなってきた。

「いてえ……」

「刃くん!!」

痛すぎて耳が聞こえにくくなってしまった。

そのせいで多斬子の呪文が聞こえなくなってきた。

「つてなア!!クソツタレ!!」

その瞬間、目尻にある五芒星から光がテンに向かって伸びていく。

「な、夏目殿……刃様に呪符を……」

近くで何かやり取りをしているようだが、全く耳に入らない。

目を開けて、周りを見渡すと、冬児が男と戦闘をしていた。

しばらくたつと、鈴鹿もやってきた。

耳も聞こえるようになってきた。

「君のその呪縛を解く。夜光の、かつての盟友の末裔として。行け、鳥羽。主の元に」
その瞬間、鳥籠から膨大な光が放たれる。

「八咫鳥!!」

夏目が叫ぶ。

そして、八咫鳥が俺に突っ込んできた。

「うっえ……」

すごく、痛い。

マジ、やべえわ。

そして、八咫鳥は鎧の形を形成して暴走を始める。
空に飛びあがる。

後ろからは北斗が撃墜するために追っかけている。
そして、難なく、俺が制御せずに北斗を撃墜する。

夏目も来たようだ。

この鎧は夏目も撃墜しようとする。

そろそろ、本格的にまずい。

もう、全力で抗うぞ。

「オオオオオオオオオオオオ!!」

一気に力を開放する。

霊力、気、魔力、聖力、念、チャクラ、そして神力。

すると、膨大な力があふれ出し、鎧が羽織に変わる。

背中からは、創造神の時の翼が六対十二枚生えている。

「夏目?」

いつの間にか夏目は俺の腕の中にいる。

だが、問題はその状態だ。

口からは血を流し、腹にも深い傷ができていた。

治療をする。

『フェニックスの涙“極”』をかける。

だが反応がない。

『時間を操る程度の能力』で時間を巻き戻す。

だが巻き戻せない。

「なんで効かない？なぜ効果がない!!」

夏目が俺の顔に手を添える。

「私は……刃くんのこと……愛して、ます……だから……死んだら……招致、しませんから……」

そして、夏目の手が俺の顔から離れる。

「おい夏目？おい……おい!!」

どうしてくれようか。

第18話～・・・闇夜～

——川岸。

とりあえず、地面に降りる。

そして、翼をしまう。

マットを創造してそこに夏目を寝かせる。

改めて、すべてを試す。

『フェニックスの涙』

反応がない。

『フェニックスの涙』極』

反応がない。

『エリクサー』

反応がない。

『時間を操る程度の能力』

反応がない。

手が、尽きたわけだではない。
だが、これはさすがにおかしい。

いくら世界最強の修正力、原作が働いたとしてもここまでは強いはずがない。
誰かが介入したか？

ありえない話ではない。

「刃!!」

冬児が声をかけてきた。

そしてこちらに寄ってくるが、俺が羽織っていた烏羽織が寄せ付けない。

冬児に攻撃を仕掛けたのだ。

すぐに烏羽織を脱ぐ。

すると、ものすごい脱力感に襲われる——が、一瞬で元に戻る。

「刃……!?!」

冬児が夏目の様子を確認し、静かに俺に呼びかける。

だが、その声には驚愕の色も取れた。
どうしたんだ？

「おまえ、髪が真つ白だぞ!!」

「え?……ああ、そうか」

封印が解けてるんだな。

だから元の髪の色、白銀になったんだろう。

次に来たのは、鈴鹿だ。

そして、式神の雪風が来る。

雪風は、悲しそうに鳴く。

鈴鹿はそんな雪風を優しくなでていた。

また気配が増えた……

この気は……ああ、天馬と京子か。

「なあ、冬児」

「なんだ?」

俺は冬児に声をかける。

「夏目、どうなつてた？おまえの目から見て」

「……死んでるよ」

「そうか……」

やっぱり死んじゃったか……

うーん……こんな気分になるのはいつぶりだ？

ああ、思い出した。

なじみの分身が死んだのに、本物のなじみが死んだと思ひ込んでた時以来か。

その時だった。

けたたましいジープの駆動音が近づいてくる。

それが到達する。

『陰陽庁祓魔局の霊災修祓部隊だ!!君たちを捕縛する!!』

「刃!!大人しくしてろ!!」

冬児が大人しくしろと促してくる。

おいおい、馬鹿言っちゃいけないぜ。

「大人しくするわけないだろ。馬鹿が!!」

一気に魔力を開放して、ジープを吹き飛ばす。

そして、烏羽織が俺にまわりつく。

ほう、おまえも一緒に来るか。

「モード、天使」

背中から翼が噴出される。

その翼を羽ばたかせ、空に飛びあがる。

——上空。

「刃!! 落ち着け!! 一度下に降りるんだ!!」

雪風に乗って追いかけてきた冬児に言われる。

「刃!!」

鳥型の式神に乗っている鈴鹿も呼びかけてくる。

そして、前から燕の式神が来た。

名前なんだっけ?

「呪捜官がいるのか!？」

冬児が叫ぶ。

呪捜官も行動が遅いからこうなるんだっての。

能力を創造する。

『命令する程度の能力』を創造。

「邪魔をするなよ」

この一言で、式神が全て消える。

だが、冬児たちには効果がないことから、冬児たちは邪魔をする気はないようだ。

高度を下げて、廃ビルに入る。

しばらくたつと、冬児と鈴鹿が入ってきた。

「はあ……なんでついてきちゃうかな」

「今のままおまえを一人にできねえだろ」

「ハハハ、せっかく世界に全力であらがつてやろうと思ったのにな」

「おまえまさか!？」

「ん? ああ、安心しろよ。泰山府君祭なんてクソみたいな術は使わねえ」

この一言に、冬児は驚愕、鈴鹿は何やら思い出すような表情になった。

「お取込み中失礼するよ」

急に現れた男が声をかけてきた。

「うそお……お父さん!？」

絶望したような顔で鈴鹿は呟く。

へえ……こいつが鈴鹿の親父か。

「元氣そうじゃないか。鈴鹿……ただし、お父さんはただけじゃないな。自分に対しても、そう安易に呪いをかけるもんじゃない。厳しく言ってきたつもりだが、まだ乙種に対す

る配慮が拙劣なままだね。気をつけなさい」

「お父さんってのは、ニックネームか何かか？」

冬児が訊く。

ニックネームではないだろ……

「ハハハハハ、愉快的発想だが、字通りの意味だよ。自己紹介するよ、私の名前は夜叉丸。生前の名は大連寺至道」

瞬間、冬児の表情が強張る。

まあ、生成りにした張本人だしね。

「まあ、そう睨まないでよ。私たちは同種の眷属になったわけだし」

「どういうことだ？」

「同じ加護を得たってことさ。さて、北辰王。いや、率直に夜光殿とお呼びしたほうがいいかい？」

「何言ってるんだお前。俺は神浄刃だけど」

「では、神淨刃くん。実のところ、君に手を差し伸べるのはもう少し先送りになると思ってたんだけど……」

何の話をしているんだか……

「や、刃!!こいつの話、聞くんじやないわよ!!あいつは双角会の親玉だったんだから!!」

夜叉丸を指さしながら訴えてくる鈴鹿。

「鈴鹿、刃くんとは仲がいいんじゃないやなかつたのかい?一緒にいたいのなら、むしろこっちに誘ってくれないと」

「確認したい点が二つある。さっきの式神、お前だな」

式神……ああ、燕のやつか。

「私の仕業だ。こいつで一部始終を見たからね」

「目的は?」

「一番の目的は、ちよっかいを出してみたかったからかな。まあ、結果は圧倒的だったけどね。しかも本来の力を使わずに」

「……それは夜光の力のことか？それとも神としての力か？」

「わかった……次の質問だ。実は俺たち、蜘蛛丸つて式神の名の主とひと悶着あったばかりですよ。あんたまさか関係者かい？」

「いかにも。同じ主を抱くものだ。その者は相馬多斬子——」
「ファーストシール、パージ!!」

冬児が夜叉丸に特攻する。

だがそれは簡単に止められてしまう。

「へえ……おまえの主つて多斬子だったんだ。——死ね」

瞬時に踏み込み、『念』を発動し、『硬』で拳を最大まで強化して叩き込む。

あつけなく吹っ飛んでいくが、すぐに立ち上がる。

おお……すごい耐久力だ。

「土御門夏目は何の準備もなく死んだ。泰山府君祭をするにせよ、期限はかなり限られていると心得てほしい」

それだけ言って、夜叉丸は消えて行つた。
すると、こんどは陰陽庁のへりがやってきた。

『祓魔局、第五小隊だ!!土御門刃ならびに阿刀冬児、大連寺鈴鹿!!大人しく投降しろ!!』

これを聞いて冬児が拳を地面に殴りつける。

違うか?さっきの夜叉丸とのやり取りのせいかな?

鈴鹿は頭を抱えて怯えている。

そんな鈴鹿に俺は近づき、頭を軽くなでる。

「ああ……」

少し声を漏らす。

さて、やりますか。

このまま大人しく掴まってやるのも癪だからな……

「約束された勝利の剣（エクスカリバー）」

こいつを思いっきり振ってみますか。

今まで思いっきり振ったことがなかったし、いい機会だろ。

夏目が死んだのに被魔局の奴らは関係なく突つかかてきやがるし。

このくらいはしてもいいだろ？

へりは一機残しておけば十分だ。

「約束された（エクス）」

腰に構えて、思いっきり力を注ぎこみ、溜める。

そして――

「勝利の剣（カリバー）——!!」

全力で横なぎに振り向く。

もちろん、鈴鹿や冬児には当たらないようにな。

瞬間、ビルが吹き飛ぶ。

俺たちのいたフロアから上が全て消滅したのだ。

「うひゃー、すげえ破壊力だ」

「すごすぎだろ!!」

「何そのデタラメな武器」

冬児も鈴鹿も驚いています。

その後は、大人しくヘリに乗り込んだ。

そして、俺は鈴鹿と冬児とは違う場所に連れて行かれた。

まあ、取り調べて言ってたし。

もちろん、黙秘権を行使させてもらおう（笑）

そういえば、夏目はどうなるんだろう。

それに、この世界に明らかに他の奴の介入がされている。

それも気になるな……

まさか爺さんの介入ではないだろうし。

『箱庭』の時は仕方がなかったが……

何はどうあれ、問題が山積みだ。

第19話く護法・・・ぶふつく

—
???

あの後、取調室に入った俺は様々なことを聞かれた。

ヘリを襲った理由や、ヘリを襲ったときに使ったモノなどだ。

一番は烏羽織のことだった。

だが俺は、知らんの一言ですべて片付けた。

だって知らないもん(笑)

あ、誰か来たな……

この気配は多斬子の式神……

何でこんなところに？

「でなさい」

「ああ……」

「すまなかつた」

「あ、？」

今頃遅いんだよ。

謝るのならもつと早く来いよ。

ガキじゃねえんだから。

「謝られてもかえって不快だろうが、それでも謝罪したい」

「……テメエも元人間か？」

「ああ……私の名は六人部千尋。かつては、大連寺部長の元で働いていたこともある」

「あんたも元は双角会なの？」

「そうだ、この春の霊災テロにも関与していた。私が死んだのは、あの直後だ」

直後ねえ……

直ぐの後で直後。

「来なさい」

仕方がないからついていく。

しばらく歩くとエレベーターが見つかった。

そして、そのエレベーターに乗る。

「多斬子はどうした」

「薬で眠っていただいた。土御門夏目の死を知って、平静を失っていたので。主は本心から君や土御門夏目の友人になりたがっていた。本当だ」

「俺が夜光の生まれ代わり（笑）だから？」

「違う、彼女はただ——孤独なんだ」

孤独ねえ……

本当にそうなのかね。

俺は十分恵まれているように見えるけど。

そして、エレベーターが止まり、部屋に案内される。

そこには、おっさんがいた。

「初めまして、土御門刃くん。倉橋源司だ」

こいつが……なんか、ムサイ。

いかにも陰陽師つて服装で、髭が……ぶふっ。

「驚かないのかい？長官室に来たから分かったにしても、動揺が少ない」

なんか蜘蛛が教えてくれたし。

「娘のことは訊かないのか？」

「京子か？ああ、京子の知っていることなら俺も知っている。だから別に、ねえ？」

「そうか」

「俺を拉致つてどうするの？」

「土御門夏目を泰山府君祭で生き返らせるのに協力しようと思っていたのだが」

何言つてんだこいつ。

馬鹿じゃないのか？

いや、馬鹿だ。

「誰がそんなことを言った？俺か？俺はそんなことを言った覚えはないぞ。そこにいる眼鏡にも言わなかったか？泰山府君祭なんてことをしなくても生き返らせられると」

「何だと？そんなことができるわけが——」

「ないってか？ハハハ、俺を甘く見過ぎだ馬鹿者が。まだ千年も生きていないガキがいきがるんじゃないエ」

俺はソファにどかつ、と座る。

そして向き直って一言。

「まあ、この話はここまでだ。今度はテメエの話聞かせてみる」

「そうか……年齢のことは深くは訊かないでおこう」

源司は一度息を吐き、続けた。

「かつて土御門は、倉橋と相馬を従え、呪術の復興を成し遂げた。そして更なる発展と大いなる極みを目指し、叶わなかった。土御門刃。倉橋と相馬は今一度土御門を王にいた

だき、夜行の意向を継承する。強力を要請したい」

「ああ……：そうか。だからか。だから俺は分家で育てられ、破門されたのか」
「うぐう」

源司がうなる。

貫禄（笑）がある。

「俺を守ろうとでもしてたのか？わかんねえな。ああ、わからねえ」

守ろうとしてくれた奴はたくさんいた。

でも、こんな風に隠れてじゃない。

影でじゃない。

少し、目頭が熱くなった。

「倉橋」

眼鏡がそう言った瞬間に、電話が鳴り響いた。

「来客だ」

眼鏡が続けた。

来客……おお、この気配はジジイじゃないか!!

まさか俺と遊びに来たのか!!

うれしいねえ……今ちよつとイライラしてたからウサを晴らさせてもらおうか。

三人は何かを話し合っている。

俺はそんなことは耳に入らなかった。

ジジイ——蘆屋道満と何して遊ぼうか考えていたからだ。

何がいいかな？

忍術はこの前も使ったし……今回は気を使ってみようか？

いや、ここは神滅具を使うのもいいな。

「黒子(シャドウ)が何者か知っているようだな。ならなぜ彼が現れたかも想像はつくだろう。君の仲間たちもすぐそこまで来ているらしい」

源司が話しかけてきた。

何だよまったく……

せつかくどう遊ぼうか考えていたのに。

「んー？そかそか」

「わかっているだろうが、彼らは禁じ手で土御門夏目を復活させるのをよしとするまい」
「協力できるのは、禁忌を恐れない私たちだけだよ」

「いやー、アンタらもしつこいねエ」

協力はいらなくて言っているのに。

しつこい男は嫌われるぞ。

「土御門刃。我々の間に誤解と不快が残っていることは認めざるをおえない。それが将来的に解けると安易に保障するのはやめておこう。未来のことなど誰にもわかりはしないのだ。しかし我々は前に歩み出さねばならない。常に選択し続けなければならぬ。待望を抱くなら、死者を生き返らせるなどという望みを持つならなおさらだ」

そして間をおき、一言。

「選びたまえ」

「わかった」

そう返すと、二人は不敵に笑い、うなずき合つた。

馬鹿だろこいつら。

「——と言うとでも思った？馬鹿じゃねエの。なア、さつきも言つたよなア？あまり俺をナメすぎだつてなア。それにさ、まだ気づいてないのオ？」

「何にだ？」

「烏羽織の封印がア……解かれちやつたよオ!!」

「何!?!まさか——」

源司は眼鏡の方を向く。

「どうやらあの三人ではないようだ」

やべえ……あの三人つてのがものすごく気になる。

「彼らなら、気づかないはずがない」

「なら——」

その瞬間だった。

部屋の扉が開け放たれた。

そして、そこにいたのは蜘蛛だった。

その蜘蛛は扇を持っていた。

「あつぱれだ護法!!こつちも坊主がやってくれたぜえ!!」

源司がうなる。

「今だ坊主!!烏羽を呼べ!!」

「きな、烏羽」

とりあえず、烏羽織に呼びかける。

「夜叉丸!!」

源司が叫ぶ。

「はいはい、大人しくしてもらおうよ」

「やだよオ!! モード、天使。最大の拒絶」

「なんだその翼は——」

うつとうしいなア。

眼鏡を吹き飛ばす。

「うーん……ここは狭いねエ。こうすれば、広くなるよなア!!」

A Tフィールドの翼を飛ばたき、周りの壁を吹き飛ばす。

すると、周りが見渡せるようになる。

「ここに居たか!!」

声のする方を向くと、そこには鬼化した冬児がいた。

いいねエ……いいタイミングで来てくれた!!

でもそんなことよりジジイと遊びたいな。

でもでも、そんなことより、気になるな。

全然わからないんだ。

介入してきた奴が。

だが、妙な寒気が俺を襲ってくる。

部屋に閉じ込められていた時に強くなった。

この寒気を俺は知っている。

数万年前に感じたやつだ。

それも、『箱庭』に行く前だ。

神界でだ。

そしたらあの修行していた百年の間にあつた者……片手で数えるくらいしかない。

なぜだろう、嫌な予感しかない。

しかも、それは俺が死ぬとか、『神使』が死ぬとかじゃない。

ヤンデレ……？

そんな感じの嫌な気配だ。

ヤンデレ……

ヤンデレ!?

あいつか……

いや、あの方しかない。

世界は最初に、カオス（混沌）が生じた。その次にガイア（大地）とタルタロス（冥界）、そして エロース（愛）がともに誕生した。カオスからは エレボス（幽冥）と ニュクス（夜）が生まれ、両神が交わってニュクスは ヘーメラ（昼）と アイテー（清明な大気）を産んだとされている。

今でてきた神様が俺のお師匠さんだ。

しかも全員女性だ。

そう、女性なんだ……

その中でも、一人、ヤンデレちやってる方がいたのだ。

この寒気はその方が発してたものともものすごく似ている。

ああそうだ。

そうだよ……この寒気、心配は
カオスの姉貴じゃねえか。

今、介入してきた者が判明した。

第20話〈陰陽の道〉

——
???

「よう、冬児。鬼武者って感じでカツコイイぞ」

「そういうおまえこそ何だその翼は？神様にでもなったつもりか？」

俺、神様ですけど……

ああ、まだ知られてなかったね。

誰にも。

「こつちに来てい!!京子たちも来てるぞ!!」

「あいあい」

そう言いながら冬児について行く。

途中で眼鏡が何かしてきたが、全て弾き返した。

☆☆☆

「京子に鈴鹿か」

裏庭らしき場所で、京子と鈴鹿に合流した。

「馬鹿……」

「馬鹿……」

二人に続けて馬鹿と言われた……

可愛い子に言われると結構クるものがある。

「忘れ物だよ」

この声は眼鏡だな……

あいつは何なんだ？

ストーカーなのか？

全員が眼鏡の方を向く。

「今夜はちよつとはしやぎ過ぎたねえ。君たち」

「ガキがいきがつてんじやねエぞオ!!」

攻撃しようと、動作を始めた瞬間だった。

「うわあああああッ!?!」

上からガラスの割れる音と、天馬の悲鳴に似た叫び声が聞こえた。

そして、そのまま烏羽織と一緒に……ええ？

俺たちごと連れて行かれた。

一体どこに行くつもりなんだ？

——公園。

「眼鏡!!」

鈴鹿が天馬に向かって叫ぶ。

「何で烏羽がアンタと!?!てか、アンタなんているのよ!!」

それはもつともな疑問だ。

天馬のことだから逃げだしたかと思った。

「刃くん!! 伝言があるんだ」

鈴鹿を華麗にスルーして、俺に話しかけてきた。

「誰からだ?」

「早乙女涼さん」

うげえ……

嫌な予感しかない。

「もし君が自ら、泰山府君祭に挑むつもりなら、手を貸すって。先に待ってるからって。僕、彼女に会ったんだ。あと君に、烏羽が必要になるからって」

この発言に反応したのは京子だった。

「まさか一人で烏羽を盗ってきたの!?! 庁舎に侵入して!?!」

「京子ちゃん、今はそんなのどうでもいいよ」

そして、天馬は俺に向き直る。

「刃くん。夏目ちゃんを生き返らせるの?」

「もちろん。ああ、あとみんなも聞いてくれ。俺は夏目を確かに生き返らせる。だが、泰

山府君祭は行わない」

「「ええ!?!」」「……………」

京子、鈴鹿、天馬の三人は声を上げたが、冬児は何かを考えるようにあごに手を当てた。

「じゃ、じゃあどうやって夏目っちを生き返らせるの!?!」

鈴鹿が訊いてくる。

これは行ってもいいのか…………?

だがどうせ知られることだしな…………

生き返らせる方法も、カオスのことも。

「本来、魂の呪術に關しては人間が手を出していいものではない。これは鈴鹿が身を以て体験したことだ。だろ？」

「う、うん……」

「俺さ、人間じゃないんだ」

「」「え？」「」

今度は冬児も声を出した。

「俺さ、神様なんだよ」

そう言い、みんなの顔——反応を見る。

「か、み……？」

「神って……え？」

「神様ってあの？」

「なるほどな……」

京子、鈴鹿、天馬はまだ呑み込めていないようだ。

冬児にいたっては納得していた。

「だからお前は泰山府君祭をやらないと言ったのか。神であるおまえなら、そんなもの
必要ないから」

「そうだ……だがな、おかしいんだ」

「おかしい？何がだ」

それにしても冬児は冷静だな。

いや、冷静過ぎて気持ち悪いわ。

他の三人はまだ混乱しているのに。

「俺の力がな、反映されないんだよ。神である俺の力が」

「それは……ヤバくないか？」

「ああ、ものすごくヤバい。だってさ、いや、これは言ってもしかたがないことだ。今は
どうしようもない。話を戻すぞ……生き返らせる方法だが、泰山府君祭より大掛かりに

なる」

「何だと？」

冬児は目を見開いて訊き返してくる。

そこで、やっと他の三人の混乱が解けた。

「大掛かりって、どういうこと？」

鈴鹿が訊いてきた。

こいつ興味深々すぎだろ。

「この世界ではありえない量の力を呼び出して、魂を下ろす」

「悪いが駄目だ」

誰だ？

声のする方を向く。

「刃さま!!」

コンが短刀を構える。

勝手に出てくるなよ……

「どんな事情があるにしても、禁呪に手を染めるのを見過ごすことはできない。担任なら、お前も同じ意見のはずだな。陣」

大友まで来てんのか？

後ろに振り返る。

そこには確かに大友がいた。

「蘆屋道満を引つ張り出したのはお前だな。そこまで本庁が信用できなかつたか。どうせ俺に黙ってたのだから、俺の立場を慮ってだろう。生徒さえ解放できれば、後は自分が指名手配されて、万事解決か？ 相変らず尺にさわる気遣いばかりするやつだよ、おまえは」

「性分だな」

やべえ……

大友めつちやかっこいい。

「刃くん。禁呪つてのはなあ、世界の一部を担保にして行うゲームだ」

「何言ってるんだお前」

「勝てば見返りはでかいが、負ければ負債も術者だけにとどまらない。無関係の人間を巻き込むことになりかねない。たとえゲームに勝ったとしても、禁呪は最終的に我が身を滅ぼす。ようは毒なのさ、使用する術者そのものを、その心を蝕んでいく。それをもつて知っているから、君たちの担任は手を出さないんだ。陣、この子たちは俺が引き受ける。本庁が何を言ってるようと、決して渡さない。それでいいな？手伝えをは言わん。手だしするな」

こつちに歩いてくる。

「聞き分けろ、土御門夏目は——死んだ」

その瞬間だった、京子だ倒れた。

そして京子は眩きだす。

「今ある世界なんて、一部にすぎないわ……禁呪なんてルールは、所詮人が決めたものよ……刃……」

やけに溜めるな……

「夏目ちゃんの星が見える……夏目ちゃんは、あなたを待っている。だから、行ってあげて……」

そこまで言うと、京子は意識を失った。

「ククク……アツハツハツハツハ!! 最高だぜ京子!!」

「刃?」

冬児が声を出す。

「ああ、最高だ。良い事を教えてもらった。それに応えないわけには行かないじゃないか」

そう言いながら、徐々に力を開放させる。

「うんうん、良い事を聞いた。聞かせてもらった。それに応えるためには元の姿に戻らないとな……」

「元の姿って……」

天馬が声を出す。

少しいばりながら言ったやる。

「俺はこの世界を創造した神、創造神だ。俺の姿をその目に焼き付けな!!」

そして辺りを閃光が包む。

「「「「なっ!?!」」」」

閃光が消えると、そこには創造神の姿の俺がいる。

「創造神ジン、ここに参上」

名乗りを上げる。

みんなが俺を見ているのを感じながら、次の行動に出る。

「おいで、『神使』たちよ!!」

辺り一面に魔法陣が展開される。

金、銀、紅、漆黒、黒、白、白銀、桃、黄、蒼、青、様々な色だ。

「「「「御用ですか? マイマスター」」」」

天界で様子を見ていたのだろう、今回はまじめに登場した。

いつもみたいに抱き着いたりはしてこなかった。

「我が眷属、『神使』たちよ!!新たな同士を救い出すために、力を貸してくれ!!」
「「「マスターの仰せのままに」」」

『神使』が声をそろえて返事をする。

「おまえらも来るだろう?」

冬児、鈴鹿、天馬に言う。

「ああ!!」

「もちろんよ!!」

「行きたいけど京子ちゃんは?」

「一緒に連れて行けば問題あるまい。紅!!龍化せよ!!」

「はい♪」

紅が元の龍の姿に戻る。

「さあ、行くぞ!!俺に掴まれ!!」

すると、『神使』と冬児、鈴鹿、天馬と京子が掴まる。

いや、触れているって言うのが正しいか。

京子に関しては俺が抱き上げている。

「それじゃあな」

「ま、まて!!」

それだけ言い残して、紅の背中に転移した。

まってる夏目、今すぐ生き返らしてやる。

……カオスの姉貴はまだこないでくれよな。

第21話く魂を呼ぶ分けないでしょく

「どうするんだ刃!!」

紅の背中で冬児が聞いてくる。

「んー? まあ夏目を取り返して、人けの少ない場所だね」

その時だった。

チビ鳥の式神が大群でたかってきた。

うっとしい。

「フラン!!」

「はいはいーい!! 『狂気』全開、きゅっとしてドカーン☆」

そのチビ鳥共はフランの手によって一瞬にして爆散した。

「レテイシア!!」

「なんだ刃」

「俺は夏目を取り返してくる。先に紅たちを連れて行ってくれ!!冬児たちは安全なところまで下していくんだ!!」

「わかったぞ。無理はするなよ」

「もちろん」

レテイシアに指示を出す。

そして、冬児に向き直る。

「冬児、レテイシアの指示に従ってくれ。あと、行ってくる」

「おう!!行つて来い、刃!!」

冬児から激励を受けた。

激励って結構うれしいものだな。

「朱蓮、白!! 龍化しろ!!」

『赤龍帝の龍刀』と『白龍皇の龍刀』を出現させ、そのまま投げる。すると、両方とも元の二天龍の姿に戻る。

『いいのか? こんな街中で龍化しちまって』

『本当に大丈夫なのですか?』

「気にするな。紅が龍化しているのだからたいして変わらん」

そう言うと、朱蓮と白は納得してくれた。

そのまま、しばらく飛行し、ある程度のところで地面に降りる。

「ごめん、空で辺りの状況を把握してきてくれ」

『了解!!』『わかりました』

二人はまた空に戻っていった。

その時だった。

『刃様!!』

突然、コンが叫んだと思ったら斬撃が飛んできたのだ。もちろん、ATフィールドの自動防御が働いたので、俺自身は無傷だ。

「よオ、久しぶりだな、チンピラ」

「テメエを餌に大友をおびき寄せる」

そう言いながら、こちらに歩み寄ってくる。

コンが実体化して俺の前で構える。

「コイツをずいぶんかわいがってくれたな」

「何言ってるんだア？先に手エ出してきたのはそのでくの坊だ」

そう言いながら、『黄昏の聖槍（トゥルー・ロンギヌス）』を出現させる。

「ほお、やる気じゃねえか。こいよ刃。いつかの約束通り、存分に蹴飛ばしてやる」
「ほぎけ、人間が。神である俺の前だぞ。頭が高い——『跪け』」
「な——」

チンピラは強制的に跪かされる。

「今のうちに行くぞ、コン」

「ははあ」

翼を飛ばたかせて、夏目のいる場所に向かう。

しかしチンピラも学習しない。

前に一度、格の違いを教えなかったっけか？

まあそんなことは考えていてもしょうがない。

そして、またしばらくすると斬撃が飛んできた。

「なんだ？もう追っかけてきたのか」

俺がチンピラに声をかけるが、チンピラは答えずに周りの車などを斬撃で吹き飛ばしていった。

「で？何してんの」

「霊炎修祓だア!!」

そう言いながら、チンピラが俺に向かって刀を投げてきた。

「何してんだか……」

それを、神力を開放して吹き飛ばす。

刀はチンピラの方に返っていく。

チンピラは刀を受け取り、何か訳のわからないことをほざいて、炎を俺に向かって放ってきた。

面倒なので、逃げることにするか。

「逃げられると思うなよ!!」

炎は空高くまで追ってくる。

「ああ面倒だ。珠寶（マニラタナ）!!」

黄昏の聖槍の能力の一つ、珠寶。

襲い来る攻撃を他者に受け流すことができる。

全てチンピラに受け流す。

「なんだと!？」

もちろん、仕組みがわからないチンピラにはどうすることもできない。

と、どうやらコンも後を追ってきたようだ。

だが、コンの様子——姿、容姿がおかしい。

「ご無事ですか、刃様!!」

今までは幼女（最高）の姿だった。

だが今はどうだ？

中学生、へたしたら高校生と同じ容姿になってしまったのだ。

「何があつたんだコン!!その容姿は何なんだ!？」

「ははあ、元の姿に戻りかけた、というのが正しいかと」

「何ですとお!？」

親父……こんな仕打ちはひどえよ。

俺のさ、夢が一瞬にして砕けたよ。

確かに人の夢を書いて、儂いだけどき、もう少し早く知りたかったよ。

このタイミングで知ることじゃなかったよ……

「なんだってんだチクシヨウ!!神は死んだのか!?!あ、俺が神だったな」

「……………」

コンからの視線が痛い。

「ああ、とりあえず下に下りようか」

「ははあ」

チンピラもいつの間にか引いたみたいだし。
地面に降り立つと、一人の男が目に入った。
なんだか懐かしい感じだ。

これは……夜光の魂が反応している……
ということは……

「角行鬼か？」

「そうだが」

やはりそうか……

それより気になるんだが……

「コン、なんで跪いているんだ？」

「そ、それは……」

「ま、言いにくいならいいさ。夜光であり、夜光ではない俺に跪いてもしょうがないと思うのだがな」

そう言いながら辺りを見渡す。

見渡しながら、気配を探る。

あそこか……

微々たるものだが、夏目の気配を感じた。

よし……

もう一度、二人に向き直る。

「おまえたち、見ての通り、俺は人間ではない」

「存じ上げています」「わかってる」

コンが角行鬼を睨む。

そこまで敬語を使わせたいか。

「それでも俺についてくるか？夜光ではない、神である俺、神淨刃に」
「もちろんでございます!!」「ああ、ついていくさ」

できれば角行鬼はチェンジで……

無理だよなあ……

そうだ!!

「もう少しでこの世界から俺は出ていくことになる」

「なんですと!?!」「そうなのか」

コンはものすごく驚いてくれたが角行鬼は他人事のようにだ。

「それで、コンにはついて来てもらおうと思っている。いいか？」

「も、もちろんでございます!!」

「角行鬼はこの世界にいる俺の友を守ってもらいたい」

「わかった」

やったぜ!!

コン、Getだぜ!!

「じゃあ、そういうわけで」

「へ、え、あ、あ——」

コンの唇を俺の唇でふさぐ。

キスってやつだ。

そして、そのまま指輪とネックレスを付けてやる。

「よし、これでコンも『神使』だ。どうだ？封印も解けたはずだが」

「まことですか？」

「ああ……よし、準備も整ったし、行きますか」

「かしこまりました」「わかった」

それにしても角行鬼は愛想がないな。

☆☆☆

「よう、多斬子。この前は世話になったな」

「あ——」

俺の顔を確認するなり、声を上げた。

徐々に視線を下に持っていった。

俺の容姿を確認しているのだろう。

なんせ、今は創造神の姿だからな。

「刃……なのかい？」

「そうだ、まあ神の姿では初めて会ったな」

「神……そうだったのかい。なんとなく予想はしていたよ」

予想されちゃってましたか。

「とりあえず、夏目を返せ」

「……これだけは言わせてくれ。夏目のことは本意じゃなかった。でもそれは、君にとつては何の意味もないよね」

「そうだな」

俺がそっけなく返す。

「で、この後は？」

角行鬼が珍しく声を出した。

コンが動きそうになるのを、手で制す。

同時に多斬子も眼鏡を制した。

「姫？」

「夏目は渡す。もちろん、これで償えるだなんて思わない。けど……」

多斬子は肩を震わせる。

そして、こちらに歩いてきた。

同時に、後ろにいる二人もついてくる。
擦れ違い際に一言。

「刃、またいつか」

それだけ言い残し、多斬子たちは去っていった。

「はあ、またいつかねえ……会えたらいいね」

そう言いながら、夏目に近づいていく。

その時だった。

部屋に魔法陣が四つ展開された。

「刃様!!」

コンが俺の前に出て構える。

「ああ、大丈夫。おまえと同類、先輩にあたる『神使』たちだから」

「それはどういう——」

「もう!!みんな待ちくたびれちゃったよ、パパ」

「「パ、パパ!?!」」

「ごめんな、ヴィヴィオ」

どうやら俺がパパと呼ばれたのには流石の二人も驚いたらしい。

「こいつは娘のヴィヴィオだ。それで——」

「もう、自己紹介くらい自分でできるよ刃くん。初めまして、『神使』で魔法使いの神浄なのはです。よろしくね。それでヴィヴィオのママです」

「初めまして、神浄・T・アリシアだよ。よろしくね」

「姉さん、もう少し大人らしくしてください。まったく……神浄・T・フェイトです。アリシアの妹です。よろしくね」

「は、はあ……」

完全に啞然としているな。

二人とも。

「それにしても四人で来なくてもよかったんじゃないか？」

「ぶー、これだけ待たせておいそれはないんじゃないかな。パパ」

「わ、悪かった」

ヴィヴィオが……これが反抗期なのか!?

「ま、まあそれはおいておいて、夏目も取り返したことだし——行こうか」

「」「うん」「」「ははあ」「わかった」

部屋全体に魔法陣を展開して、紅たちのもとに転移する。

☆☆☆

「待ってたわ」

「なんで涼がいるんだ……」

紅の龍の覇気を感じ取って転移したはずなんだが……

「紅、どういうことだ？」

「い、いやあそれがさ、ここにいい感じの結界が張ってあったから……」

「はあ……まあいい。始めるぞ、お前ら準備しろ」

「「「「はい、マスター」」」」

『神使』全員の背中から金色の翼が生える。

そして、金色のオーラが全員を覆う。

夏目を中心に円のように周りに立つ。

「いいか、一気に開放しろ!!」

「「「「はい!!」」」」

俺は翼を広げて、そのまま夏目を包み込む。

そして、オーラが夏目に浸透していく。

「ツはあはあはあ……ふい。よし、もう大丈夫だろう。魂も確認できた。お疲れ様」
「「はあ……」」」

全員でやったとはいえ、かなり疲れたようだ。

「ん……んん……こ、こは？」

すぐに夏目が目覚めた。

「よお、まったく御寝坊さんだな。夏目は」

「刃……なの？」

「そうだ、こんな姿だけだな」

「その姿は、何？」

「神の姿……本来の俺の姿だ」

「刃くんは神様だったんですね」

夏目もようやく意識が覚醒してきたようだ。

「そうだ……おっと、時間がないな。夏目そろそろ行くぞ」

「い、行くつてどこに？」

「それは——」

そつから先は言えなかった。

見てしまったからだ。

見えてしまったのだ。

あいつの姿が、姉貴の姿が。

そして次の瞬間には吹き飛ばされていた。

☆☆☆

「刃!?!」

なんで冬児の声が聞こえるんだ？

「冬……児、なのか？」

「ああ、なんでそんな血まみれなんだ!?!まさかおまえ——」

「違う……はな、れる。巻き添え喰らうぞ!!」

どうにか立ち上がる。

やべえ……腹に穴開いてる……

自然治癒が全く効かない……

懐から『フェニックスの涙』極』を取り出して、腹に振りかける。

どうにかふさがったか。

「刃!! どういうこと? まさか失敗——」

「してねえ……いいから離れる、死ぬぞ。チィ、もうきやがった」

空には黄金が浮かんでいた。

神々しい黄金が。

「カオスの姉貴……どうした？何かよいか？」

「姉貴と呼ぶな、お姉ちゃんと呼びなさい」

「……お姉ちゃん、どうかしたか？」

「いやなに、おまえもすっかり神やっているようだから、最終試験でもなと」

最終試験？

それはあの百年の間に済んだはずだ。

「最終試験ねえ……合格するにはどうすればいいの？」

「簡単なことだ。合格するには私を殺せばいい」

「合格できなかつたら？」

「死、あるのみ」

瞬間、ザワワワワワと背筋が凍りつくほどの殺気が俺を襲った。

やべえな……

勝てるきがまったくいいほどない。

だがまあ……

「やるつきやないか」

神力を全て引き出す。

「へえ……なかなかじゃないか。あれから随分と強くなったみたいだね」

カオスの姉貴がほめる。

うれしいといっっちゃうれしいが、複雑だ。

「行くぞ、お姉ちゃん」

「きな、刃」

見ている者から見れば一瞬だっただろう。

俺が特攻して、姉貴がそれをカウンターで吹き飛ばす。

「がっはあ!!」

全然見えなかった……

相変らずデタラメすぎだな。

さすが原初の神だ。

「まったく……成長したのは力だけかい？もつと戦略とかないのかい？」

創造神の姿のままでは太刀打ちできない。

姉貴を壊し（殺し）尽くせばいいのだ。

だったら……

「まだまだこれからだぞ、お姉ちゃん!!」

創造神の姿から破壊神の姿に変わる。

「それが新しい力か……懐かしい波動を感じるね」

「そうか、やっぱりお姉ちゃんにはバレてるか。『破壊の刀剣（デストラクション・ブレ

イド)』

「その刀剣……どこで手に入れた刃」

『破壊の刀剣』を目にした途端、姉貴の表情が変わった。

恐れている。

そのように感じ取れた。

「コレは、なじみの分身が殺されたときに現れた。覚醒したつてのが正しいか」

「そうかい……やはりお前には資格があるようだ」

「資格？」

「おっと、まだそれを知るのは早い。さあ、続きをしようか」

今度は姉貴の方から特攻してきた。

手には刀を持っていた。

それも黄金に光っていた。

俺の刀剣と姉貴の刀が交わる。

それと同時に音声が鳴り響く。

『Destroy!』

それと同時に、姉貴の刀の十分の一が漆黒に染まる。

「やはり能力もそのままか……やつかいだ」

「お姉ちゃんはこの刀剣を知っているのか？」

「ああ知ってるよ。その刀剣は、もともと私の息子のものだった。おまえの師匠のなかにはいなかっただろう。なぜなら自らの力に吞まれちまったからね」

なんてもの使ってた俺は。

だがもう決着はついた。

なぜなら――

「あ――」

『Destroy!』

無情にも音声が届り響き、俺を起点とした半径6 mが漆黒に染まる。もちろん、俺と交戦していた姉貴はその範囲にいる。結果。

「忘れ、てたわ……」

「お姉ちゃん、チエックメイトだ」

あっけなく終わった。

姉貴は漆黒に染まって、ボロボロと崩れていった。

だから確信していた。

勝った

と。

だが、

「はああ、あせったわ」

「嘘……だろ？」

「嘘じゃないわよ」

後ろを振り向く。

「でもまあ合格ね」

「え——」

「ご褒美よ♪」

「むぐう——」

姉貴に思いっきりキスされた。

思いっきり深いやつ。

Deepなやつ。

「何して——」

やっと唇を放してくれた姉貴は唇のまわりをペロリとなめて一言。

「これからはあなたの時代よ。よろしく頼んだわ。——またね」

「それってどういう——」

そつから先は言えなかった。

姉貴が霧状になって霧散してしまったからだ。

「おいおい……」

だがさつきから身体から力が漏れ出す、というよりも吹き出しそうだ。

苦しすぎる。

これは一度全部解放したほうがいいか？

「もう……限界、ダアアア!!」

「「「きやあああああああ!?!」」」

俺の身体を心配してか、近くに来ていた『神使』たちが吹き飛ばされていく。

容姿にも変化が出てきた。

破壊神の姿が解除され、すると徐々に黄金が俺にまとわりついてくる。

「ふう……」

落ち着いた。

俺の姿を見直す。

身体は黄金に輝いていて、服装は姉貴の男版みたいだ。

力の次元も変わっている。

今までが一なら今は万はある。

もしかして……

「俺、カオスの力を受け継いだのか？」

それしか考えられない。

だが、俺だけでは確認の使用がない。

爺さんに訊くしかないか。

「とりあえず、一件落着か……『神使』の皆、行くぞ。神界に戻る」

「「「はい、マスター」」」

俺は夏目の方に歩いていく。

周りには冬児、京子、鈴鹿、天馬がいる。

夏目を抱きかかえる。

冬児を見る。

「冬児、今まで楽しかったぜ」

「ああ、俺もだ」

京子を見る。

泣いてんのか？

頭を撫でながら言う。

「京子、最初は喧嘩したな。でも、それもいい思い出だ」

「バカ……」

鈴鹿を見る。

こいつも泣いてんのか……

頭を撫でてやる。

「鈴鹿、やつぱり最初の出会いは最悪だった。でもだんだん仲良くなれたかな？俺は仲良くなれたと思ってる」

「やいばあ……」

天馬を見る。

「天馬、おまえはいいときにいつも来てくれた」

「うん……」

そして、みんなを見る。

「じゃあ、みんな。またな」

「「またね」「またな」

みんなに背を向け、『神使』の方に歩いていく。

「さあ、行くぞ!!」

空に、特大の黄金の魔法陣を展開する。

「じゃあな、また会える日まで!!」

「また会いましょう!!」

「また会おうね!!」

「またな!!」

そして、魔法陣に一番初めに俺が飛び込む。

その次に、レテイシアが。

次から次へと、『神使』が飛び込んでいく。

さらば、皆。

また会える日まで。

おまえらのことは決して忘れない。